が默々として流れる早瀬に接して小さな丘が見える。カッサンドラとヂョーヴァンニが共に腰を下ろす處は此の丘であつた。そして接骨木、苦蓬、蕁麻が絡み合つて、人の目にはそれと認め難い小徑が丘の上に通じてゐた。未だ一人も此の徑を通つた者はなかつた。で、二人は其處で逢つて、彷徨つきながら長い間何くれとなく話をするのであつた。

二

此の夜は蒸し暑く、稀れに時を隔てゝは疾風が起つて、白塵を揚げ、木の葉を舞はす位のもの、それが通り過ぎると靜かさは一段を加へる。聞えるものとては懶氣に遠くの地下で鳴つてゐるやうな雷の音、並びに此の低い莊嚴な威かすやうな唸りに對して、稅務署の吏員連中が近くの酒場で日曜の酒宴を催してゐると見えて、琵琶の調子外れな癈高い音に醉歌とだけ、其の外にはそよとも音がしない。折々雲間を破つて紫電が閃くが、其の閃く一瞬間は、黑暗々たる中にあらゆる物が――煉瓦の煙出しのある矮屋も、鍊金士の竈から昇る黑煙も、河岸に漁る長身痩軀の寺男も、落葉松と柳の列を成せる眞直な掘割も、伽藍の建築に要する白大理石をマヂョレ湖から運んで來る平船も、そして其の小船は哀れな馬が引つ張つて行くのであるが、其の馬のだらりと弛んだ曳綱も、又馭者の長い鞭も（此の二つは水中に漬かつてゐるのであつた）――峻嚴に且つくつきりと浮き立つてゐる。と、再び一切は闇に包まれて、目に見える物とては鍊金士の竈ばかり。竈の中に依然活潑に燃えてゐる火はチラ〳〵とカンタラナ河に映じて、淀み水や、腐れた羊齒の葉や、筌兒や、朽木の惡臭が、河の面から漂つて來るので、ために嘔吐を催す程であつた。

ヂョーヴァンニとカッサンドラの二人は毎時の場所に來てゐた。

『私厭やになつてしまふ、毎日々々詰らない事ばかりですもの』とカッサンドラは氣懶るさうに伸びをして、盆の窪へ廻した白い華奢な指をポキ〳〵音させた。『今日は昨日のやうだし、明日は今日と變りません。あの馬鹿な寺男は相も變らず何も漁りやしない。相も變らず叔父さんの仕事場から汚い煙が上つてゐるし、そして決して見付かりつこのない物を叔父さんは何處までも搜してゐらつしやる。あの小船も同じなら、小船を曳いてゐる憎々し氣な馬も同じ、破けさうな琵琶も同じです！私唯變化が欲しい！佛蘭西人が來て私達をミランの手から放して呉れゝば好いね！寺男が魚を一匹漁るか、私の叔父さんが金を發見するかすれば、何んなにか面白いでせう！ね、ヂョーヴァンニ、私退屈でしようがない！』

『私も其の覺えがあります』とヂョーヴァンニは叫んだ。『時々生きてゐるのが倦き〳〵して死にたくなる事があります。併し然ういふ不滿の惡魔に大變利き目のある祈りを坊さんのベネデットから敎はりました。言つて聞かせませうか？』

『それには及びませんよ、ヂョーヴァンニ。私があなたの神樣にお祈りの出來たのは最う疾うの昔の事なんです。』

『えっ、私の神樣？私の神樣の外に何んな神樣がゐます？一體限りの神樣ぢやないですか？』

宛然風雨の中を走る稻妻の如き閃光が此の時颯とカッサンドラの顏を照らした。あゝ其の顏——斯んなに美しい、斯んなに神祕な、こんなに下界の風塵を脫離した顏を、ヂョーヴァンニは未だ此の娘に見なかつたのであつた。

娘は兩手を黑髮の後ろの上の方に廻して暫らくの間默つてゐた。

『ま、お聞き下さいまし。此の話は彼處——私の生れた彼處の國の事で、最う隨分古いのです。左樣、私が未だ赤ん坊くらゐの時分で、父は或る旅行をした時私を連れて行つたのでした。そして古い社の廢墟を訪ねたのです。社は高い岬の上にあつて、私らのゐる側はぐるりと海になつてゐて鷗が啼いてゐました。縫針のやうに尖つて黑い岩は一面に鹽の泡が被ぶさつて、此の岩に打突かる波は粉微塵に碎ける。そして其の波は沸き立つやうな瀨をなして、黑岩の切り立つた尖端を流れて上下してゐます。父は此處で大理石の板の缺片に彫つてあつて半ば消えかかつた碑銘を發見したのですが、私は一人で長い間社の階に坐つて海の音を聞きながら、海草の匂ひの混ざつた新鮮な海氣を吸つてゐました。それから棄てられて居る社段へ行つて見ました。圓柱は黃色くなつてゐるだけで、隨分年代が經つてゐるに拘らず、崩れと言つては殆どありませんでした。柱の間から靑い空を見上げると曇つたやうに見えるし、石の隙間には罌粟が生えてゐる。薄桃色の罌粟です、希臘の罌粟です！實に森として耳へ來るのは蔽ひ包んだやうな波の唸りだけ。然かもそれが御堂の中一杯に聞こえるので宛るで祈りの聲のやうでした。で、私は跪いて、昔此處に祀つてあつた神樣——今は擯斥されて誰れ一人知る者のない神樣に祈りを捧げました、其の神樣の大理石の階に接吻して私は泣きました、そして神樣に對して愛を感じました、何故なら最早や神樣は地上の人に愛されもせず祈りもされなかつたからです——何故なら神樣は死んでゐたからです。私あの時くらゐ熱心に祈つた事はありませんでした。そして其の社は——其の社はヂオニサスの社でございました！』

『飛んでもない、あなたは何を言ふのです、カッサンドラ？あなたが神だといふ其のヂオニ

サスは生きてはゐやしません、又生きてゐた事もないのです。』

『えッ、生きてゐなかつた？』と娘は男を侮辱するやうに言つた。『ぢや伺ひませう、あなたが尊敬してゐらつしやる坊さん方は、耶蘇大繁昌の時代に追拂はれた神々は最も威力ある惡鬼に化したと敎へてゐますが、あれは何うしたのでせう？それから大天文學者のノヴァラのヂョルヂオは正確な觀測に基いて、木星と土星との相合の際にはモセスの敎が出來上つた、木星と火星の際はカルヂヤ人の敎へ、木星と金星の際はマホメットの敎へ、木星と水星の際は基督の敎が出來上つた、そして自分が死んでから木星と太陰の相合する際は、非基督の敎と諸神復活が生ずる事を知つたさうですが、あれは一體何うしたのでせう？』

風雨愈々迫つて雷鳴は益々烈しい。紫電に一層の閃光が加はつて密雲は頭上に擴がつてゐる。然かも調子外れな琵琶の音は未だ强情にも此の威嚇的な空へ啜り泣きして行く。

『お、あなた！』とヂョーヴァンニ・ボルトラフィオは自分の兩手を握り合はして叫んだ。『あなたは惡魔が分りませんか、惡魔はあなたを賺して深淵に陷まらさうと思つてあなたを誘惑してゐるのですが、それが分らないのですか？惡魔の畜生、永遠に呪はれて居ろ！』

娘は振り向いて兩手をヂョーヴァンニの肩の上に載せた。

『然ういふあなたも惡魔に誘惑されてゐらつしやいませんか？あなたの先生であつた坊さんのベネデットの處を何故出ましたり？何故あなたは不信仰なレオナルドの塾に入りました？何うした譯で此の私の處へいらしつた？私が魔術を使ふ事をあなたは知りませんか？此處で斯うしてカッサンドラと話をしてゐる内にも、あなたの魂が亡くならないとも限らぬと、あなたは恐ろしくは思ひませんか？』

『神樣の御威力は私等を守つて下さいます！』と彼は身を顫はせつゝ吃つた。

女は何も言はずに男の方に寄り添ふて不可思議な目を男に注いだ。其の刹那、紫電一閃雲を劈いて女の青白い顏の上に光つた。おゝ此の女はあの女神であるのか？水車山上の墓を出てヂョーヴァンニの愕然たる凝視の前に立つたあの女神、あの白夜叉であるのか？

『あれだ！』ヂョーヴァンニは恐怖しつゝ心で思つた、『あの白夜叉に再び見付かつたのだ！』

そして起ち上らうとしたが、身體の力が何處かへ拔けて行つたやうであつた。其の時自分の頰に娘の熱い氣息を感じて次ぎのやうに呟くのを聞いた——

『あなたは私に何もかも打明けて貰ひたいのでございますか？あの神樣のゐらつしやる處へあなたは私と一處に飛んで行きたいのですか？まあ何んて好い處でございませう、彼處は！彼

處なら退屈もなければ何も恥ぢるに及ばんのです。彼處では丁度樂園のやうに何事も思ひの儘なのです。』

ヂョーヴァンニの額には冷汗がにじんだが好奇の念に促されて低い聲で尋ねた、

『何處です、それは？』

『アル・サッバト（安息日）ですよ！』と朱唇をヂョーヴァンニの頰に觸れさうにして答へた聲には烈しい氣懶るさが籠もつてゐる。

正に此の時頭の上で霹靂一聲して天地を震動させた、ガラ〳〵鳴る音は目に見えない巨人の笑聲のやうで、森嚴な反響をして空中に鳴り渡つた。そしてそれが段々消え去つて遂に大沈默と化した。

それから僧院の鐘――入相の鐘は憂鬱な中にも平和な音をして鳴り出した。ヂョーヴァンニは十字を切つた。

『私最う遲うございますから家へ歸らなきやなりません』と娘は起ち上つて言つた。『あなた、あの松明を御覽なさい。あの往來を通る松明を御覽なさい。あれは陛下が叔父のガレオットの許へ入らつしやるのです。叔父は鉛で面白い實驗をして陛下にお目に掛るのださうです。當人は其の鉛が金になるのだと思つてゐるのですから。』

まこと其の言葉に違はずヴェルチェルリナ門の方から馬蹄の憂々たる音の來るのが聞こえた。カッサンドラは暫らく彷徨いてゐたが、纏り合ふた接骨木の茂みの中へ突と這入つて消え去つた。

三

ガレオットは終生を哲人石の探究に費した。彼はボロニヤ大學の醫科を終へてから、秘密學の巨擘として名聲嘖々たるベルナルド・トレヴィサニ伯の門に入つて其の助手となつた。後、十五年間、これといふ見込みあるありとあらゆる物質――例へば揮發鹽類、蒼鉛、砒石、血液、膽汁、毛、動物、植物の中に、變質力を有する水銀を探り求めた。自分の手に這入つた遺產金六千ヴカットは斯うして煙になつて烟突から消え去つたので、是非とも他人の財產に倚つて生きざるを得ない境涯になつた。そして債權者連のために獄に投ぜられたが、破獄して八年間に卵を破ること約二萬個、以て實驗の用に供したのであつた。尋いで法王の書記僧たるエンリコ師に從つて緣礬を研究したが、其の毒烟のため十有四ヶ月間疾に臥し、最早人々に見捨てられた

體に將に死が臨まうとした。ありとあらゆる屈辱、迫害、飢餓、赤貧、侮蔑、そして法律の苦痛にさへ耐へて、佛蘭西、西班牙、羅馬帝領の諸國、和蘭、希臘、波斯、巴列斯坦、北部阿弗利加を渡り職人として遍歷した。そして遂に年老い神身疲れて（併し彼の幻想だけは未だ破れずに）ロンバルヂへ歸る事になつた、それはイル・モロ公のために宮廷錬金士の職に補せられたからであつた。

彼れは乃ちミランのヴェルチェルリナ門前の一つ屋を實驗室と定めた。それは大きな室で、中央には仕切り付きの不器用な耐火竈があつて、それには扉、坩堝、鞴などの備付けがあるし、室の一隅に廢物があつた。それから其の仕事樣はあらゆる種類の複雜な、器械、立方體、延曲器、蒸溜容器、蒸溜器、漏斗、乳鉢、試驗管、瓶、液盤なぞが入り亂れて堆く、有毒性の亞爾加里及び酸性物から辛辣な臭氣が發してゐる。そして此の室ではオリンプスの七神、天上界の七惑星、所謂神秘不可思議な全宇宙が、鑛物に配されてあつた。即ち太陽を金、月を銀、金星を眞鍮、火星を鐵、土星を鉛、木星を錫、水星を水銀に配してあつた。又野蠻な名稱を附した材料が此の樣の上にあるので、人が此の名を耳にすればこれは神を冒瀆する底のものだと恐怖に打たれるのであつた。其の他、狼の乳、アキルレスの鐵、櫃如の實、星石（これは明るく光る石で內部の中央には滿月の形があつた）、雌雄兩性體、大黃、牡鹿草又の名安產草（蓋しこれを用ゐれば安產するといふので）、無限の價値ある獅子の血の一滴（これを得るために彼は數星霜を要したのである）、諸病を治して永遠の若やぎを與へるといふルビー樣の赤い寶玉なぞも樣の上に載つてゐる。

そして此の樣に向つてゐるのは錬金士ガレオットで、短身痩軀、古蕈のやうな皺があるにも拘らず未だ矍鑠として倦む事を知らない人、今兩手で頭を支へて、熱心に熟視してゐるのは蒸溜器であつた。レトルトの中で沸々として低い音を立てゝゐる綠色の透明な液はヴィーナスの油であるが、此の學者の傍に點されてゐる蠟燭は、レトルトの中を通過して其の濃綠な光りを、古びた羊皮紙の大版型の書物の上に送つてゐる。此の書物は亞剌比亞の錬金士ヂャビラ・アブダルラーの著であつた。

階段の上にガヤ〳〵する聲と足音が聞えたので、老錬金士は起つて室をぐるりと見廻した。そして萬事の準備が成つてゐる事を見屆けた後、竈に薪を入れるやうにと啞の助手に手眞似でして見せて、貴賓を迎へにどつかは出て行つた。

四

一行は嬉々たる騎士や貴婦人で、晩餐とマルヴォアジー酒の席を起つて來たばかりのところであつた。一行の中にはレオナルド並に錬金學の精通者たる侍醫のマルリアニもゐる。そして婦人達が此の室に這入ると同時に、學究の密つそりした房が、忽ち香氣、絹の摺れ音、鳥の囀りの如き輕快な談笑で一杯になつた。長い釉でレトルトを顚覆させる婦人があるかと思ふと、鐵滓をいぢつてゐる中に綺麗な手袋を切らす者がゐるし、檯の上の水銀を零して生命の宿れるが如き銀の玉を見て歡んでキイ〳〵云つてゐる者もあつた。

『鉛が變質する時に惡魔が實際火中に見えますか？』とフィリペルタは情人たる西班牙の騎士に尋ねた。『斯んな實驗の席にゐては罪惡になりはしませんか？』

此の時錬金士ガレオットは突とレオナルドの耳に口を寄せた。

『實際のところあんたが來て呉れて私は非常に名譽ぢや。』

そして暖く握手して、相手の返答を待たずに、

『ま、ま、分つとる、分つとる！これは此の一行には秘密ぢやが、あんたと私だけで呑み込んでゐるのぢやて、ね、然うぢやござらぬかい？』

尋いで非常に愛想のよい微笑を含んで聲高に言つた——

『えゝ此の某の保護を給はる最とも高名なる名譽あらせらるゝ陛下を初め奉りまして、御臨場なされました最とも嬋妍たる御女性達のお許しを受けまして、某唯今より貴重なる變質を尊覽に供しまする。慮外ながら何卒御一同樣のお目止めを願ひ上げまする。』

そして先づ坩堝を取つて人々に示したが、それは緣に厚い耐火土の塗つてある溶融壺であつた。各自に其の壺を檢めたり叩いたりして何等誤魔化しの伏在してゐない事を御承認になりたいと請ふと共に、彼のいかさま錬金士連が容器に二重底を拵へて、金を造るのではなくて其の底に入れて置くといふ慣用手段を罵倒した。更に充分の信用を得るため白鑞、薪、鞴、其の他あらゆる物の檢査を請ふた後、鉛を細かく切つて坩堝に入れて、竈の最も熱してゐる所にそれを置いた。啞で藪睨みの助手——此の男は甚だ靑白い上に宛るで骸骨のやうに物凄いので、一人の貴婦人はこれこそは待ち設けてゐた惡魔だと思つて殆く氣絕しさうになつたのである——は大きな對の鞴に風を入れ始めたので、火は早くも熖となつて跳んだ。其の間ガレオットは貴賓に話し掛けて愛想をしてゐた。自分の錬金學は丁度金錢が目宛ての遊女そつくりでござる。

浮かれ男は數多あるが、それが皆騙されてゐるので、容易い勝利は誰彼の嫌ひなく與へるけれども、偖て抱擁の一段になると、頭を振つて誰方樣も肘鐵砲でござります。など丶言つて賓客一同の歡笑を買つた。

侍醫ルイギ・マルリアニは肥えて無口で苦蟲を嚙み潰したやうな、そして威容と學識が彷彿として顏面に現れてゐる人であるが、この無駄口に我慢し切れなくなつたのか、額を撫で丶叫んだ——

『ガレオット殿、今が貴殿の仕事に丁度好い時ぢやと思ふが。鉛は煑え立つてゐますぞ。』

ガレオットは靑い小さな包み紙を開いた。中に這入つてゐる物は非常に光澤ある硝子のやうな光を放つて、粘ばり强いきら〳〵する黃色の粉末で、海鹽を燒いたやうな强い匂ひがした。此の貴重な着色劑こそは多年求めてゐた無限の價値ある錬金學の寶石で、即ち不可思議な哲學石であつた。

そしてナイフの先きで大さ蕪菁種程の粉末を分け取つて、それを蜜蠟の球に包んでから煑沸せる白鑞の中へ投げ入れた。

『其の溶融の力は幾ら程のお見込みかな？』とマルリアニは訊ねた。

『左樣、一に對して變質致すべき金屬の二千八百二十に當りまする』とガレオットは答へた。

『拙者の溶融が未だ不完全なのは無理もありませぬが、近いうちには一に對する百萬の數字を見られる事と信じてをりまする。然うなりました曉、唯つた稷の一粒くらゐの目方を小分けするだけで足りまする。即ち殺ぎ削つた榛を浸してある八斗の水に其の小分けしたのを溶かして、最後に其の水を貴殿の葡萄樹に注けますれば、それで以て貴殿は五月に葡萄の收穫が出來るのでござります。へゝッ、水銀だにあらば海を染めん哉ぢや。所要の水銀が拙者にありますれば見ん事海を變じて金に致しまするがな。』

マルリアニは此の大言を怒つて肩を聳やかして後を向いた。そしてアリストオトルを引いて論じ立て丶此の種の變質の不可能なる事を其の中で諷した。

『ま、お待ち下されい、大官閣下』とガレオットは莞爾として、『貴官の論理で論駁できぬ三段論法を唯今直きに提出致しますから。』

此の言と共に白い粉を一握み火中に投じた。濃烟濛々と室に漲つて、色彩の焰は、音を作して飛び上つた。そして靑は綠に、赤は黃に、宛ら虹を見るやうに色が變じたので、見物の人達は呆氣に取られた。フィリベルタは此の焰が紫色を呈した刹那、火中に惡魔の顏が見えたと

後に至つて斷言したのであつた。鍊金士は長い曲つた鐵棒で坩堝の蓋を揚げて見た。白熱した鉛はブツ〳〵激つて、シユー〳〵ゴト〳〵と音を立てゝゐる。そして再び蓋をしてから鞴を動かす事十分、やがて細い鐵の棒を坩堝の中へ入れるよと見る間に、其の端に黃色い一滴の懸かつてゐるのが一同の目に見えた。

『出來たッ！』と鍊金士は叫んだ。

そして竈の坩堝を取り出して冷ました。呆氣に取られてゐる見物人の前に、其の坩堝の中から燦然又憂然として土の牀の上に落ちたのは棍狀の黃金であつた。

と、鍊金士は仕草宜しくそれを指して叫んだ。

『此の三段論法を解いて給もれ！』

マルリアニは痲痺したやうに呟いた。『前代未聞ぢや！兎ても信じられない事ぢや！自然論理の一切の法則に反してゐる！』

ガレオットの顏は白くなつてゐる。靈感の火の輝きある其の目で天を見上げて彼は唸つた。

『お、永遠の神を頌め奉る！あなたの造り給うた物の中で最も卑しい我々にあなたの無限の力の一部をお與へ下された永遠の神を頌め奉りまする！』

そして硫酸を以て新製の黃金を驗めして見ると、それは匈牙利、亞剌比亞から產出する最良の金にも增して純なる物である事が分つた。一同は此の尊むべき學者の廻りに押し寄せて、讃辭を與へ且つ握手した。

イル・モロ公は鍊金士を傍に引いて、『ガレオット、其方は忠實に眞實に予に仕へて呉れるか？』

『陛下、拙者は生命が幾つも欲しうござりまする、願はくはそれらの生命を悉く陛下に獻じたうござりまする。』

『ではガレオット、他の何れの君主にも仕へないでな……』

『これは〳〵陛下、そんな事を匂はす君主が唯の一人たりともござりますれば、何卒拙者を絞殺なされて軀を犬に與へて下され』と言つて暫らく間を置いてから、極めて恭く敬禮して、

『陛下にお願ひがござりまするが……』

『何？又か？』

『神樣が證人でござります、これが最後でござりまする。』

『幾らか？』

『五千ヅカットでござりまする。』

公は打ち案じた後一千ヅカットに負けさせて、それを與へる約束を結んだ。最早や時間は遲い。ベアトリチェは案じてをらうといふので、各自は新製の金の缺片を錬金士から貰つて急いで歸りかけた。レオナルドだけは後に居殘つた。

五

そして二人限りになつた時ガレオットはレオナルドに言つた。

『偖て先生、拙者の實驗に對するあなたの御所存は如何でござりまするな？』

『あの金は棒の中に入れてありましたな』とレオナルドは冷淡に答へた。

『ハテ何の棒ぢやらう？それは一體何の事でござる？』

『あなたが溶けた鉛を掻き廻しなさつたあの棒です。私は殘らず見てゐました。』

『拙者の使用致した器具は凡てお驗めを願ひましたぞ。』

『併し驗めたのはあの棒ではありませんでした。』

『あの棒ではない！先生、これは御免……』

『殘らず見て知つてゐますと私は申しましたが』とレオナルドは微笑して言つた。『强情を張つては可けませぬ。金は先端に木の付いて居る空洞の棒の中に隱してありました。それが溶けた鉛に燒けて無くなると同時に中から金が落ちて出たのです。』

と圖星を指されて、老人の足はぶる〳〵戰き、顏には下賤な悲愴の色が擴がつた。

レオナルドは其の肩に手を掛けた。

『いや、御老人、心配なさるな。誰にも知れはしないし、私は告口をするやうな人間ではありませんから。』

詐欺師ガレオットは熱心にレオナルドの手を執つて、

『ではあなたは洩らしはなさりませぬな？』

『しません。私はあなたの不利を欲するものではありません。併し何故あんな誤魔化しをなさる？』

相手は『お、レオナルド殿』と言ふと共に眼中無限の失望は變じて希望の一閃となつた。『レオナルド殿、これは神明に誓つて申すのぢやが、縱しや某が詐欺を行ふたやうに見えましても、そは偏にミラン公國の福祉のため、又科學の勝利のためでござるぢや。何故かなら此の詐

欺を行ふもこゝ暫らくに過ぎませぬ。何故と仰有りませ、レオナルド殿。眞實のところ拙者は實際哲人石を發見したのでござる。と申しても現に所有してをると斷言するのではありませぬ、既に存在してをるといふ事實は拙者に分つてをります。即ち此處にあるも同樣と申して然るべきで、何故なれば其の方法を拙者は發見したし、そして御承知の通り方法は一切であるからぢや。今後僅か三四回の實驗を重ねますれば、御覽なされレオナルド殿、然すれば早や成功するのでござる。さて其處で拙者は何事を致すべきでせうぞ、恐らく斯かる大きな眞理を發見するためには斯くも小さな詐欺位は當然是認されないで何としませう？』

『然うではありません』とレオナルドは重々しく答へた。『一體何の目的であなたはさう私を目隱し遊びの相手になさる？私も知つてゐるが、あなたも金屬の變質などいふ事は根も葉もない夢であつて、哲人石なぞの存在する譯がないのは充分善く御承知でせう。錬金學、口寄せ、魔法、その他數學と確實な實驗とに基かない凡ての學問は、蠱惑でなければ詐欺に外ならないのです。左樣、風に膨らんで翩々たる野師の旗にも喩へらるべきものでせうか。只理解のわからぬ人々は何が何だか分らずに喝采しつゝ其の後から走つて跟いて行くのです。』

錬金士は驚駭の目を圓く光らしてレオナルドの唇を見守つてゐたが、レオナルドの言葉が終つても頓には答へが出來なかつた。が、良あつて慧し氣な首肯きをして目を瞬いた。

『まあ〳〵レオナルド殿、其のお說は役に立ちません。拙者は眞の手引きとも云ふべき身分、御自身こそは錬金士の王でござる。自然界の最も奧妙な幽秘物の所有者でござる。謂はゞヘルメス・トリスメギスッスの再來、新プロメシウスでござる。あなたが然うでゐらつしやる事は吾吾存じてをりすまるぞ。』

『私が？』

『御自身が。』

『それは冗談の積りで言つてゐるのですか？』

『いや決して。冗談は拙者でなうてあなたぢや。あなたの執着心の强い事、又心の奧底の見透かせないのには恐れ入りました！拙者はこれ迄學問の秘奧に到らん事を欲する人達を隨分見ましたが、併し貴殿程の人はついぞ未だ見掛けは致しませぬ。』

レオナルドは探るやうに彼を見た。そして怒らうと努めたが駄目で、思はず微笑をして、

『あなたは眞面目に此の種の術を信じてゐらつしやるのですか？』と訊ねた。

『信ずるかと仰有りまするか？ハテ偖てレオナルド殿、唯今此處へ神の出現があつて、ガレ

オット、哲人石なんてないぞとお告げになつたとしてが、拙者は斯樣に答へます。神樣、あなたが、拙者を生んで下さつた事は實證でござる。それと同じく石のあるのも實證なら其の石を拙者が發見致す事も實證でござる。』

これを聞かされてからレオナルドは最早や爭はずに興味を以て錬金士の空言に耳を傾けてゐた。やがて話は一般の秘密學に惡魔の手傳ひがあるといふ話に移つたが、老人は此の說を容れなかつた。そして神の造り給うた物の中で最も弱く最も貧弱且つ無能な者は惡魔で、自分は人の心に信を繫ぐのみにして、一切の事物は科學に依つて可能であるとさう聲言した。

尋いで突然、自身でも意識して唐突に話の途を變へた譯ではあるまいが、錬金士は愉快にそして氣を紛らすやうに或る追憶をしてゐるが如くレオナルドに、あなたは時々元素の精の出現するのを御覽になりませぬかと訊ねた。そしてこれを問はれたレオナルドは未だ曾て其の種の物を見た事のない旨を答へたが、ガレオットは其のお答へは拙者には眞實とは思はれませぬと言つて、さて樂しさうに話し、世にいふ火蛇は此の中指一本と其の半分くらゐの長さのもので斑があり、一體に瘦せて險のあるものであり、又空氣の精は青空見たやうな色をして身輕く透き徹つてをる、などゝ語つた。

ガレオットは、其の他河海に住む水精、水神、侏儒、小法師、地中の豆仙人の事、又林中に住む魑魅、魍魎、又稀に寶石を棲處とする精の事をも語つて、『總じてこれらの精の深切な事又美妙な事をあなたに言葉を以て傳へる事は出來ませぬが』と話を結んだ。

『では何故それらは人を限つて出現するのでせう?』とレオナルドは訊ねた。

『貴殿はそれらも萬人に出現させたいのでござるかな? 精は下劣な人間、放蕩兒、財物家、醉漢、大食漢を恐怖して、無邪氣な者、子供らしい者、淳樸な者を好みますのぢや。惡意のない處、狡猾の潜まぬ處をのみ住まひと致します。何しろ羚羊のやうに臆病で恐しがる性質であるに依つて、自らの生れた元素の中に居住して人の目を避けてゐる次第で。』

と言ひ終つて、無限の優しみある微笑が老人の顏に閃いた。宛ら長い前の夢を思ひ出したかのやうに――

レオナルドは、『これは愛嬌のある馬鹿老人だ』と思つて、最早や輕蔑の念を挾まずに、此の老人の喜びさうな無稽は學者の事に就いて共に跋を合せてやらうと考へて、丁度小兒に對するやうに懇ろな心持を以て待遇した。

そして二人は親しい言葉を交はして別れた。錬金士は自分獨りになるや否やヴィーナス油を

用ゐて再び實驗に沒頭した。

六

ガレオットの實驗室に上述の事があつた一方、階下にゐる此の家の女主人公シドニアは如何と顧れば、これは又カッサンドラと二人で切り爐の前に坐してゐたのであつた。夕飯の不味い蔬菜は爐の上で煮えてゐるし、老婆シドニアは皺寄つた指を毎時も同じやうに動かしながら絲卷棒を持つて亞麻絲を紡いでゐる。それをカッサンドラはぼんやりと眺めながら心の中で斯んな事を考へてゐた。

『相も變らず同じい事ばかり。今日は昨日のやう、明日は今日のやうと少しも變化がない。蟋蟀はころ〳〵鳴くし、二十日鼠はキー〳〵言ふし、紡錘はブー〳〵唸るし、爐には枯枝がパチ〳〵言ひ、蕪菁に葫の匂ひがする。』

間もなく老婆はお定まりのべラ〳〵文句を陳列べ出した——

『世間の噂では私が葡萄畑に錢瓶を埋めてゐるやうに言ふけれど、私はそんなお金持ちではないのぢやぞ。それは皆な取るに足らん話さ。そこ所か私は本統にガレオットの爺とお前のために身代限りをしさうだ。これといふのも私が餘り慈悲深いからの事、全く私には慈悲心があり過ぎる。でなければお前達二人の世話は出來ない筈だ。お前達は石臼さ、石臼が二つ私の首にブラ下つてゐるのさ。本統にカッサンドラお前は子供でもあるまいから行末の事を考へるが好い。叔父さんは何うせ一度はお陀佛になる身體、其の後に殘るお前は約百のやうに素寒貧といふ有樣。そこで結局は御亭主を持たなくちやならんといふ事になる。詰まるところアッピアテグラッソのあの伯樂へ嫁くが好いよ、あんなに馬鹿氣た眞似をしてお前の尻を追つ驅け廻してゐるのだからな。あんまり若い方ではないが、信心家で氣性が確つかりしてゐるし、役にも立たぬ夢のやうな事を考へる人ぢやないし、商賣繁昌の上に水車小屋もあれば阿列布油の壓搾器も一臺はあるのだからな。あれ以上の御亭主なんて兎てもお前あるもんぢやないよ。』

カッサンドラは唯默つて聞いてゐるうち、夢魔のやうに取り憑いた倦怠のため、喉を攫まれて窒息しさうになつた。此方から反抗的に出てわッと泣いて怒りつけてやりたいと思ふ念が殆ど堪へ切れない。

シドニアは汁氣の多い蕪菁を鍋の中から引き上げて、それに葡萄液を注け、見掛けばかりはさも旨さうな振をしながらムシャ〳〵長い時間かゝつて嚙んでゐる。併しカッサンドラの方は

焦けつばらな心が益々募りながらも表面は溫和しくしながら背伸びをして兩手をば髮の後ろで組み合せた。老婆は夕飯が濟むとコックリを始めて、其の度毎に手に持つてゐる糸繰棒に首が觸れる。其の樣は宛然として彼の運命の絲車を廻はすといふ女神が疲勞れて居眠つてゐるかのやう、そしてその言ふ事は切れ〴〵になつて何時しかムニャ〳〵に化してしまつた。其の時カッサンドラは例のお守りを取り出すと、爐の火が其の紫色の奥までをキラ〳〵と光らして臭れる。熟々その裸神の姿を眺める心に早や希臘の美しい神々に對する愛が漲つた。

カッサンドラは深い溜息を吐いた。そしてお守を隱してから遠慮勝ちに斯う言つた。

『叔母さん！今晩ベネヴェントとフェルラのバルコの二ケ所で會合があるのです。叔母さんあなたは本統に親切な善い叔母さんですから踊らずに唯見に行くだけにして、そして直ぐに歸つて來ませう。ね、私は叔母さんのお望み通りにしますからさ、思ひきつて伯樂の贈物をせしめる事にしますからさ。今一度だけ私の言ふ事を聽いて下さいな。さ、飛びませうよ！一しよに飛びませうよ……今直ぐにさ！』

然う言つた娘の目には飢ゑたやうな光りがあつた。老婆は訝し氣に娘をキョロ〳〵眺めると共に、其の靑味がゝつた萎びた唇が微笑のために開いて、黃色い牙のやうなのを一本見せ、顏は怖ろしい喜びで輝いた。

『ま、お前それがお望みなのかえ？餘程好きと見えるネ。最うあの味を覺えたのかえ？本統に斯んな娘は何處を搜したつてありやしないよ。私は毎晩飛んでも可いのさ。だけどお前考へて御覽、お前の心は罪に落ちるんだよ。ま、飛ぶなんて私今晩そんな事は思ひもしなかつたのだ。でも、お前のためだと思ふて飛ぶ事にしようか、これも皆私の心が餘り善過ぎるからだよ。』

そして老婆は敢て急がうともせず室內を歩き廻つて、窓の鎧戸を鎖したり、隙間に襤褸を塡めたり、戸といふ戸に錠を降ろしたり、火に水を注けたりしてから、魔法の力のある黑蠟燭に點火して、刺戟性の强い膏藥の這入つてゐる土製の容器を鐵の戸棚から取り出した。シドニアは思慮深いものゝ道理の解つて居ると云つた樣子をしてゐるにも拘らず、其の手は丁度酒を飲んだ時のやうに顫えて、窪んだ目は時としてはトロリと濁り、時としては石炭のやうにキラキラした。姪のカッサンドラは粉を揑る大きな木鉢を二つ、室の中央に持出した。

其の時シドニアは着物を脫ぎ、一つの木鉢に箒の柄を横にして自分は其の柄に跨つた。そして戸棚から出した膏藥を身體に塗抹し始めた。と、恐ろしい臭氣が室一杯にプンとする。此の

藥を用ゐれば巫女は過たず飛行できるのであつて、材料は毒萵苣に毒人參、犬山椒に蔓陀羅華、罌粟、菲沃斯、蛇の血、それから洗禮を受けない緑兒の脂肪と、此の八種であつた。

カッサンドラは老婆の身體の醜さを見るのが我慢し切れなくなつたので、しまひには後の方へ退さつてしまつた。

『何をしてゐるのぢや？』と老婆は小言を言つた。『私一人に飛ばせる氣なのかえ？さつさと着物を脱ぎなさい。』

『脱ぎますよ。だけど叔母さん其の明りを消して下さいな。明りがあつては私出來ませんもの。』

『馬鹿な—何ていふ恥づかしがり屋だらう！そんな事は氣にしなくて好いよ、山では恥づかしいなんて些つともないのだから。』

然うは言つたものゝフッと明りを消して、本尊の惡魔の歡心を得るため左の手で十字を切つた。

カッサンドラは手早く着物を脱いで、木鉢の中で膝を折つて、身體中に藥を塗つた。

語の聯續しないそして無意味な呪文を唱へる老婆の呟きが暗い中に聞える。

『瀛麵比丹、瀛麵比丹、巴留、婆留比理、亞斯多路得、我等に御力を假し給へ。亞剛羅、亞剛囉、巴塔唎沙、來つて力を假し給へ。』

カッサンドラは強烈な膏藥の匂ひを頻に嗅いだ。ために皮膚は燃えるやうに痛み、頭はグラグラする、快い感じがぞつと背を傳はつた。赤と緑の輪が入り亂れて目の前にクル〜廻轉した。そしてシドニアのうち任したやうな金切り聲が、何處か遠くの邊から聞えるやうな氣がした。

『ガルルッル！ガルルッル！そら上つた、上つた！それ其處で頭を打つちやならんぞ！飛んだ！飛んだ。』

七

『カッサンドラは黑山羊の柔かい皮に跨つて煙突の頂きから飛び出した。心は早や縹緲優揚となつて恍乎喘ぎながら初めて青空の中に這入つた、そして

『ガルルッル！上つた！上つた！飛んだ！飛んだ！』と若き鸕鷀のやうに叫んだ。

叔母シドニアは萎びて不具な身體を箒の柄に跨らせ、カッサンドラと並んで飛んでゐる。其の

薄い髪は疾風のためハラ〳〵と靡く。

『北へ！北へ！』と老婆は箒の柄を馬扱ひにして喚いた。

カッサンドラは憐むべきレオナルドと彼の厄介な機械の事を思ひ出して呵々と笑つた。

カッサンドラは益々上昇して行く。黒雲相集つて脚下で渦を卷いてゐると思ふと忽ちそれが鋸齒狀を爲した電光に靑く燃える。併し頭上の空は晴れ渡つて、手を差し伸ばせば屆く處に石臼大の滿月が皎として圓かに輝いてゐる。

で、急に恐ろしくなつて山羊を下の方へ向けた。と、山羊はカッサンドラを載せたまゝ下界へ逆落しに衝き進むだ。

『此の阿麗つちよ、首骨が折れたら何うするんだ』とシドニアは叫んだ。

そして兩人は極めて地上の近くを飛んでゐるので、さら〳〵鳴る牧場の草に觸れさうになる。道を案内する鬼火は朽ちて光る古木の幹のあたりを過ぎた。葦の間では哀れ氣に鳴く梟、五位鷺、夜鷹、の聲が聞える。

間もなくアルプス山頂を橫過した、玲瓏として埆石の如き嶺は月光に輝いてゐる。それから再び下降して海上に下りた時、カッサンドラは手で水を抄つて空中に撒くと、水球が碧玉のやうに飛散するので嬉々として喜んだ。

それから直ぐ兩人は歩を早めて、同じ仲間の矢張り山へ行く連中と近くなつたり遠くなつたりした。長い灰色の髮の魔法使は桶の上に乘つてゐるし、糞耙に乘つてゐる僧侶は赤ら顏の布袋腹でシレヌス其の儘の陽氣者、箒木に跨る金髮碧眼の若い女、それからぐう〳〵鳴く豚に乘つてゐるのは赭色の若い吸血鬼、其の他幾百となくゐる。

『姐さん達は何處から來たんだえ！』とシドニアは訊ねた。すると其の數約二十ばかりの聲が答へた。

『カンヂアから！』

『希臘列島から！』

『ヴァレンヅァから！』

『ブロッケン山から！』

『ミランドラから！ヴエネヴエントから！』

其の他某々の洞窟や北國の海灣の名を指した者もあつた。

『そして何處へ行く積りぢや？』

『ビテルネ！ビテルネ！ビテルネの山羊大王の婚禮にぢや。さ、飛んだり！飛んだり！早く行つて御宴に列らう！』と一齊に叫んで旋風に卷かるゝ鴉の大群のやうに陰淒たる荒原の上を馳せ過ぎた。月は紫色に輝いて遙か彼處、村の敎會堂の屋根にある十字架を照した。それを見た吸血鬼の女は十字架に打突かつて、鐘をも共に碎いて遠くの沼に投げ入れた。するとカチンと絶望的な音を立てゝそれが沈んだので吸血鬼は犬のやうな吠聲を立てゝ喜んだ。箒の柄に跨つてゆる〳〵翔つて行く亞麻色の髪の若い女も又愉快氣に小さな手を拍つた。

八

月は今雲に隱れた。松明の焰は靑や綠にゆら〳〵と燃えて、白堊質の高原に踊つてゐる巫女の黑い影は擴がつたり、車輪のやうに進んだり、縺れたり、解けたりしてゐる。

『ガルルッル！ガルルッル！安息日ぢや！安息日ぢや！右から左へ！右から左へ！』

そして枯れ朽ちた秋の木の葉のやうに無慮幾千の魔性の者は踊つた。其の中央の山上の玉座に坐してゐるのが大牡山羊のヒルクス・ノクツルヌス（夜陰の山羊）陛下である。

ガルルッル！ガルルッル！偉大なる夜陰の牡山羊陛下を頌するのぢや！ビテルネの牡山羊陛下を！ビテルネの牡山羊陛下を！我等の軍は濟んだのぢや！さ、喜べや、喜べや！』

死人の骨で作つた笛が響いて、絞殺された者の皮膚で張つた太鼓に狼の尾で作つた撥を當てて鳴らしてゐる。氣味の惡い糞物は大きい鼎の中でゴト〳〵煮えてゐるが、鹽は此處の陛下に取つて大禁物なので、糞物の中に入れてはなかつた。

人間の身ながら黑猫に化けてゐる仲間は、エメラルド（綠柱玉）の目に歡樂を溢らせて其處に踊つてゐる。細いすらりとした白百合のやうな色の娘達がゐるかと思へば、人の夢を襲ふといふ魔物、即ち不恰好な丁度蜘蛛のやうな灰色を帶びた奴が跳ねてゐるし、尼の連中に至つては身顫ひしてゐる。それから間抜けてはゐるが好人物らしい顏の白身肥大な巫女は低い河岸で二人の惡魔の嬰兒に乳をやつてゐる。二人とも未だ生れたばかりなのに早くも貪婪と惡心の芽が萠してゐるのであつた。年齡三歲の小兒連は大僧正のやうな服裝をしてゐるが、未だ酒宴の席に着かせない事になつてゐるので、饗宴主たる牡山羊陛下と共に澤山ある蟇を爪で抓んで食つてゐる。

シドニアとカッサンドラは踊に加はつた。踊は咆哮する風雨のやうに二人を吸ひ込んだりグル〳〵放したりする。

『ガルルッル！右から左へ！右から左へ！』

海象の髯のやうに長い濡れた髯がカッサンドラの首筋に觸れる。疲せてくね〳〵した尾が顏を擽つたと思ふと、圖々しく顏を抓つたり嚙んだりする奴がゐる。中には憎らしくも耳邊に色の言葉を囁くものもゐる。カッサンドラは敢てこれらの戯れに逆はなかつた。そんな事が烈しくなるに從つて益々面白くなり、愈々無作法になると共に愈々夢中になるのである。

突如會衆は化石したやうになつた。一切の聲は靜まつて一切の運動はピタリ止んだ。と、地震の唸りのやうな氣懶い呵れた吼聲が黑塗りの玉座から起つた。此の玉座に坐してゐるのは大『不可知』王で、傍の者は戰々兢々としてゐる。

『一同は予の賜物を受けい！弱き者には予の力、謙遊なる者には予の倨傲、心の愚なる者に予の知慧、惱める者に予の喜びを取らせる。予の賜物を受けい！』

其の時半白の髯をふり動かして容貌げな一人の老人が嚴かな聲で次ぎの歌詞を誦した。此の人は神聖宗門裁判廷の師父の一人で、同時に魔法師一流の頭領、且つ此の夜の魔法會式の司會者である——

『陛下の御名をば全世界に涉りて頌めたゝへよ。我等を災殃より救へ！』そして『汝等忠臣一同は恐懼して平伏しませい！』と命じた。

するとガタリと音がして會衆一齊に跪いた。そして宛ら一人の聲のやうに『魔法師の懺悔』を唄ふ聲が轟いた——

『我れは信ず、我等の神ルシファーを信ず、神は天地を造り給へり。我等は又其の御子ベエルゼバッブを信ず。』

歌の最後の音が消えて再び靜肅になつた時、『不可知』王はまた地震のやうな聲を出して叫んだので耳は聾するばかりであつた。

『予の花嫁を此處へ連れて來い！予の無垢な鳩を！』

すると例の長髯の老人が訊ねた——

『陛下の御妃、陛下の無垢なる鳩樣の御名は何と申しまするか？』

『カッサンドラ！カッサンドラ！』と大きな聲が聞えた。

自分の名を呼んだのを聞いた時、カッサンドラの血は血管の中で凝結し髮は逆立つた。

『カッサンドラ樣！カッサンドラ樣！』と群集の中から叫びが起つた。『何處に隱れてゐらつしやるのぢや？私等の君樣は何處にゐらつしやるのぢや？あはれ、來よかし、カッサンドラの

君！』

カッサンドラは思はず顏を隱して逃げようとすると、骨立つた指や、爪、觸鬚、長い鼻、毛むくじやらな蜘蛛の脚なぞが寄つて群つて自分を捕へて、顫えてゐる身體を玉座の前に引き据ゑた。すると山羊の臭氣、『死』の如き冷氣が襲つて來る。餘りの恐ろしさにカッサンドラは目を瞑つた。

と、牡山羊陛下は再び玉座から叫んだ。『來れ！』

『カッサンドラは首を垂れた儘で見ると、自分の足下に十字架が落ちてゐて、それが煌々と闇に輝いてゐる。これに力を得て一生懸命になつて漸つと前に一歩進んだ。そして目を擧げて見た。

其の瞬間に奇蹟が起つた。

即ち山羊の毛皮は蛇の衣のやうにカラリとその身體から落ちた。と、豈圖らんやカッサンドラはオリンピアのヂオニサスと向ひ合つてゐるのであつた。例の杖と葡萄の枝を携へて唇に永遠の喜びの微笑を湛へてゐるこのヂオニサスの足下には、豹が前足で葡萄の實を攫んでゐる。そして『巫女の安息日』は一變して酒神の神聖な酒宴となつた。巫女等は此の神の祭司となり、恐ろしい惡魔等は深切なる人身山羊足の牧神となり、大理石の圓柱に化した白堊質の岩石は、太陽に照らされキラ〳〵光つて、紫雲靉靆たる海が其の圓柱の間から見える。希臘の神々は一道の火の後光に圍繞されて雲間に集つた。そして牧神や祭司達は羯鼓を打つて、ナイフで胸を切り裂きながら、黃金の杯に葡萄の液を絞り入れてこれに血を混じ、ぐる〳〵踊り廻つて歌つた。

『ヂオニサスに榮光あれ！ヂオニサスに榮光あれ！神々は起ちぬ！永遠の諸神に榮光あれ！』

そして永遠に若いヂオニサスはカッサンドラを抱くため兩腕を開いて、

『花嫁、此處へお出で！無垢の鳩よ、此處へお出で！』と叫んだ聲は天地を震撼させる地震のやうであつた。

カッサンドラは身を投じてヂオニサスに抱擁された。

九

東雲を告げる鷄の聲が遠くから聞えて霞と煙の鋭い香氣が鼻を拍つ。鐘の音は徐ろに空中を

縫つて此の山を震はした。するとヂオニサスの祭司は又もや恐ろしい巫女となり、牧神は惡鬼となり、美はしきヂオニサスは巨大なそして臭い夜陰の山羊となつた。

『家へ歸らう！飛ぶのぢや！逃げるのぢや！』

『俺は糞耙を盗まれたぞ！』と絶望的に吠えたのは布袋腹の僧侶であつた。

『これ豚や！此處へ來て呉れ！』と赭毛の吸血鬼が叫んだが、山の濕氣に身顫ひして、嘘をしてゐる。

傾きかけた月は再び雲間を覗いた。怖氣付いた巫女の群は月光の蒼白たる紅の中を幾組も續いて不潔な蠅のやうに雪崩を打つて退却した。

『ガルルッル！ガルルッル！底から上れ！頭を打つな！命が大切だ。さ、飛んだり、飛んだり！』

そして夜陰の山羊は哀聲を發して地中に沈んで、腐つて窒息せしめるやうな硫黄の臭氣が殘つた。徐々に且つ莊嚴に響く寺院の鐘は益々澄み行く空の中で一層の勝利を告げてゐる。

十

カッサンドラはヴェルチェルリナ門側なる矮屋の中の暗室で自分の心に復つた。丁度酔後のやうに嘔氣がして、頭は鉛の如く、身體は疲れてぐた〳〵になつて居る。

聖ラデゴンダ寺の鐘は重苦しく且つ單調に鳴つてゐた。外では家の表戸を誰か知ら頻りに叩く者がある、何者であるか分らないが先つきから一再ならず叩いてゐる。

カッサンドラは耳を欹てると、聲の主は自分を欲しがつてゐるアッピアテグラッソの伯樂である事が分つた。

『これさシドニアさん、御願だから此處を開けて下されい！カッサンドラさん！二人とも聾になつたのかい？俺はヅブ濡れぢやぞ、此の雨風の酷いのに俺をムザ〳〵歸らす料簡ですかい？』

娘は立つて窗際まで引き摺るやうに歩んで行つて、叔母のシドニアが緊と鎧戸に塡めて置いた襤褸を取つた。すると雨の日のドンヨリとした光線が室内へ流れ入つて老婆の上に落ちた。シドニアは膏藥で汚れた裸體の儘高鼾を掻いて、木鉢の横の牀の上で死んだやうに熟睡してゐる。

カッサンドラは外を覗くと、天氣は恐ろしく惡い、篠衝く如く降り頻る雨の、宛ら網の目のや

うな中から、急き込んでゐる戀の男の姿が見える。其の傍には小さな牝の驢馬がゐて、荷車の梶棒に倚り掛りながら眠むさうな頸をダラリと垂れた。車の上のは足を括られた一頭の犢で、鼻づらを引き伸ばすやうにして悲し氣に唸つてゐる。

内から何の返答もないので伯樂は一段と高くドン〳〵叩く。カッサンドラは何んな成行きになるか見てゐようと控へてゐる。

すると遂に二階の窓が一つ開いて、老鉢金士は例の早朝の習ひとしてムッチリした顔を外へ出した。

『一體何ぢや、其の騒ぎは？貴樣は狂氣にでもなつたのか？畜生、地獄へ行けッ！皆んな未だ寐てゐるのが分らんのか？さつさと失せやがれ！』

『ま、ガレオット樣、何故あんたそんなに喧々言はつしやる？私は大切な用事があつて來たのぢやに。あんたの姪御の別嬪になり、遣ひ物を持つて來たのぢやに……若い犢を……』

『此の馬鹿野郎！貴樣と其の犢を惡魔に呉れつちまへ！』

そして鎧戸はピシャンと締まつた。伯樂は暫しが間開いた口が塞がらぬと言ふ始末。やがて氣が付くや否や粉微塵になれと計り拳を揮つて勢ひ猛に戸を叩き始めた。

驢馬は益々俛首れた。其の長い耳を雨は流れて居る。

『ま、何て斯んなに面白くないのだらう！』とカッサンドラは目を閉ぢながら呟いた。そして昨夜の安息日の狂熱の事、夜陰の山羊がヂオニサスに變じた事、古代諸神の復活の事なぞを考へて自問した。

『あれは實際あつたのか知ら、それとも夢か知ら？全くの處あれは夢で今のこれが眞實さ！何時も日曜の次ぎは……必ず月曜よ！』

『開けないか！明けないか！』と伯樂は嗄れた聲を張り上げて死物狂ひの體。泥だらけな滾に雨が落ちて單調に泥水を撥ね飛ばしてゐるし、犢は憐れ氣に啼いてゐる。近間の僧院の鐘は同一樣に且つ憂鬱氣な音して鳴り續く。

五の巻　汝の意思の如く成させ給へ――一四九四年

嗚呼爾力の源よ、爾の裁判こそは崇むべきなれ！爾は未だ力に對して其の必然なる効果に順序と性質とを缺かしめたる事あらじ。三たび驚嘆すべきは爾必然性なる哉、嗚呼！――

――レオナルド・ド・ヴィンチ。

御意の天に於てなる如く、地にもなさせ給へ――主の祈禱。

一

爰にコルボロなる男はミランの市民且つ靴屋であるが、或る夜のこと一杯機嫌で歸宅すると、彼の所謂『疲勞れ切つてゐる驢馬に鞭つてミランから羅馬へ跑けさすよりも最つと酷い打擲』を妻君から頂戴したので、其の翌る朝、細君が隣家へ黑ブヂングを取りに行つてゐる隙を窺つて、蝦墓口の中へ密つそり隱して置いた何がしの錢を綺麗に取り出してから、店を小僧に預けて、

一つ朝酒を聞召して元氣を回復しなくちやとブラリ表へ出たのである。

そして絲の脱ちたズボンの兜衣に兩手を突込んで、狹い往來をブラ〳〵歩いて、(其の狹さつたらないので、馬上の人は何うしても道を歩いてゐる人を拍車で突つかざるを得ない程であつた)、油や、腐れ卵や、酸つぱくなつた酒や、黴びた窖なぞの相も變らぬ臭い匂ひを嗅いだ。そして口笛で何かの節をビユー〳〵吹いて、屋根と屋根との間から、細い條片のやうに見える青空や、日に干すため小路を横つて幾筋にも擴げてある樣々な色の襤褸や破れた衣類を見上げながら、己が好む金言『毒婦と美人とは倶に權威を揮はん』(併し此の金言の敎へをば少しも守らない癖に)を思ひ出して、平かならぬ心を慰めた。

そして近道をするため未だ普請中なる伽藍の構内を通つた。構内は雜沓して其の騷々しさは丁度市場へ行つたやう、猥りに入る者は五ソルヂの科料に處せられる筈なのに、酒を持つた者、籠を擔いだ者、夫々箱、行李、盆、板、梁、風呂敷包みを抱へて行く者、甚しきに至つては驢馬や騾馬を曳いてさへ、門から門へと通り抜けてゐる。僧は祈を捧げ聖歌を歌つてゐるし、神壇に燈明がチラ〳〵して、懺悔室からは低聲で何か言つてゐるのが聞えるのに、これは又何とした、子供の蛙飛び、犬の喧嘩があるかと思へば、頑丈な乞食共が我れ勝ちに群つて來て施しを強情して居る。コルボロは暫らく人込みの中に立ち止まつて、内々は興味を感じながら、フランシスカン僧とドミニカンの僧が宗論をしてゐるのを聞いてゐた。論の主意は惡魔が退轉したゝめ天國では席が一つ空いた儘になつてゐるが、それを要求すべき權利はフランシス上人にあるか或はカタリン比丘尼にあるかと云ふのである。

暗い伽藍からアルレンゴの廣場へ出ると急に太陽の強い光線に當つた靴屋は思はず目をパチクリさせた。此の廣場はミラン府中最も活氣ある場所で、小商賣の店が櫛比して建ち並び、それに荷箱、ガラクタ物の類が所狹きまで置いてあるため、動もすれば往來の人は歩行も出來ない程であつた。これらの店は隨分古くから何時とはなしに廣場を滅茶苦茶に埋めたので、此處から立ち退かさうと如何に規則を布き科料に處しても寸毫の効もないのである。

『さあ〳〵ヴァルテルリナのサラド!レモンとオレンヂ!朝鮮薊に西洋獨活!さあ〳〵』と呼んでゐるのは八百屋である。

女古着商共がゴト〳〵言つたり、ベチヤクチヤ喋つたりしてゐる樣は、鳥屋についた牝鷄のやう。それから山と堆い葡萄に橙に花甘藍、茴香に唐萵苣の根、赤茄子、葱、の下に隱されたやうになつて、『へー……ホー……へー……ホー……』と苦し氣な呻きを揚げてゐる驢馬の痩せ

た腹を馬子はしたゝか打つて、『ほうら！……ほうら！』と喉聲で喚いてゐる。

杖をついて長い列を作つて行く盲人と、盲人の先導をする供人は共に打ち沈んだ冗々しい歎願の聲を揚げてゐる。數珠繋ぎにした齒を飾りにした帽子を被つた大道齒拔きは一人の男の肩車に乘つて、兩膝でその男の頭をはさみ、手品師のやうな早業で大きな鉗を扱ひながら、それで自分の齒を拔いてゐる。子供連は往來を通る人の足下で獨樂を廻したり、豚の頭を持ち出して、一人の猶太人を意地目たりしてゐる中に、餓鬼大將のファルファニッキオは市場の女共のゐる中へ甘日鼠を一匹放した。すると鼠は果物を賣つてゐるバルバッキアの廣い下袴へ這ひ上つたので、此の女は湯傷したやうに跳び上つて、惡少年等に毒づきながら、周圍も何も構ばこそ着物をアタフタ打ち拂つた。

豚の死んだのを持つてゐた荷擔ぎは此の惡戯を見るため不意に振り返つた。と、それに怖れた外科醫ガッバデオの馬は撥ね上りまたどつかと下りて、例の商店に積み重ねてあつた臺所道具を全部引つくり返したので、ソース鍋、フライ鍋、杓子、おろし道具の類がガラ〳〵轉がり崩れた音は、耳を聾する計り。醫者は兩手で馬の頸に獅嚙みつき、低い調子の大聲で、助けて呉れ！と叫びつゝ神と惡魔にチャンポンに祈るし、馬はそれに頓着なく恐怖せる醫者を乘せた

た儘跑けて行つてしまつた。犬は吠えるし、見物人は窓からもの見高い顏を突き出してゐる。高笑ひ、號泣、罵詈、口笛、叫聲は凡ての方面に起つた。驢馬は廣場の到る處で啼き立てる。

此の面白い光景を目擊してゐた靴屋は哲學者めいた口吻で獨語した——

『世の中は女さへ居なければ善い處なのだが。女といふ奴は丁度鏽が鐵を食ふやうに亭主を食ふからな。』

そして手を目に翳して、其處に足代を組んである未成の大建築物を見上げた。それは大伽藍即ち大寺院で、『生誕の聖母』を記念するためミラン府が建てゝゐるのであつた。

上下擧つて此の伽藍に寄進をしたので、例へばサイプラスの女王の如きは金の刺繍ある高價な織物を奉獻したし、年寄りの女屑屋のカテリナは二十ソルヂの價ある一枚限りの外衣を聖母の神壇に捧げたのである。コルボロは子供の時分から此の建築物の進程を見てゐるのであるが、此の朝此の度新に成つた尖閣の一つが見えたので嬉しい氣がした。

此の邊は到る處槌や全槌のカン〳〵云ふ音が聞える。キラ〳〵光る大理石の大きな板はマッヂオレ湖岸の石伐場から運ばれて、サント・ステファノ沼の大病院から遠くない或る船着所で陸揚げをした後、更に此の建築場へ來るのであつた。起重機の鎖が軋つてカラ〳〵と音がする。

鐵の鋸は大理石を伐つてゐるし、職人共は蛔のやうに足代の周りに群つてゐる。一日々々大寺院は斯くして生長し、無數の尖閣、鐘樓、純白の小塔が燦として青空に聳えて居る。實に此の伽藍こそはミラン府民が『生誕のマリヤ』に對する榮光として造營した永遠の聖哥であつた。

二

コルボロはこの廣場を出た後、急な段梯子を下りて酒樽の並んでゐる迫持造りの酒屋へ行つた。店の亭主は獨逸人で名をチバルドと云つた。靴屋は先客の連中に挨拶をして、兼て見知り越しなるブリキ職のスカラブルロの傍に御輿を下ろして、酒を一本と百里香の香味を附けた熱い饅頭菓子を誂へた。そして頬張つた口で長く緩々と一つ飲みながら、

『スカラブルロ、お前利口になりたけりや決して嬶なんか持つちや可けないせ』と言つた。

『何故だい？』と相手は訊ねた。

『何故つてお前、嬶を持つのあ宛るであれだよ。あの鰻を出さうとして甕の中へ手を突つ込むと、それが鰻ぢやなく蛇なんだからな。嬶を取るよりか痛風にでも取つ憑かれる方が增しなんだ、なゝスカラブルロ。』

此の二人の卓子の側には容易くもの事を信ずる性分のそして何でも喰ひたがる一群の人々が並んでゐたが、其の中の一人でマスカレロと呼ぶ陽氣な金工は樂土を頌する歌を唄つてゐた。其の樂土では葡萄の實が腸詰と一緒に房々と垂れてゐて、親鶫鳥一羽に子の鶫鳥一羽を添へて唯の一錢で賣つてゐる。チースが山を成して、それが整然と刻み目がつけられて食はれる計りになつて居る。去勢鷄の脂肪で鹽梅された伊太利團子とマカロニを呉れと言へばロハで投げて呉れる。それから水は唯の一雫も混つてない生一本無類飛切といふ白葡萄酒ヴェルナッキアが地中の泉から自然と湧き上る……。

其の時ゴルゴーリョといふ男が酒屋へ駈けて込んで來た。これは玻璃職人で目は瘰癧を煩つて以來半分位づゝ塞がつてゐるため、丁度生れ立ての狗子のやうな相好に見える。此の男は元來酒好きに加ふるに大の喋り好きで、今や帽子を取つて瀧のやうに汗の出て居る顏を拭きながら、

『おい兄い、兄い！俺あ今佛蘭人を見たせ！』と叫んだ。

『なんだ、ゴルゴーリョの野郎夢を見てやがる。今時分彼奴らの來る理由がねえ。』

『本統だと言つたらさ、ちやんと來てるんだせ。何でもバヴィアにゐるんだとよ。ま、それよりか一つ息を吐かして呉れ。駈けられるやうな天氣工合ちやねえのに、俺あ此處へ來るまで駈

け通しなんだ。それと云ふのもお前、一番に此の事を知らせたい計りによ。』

『さ、さ、俺の銚子で飲つて呉れ。ま、飲りながら話すとしてな。それで何かい、其の佛蘭西人と云ふのゐ何んな風の奴らだい？』

『それがさ、惡く出來てるんだ、兄い。大それた惡者だよ、おゝ皇天よ、我等のために佛蘭西毛唐を防がせ給へと來やがらあ！な、兄い、うつかり奴らの口へ指なんか出さうものなら喰ひつかれるぞ。第一慍りつぽくて、野蠻で、不信心で、宛るで猛獸さね。ま、早い話が蠻族でさ。何しろお前、長さ八ブラッチオ位ある火繩筒に眞鍮の矛、鐵の石砲を持つてるんだ。それに奴らの乘つてる馬だつても宛るで海から上つた化物さ、尨毛がモジャ〳〵生えてゐて、耳や尾が短かくチョン切つてあるんだよ。』

『で、澤山ゐるのかい？』

『然うともよ、雲霞の勢ひだぜ。野山に滿つる軍勢は喩へば蝗に似たりけりだ。第一何處まで續いてるか際限が分りやしねえ。これゐ察するところ俺達の罪を懲らす積りで神樣があんな黑死病、いやあの北の惡魔をお指し向けになつたんだぜ。』

『だがガルゴーリョ、お前何故然う佛蘭西人を毒づくんだい、あれは俺達の友人――俺達の同盟者になつて來たんだぜ』とマスカレルロが言つた。

『へゝ、同盟者だつて？おい、おい、默つて引つ込んでろい。懷中を御用心なさいだ。然うよお前あんな同盟は敵よりか譯が惡いんだ。ま、あんな奴は角を買つて牛を盜む性質なんだ。』

『たはけた事を言つちや可けねえ、ゴルゴーリョ。何故佛蘭西人を敵視するのか其の譯さへ話せば好いじやねえか。』

『ちや言つて聞かさう。俺達の作物を踏み蹂るからよ、俺達の木を斫倒して、家畜を掻つぱらつて、女子を手込めにするからよ。奴らの王樣は狒々なんだ、齒の奥に魂なんかありやしねえ、で以て女が大好きと來てるから、此の國一等の別嬪達を描いてある本を毎時も手放さないんだ。兵隊共の言ひ草は斯うだよ――神樣の御助力があるからミランからネーブルスにかけて生娘は一人でも只は置かねえつて。』

と聞いたスカラブルロは盃が動いて音のする位强く拳を固めて卓子を叩いて、『惡黨っ！』と呶鳴つた。

ゴルゴーリョは更に續けて、『そしてイル・モロは佛蘭西の笛の音に合はせて後足で踊をやつてるんだぜ。全體佛蘭西の奴らは此方共を人間の中へ勘定してやしねえ。顰めつ面して斯んな事

を言やがるんだ。貴樣らは皆んな泥棒と人殺し計りだ。正當の君主を毒殺したのは貴樣らだつた、無辜な幼主を殺したのも貴樣らだつた。依つて神罰貴樣らに降つて伊太利は我が佛蘭西人の版圖になるんだつてよ。何うだい兄い、それだに俺達は兩腕を斯う押開いて奴らを迎へて、そして御馳走をしてやつて居るわけな人だからな！』

『ゴルゴーリヨ、本統にお前は婆の寢言を言つてるんだ。』

『俺の言葉に間違ひがあつたら、俺あ盲にされたつて好いぞ、舌を切られたつて構やしねえぞ。ま、諸君傾聽し給へと來るかな。で、斯うだ、斯んな大それた事を奴等ア吐かしやがるんだよ。我が佛蘭西人は全伊太利の民を征服すべき運命を荷つてゐるのだ。ありとあらゆる海と、海の國民を屈服させてから、大土耳古を滅ぼし、進んでイエルサレムの橄欖山に眞正の十字架を樹てる。そしてそれを樹てたら更に伊太利へ來て神の嚇怒を貴樣らに示してやる。若し貴樣らが屈服を肯じなければ、伊太利といふ名は地球の表面から拭ひ去られるのだぞ——ま、これが奴らの言ひ草なんだ！』

『祿でもねえ事を聞くもんだ。これあ前代未聞の變事だな！』と金工マスカレルロが溜息する。他の連中は默つてゐた。

其の時坊主のチモテアが手を天の方に擧げて、嚴かな口調で次ぎのやうな事を言つた。此の僧は先刻伽藍の中で榮光ある聖徒の事に就いて僧チボルラと議論を上下してゐた喪家の犬の如きドミニカン派の一人である——

『ぢやに依つて神の大預言者ヂロラモ・サヴォナロオラ樣は斯う仰有つたのぢや——見さらつしやい、乃に劒らずして運命既に伊太利を征服すべき人が來るぞよ。おゝ、フロレンス！おゝ、羅馬！おゝ、ミラン！酒宴と歌の時代は過ぎ去つたぞ！悔いさつしやい、お前達悔いさつしやい！ヂアン・ガレアッツォの血、カインの迸らせたアベルの血は、神樣のお座の前で復讐を呼ばはつてゐるぞよ！——と斯う仰有つたのぢや。』

三

丁度此の時二人の軍人が店へ這入つて來た。

『そら佛蘭西人だ！見ねえな！』とゴルゴーリヨは仲間の者を肘で衝いて言つた。

此の新客人の中、一人は佛蘭西ガスコン地方の者で、年は未だ若く、形整つて背の高い好男子、押强い顏には赭色の髭が生えてゐる。これは騎兵の伍長で、名をボニヴァルといふのであ

る。今一人はムク〳〵肥つた老人で、首の具合ひは牛を見るやう、赭顔の目ははれぼつたく膨れて、耳に環が嵌まつてゐる。これはビカルヂ地方の産で、グロギョーシュと名くる砲兵でゐつた。そして二人とも既に微醉を帶びてゐる樣子。

『おい、神壇の聖餐に有り付いたぜ！』と伍長は砲兵の背を一つ叩いて、『斯んな厭やな町でもこれで到頭旨い奴を一杯引つ掛けられる處が見付かつたと云ふものだ。何しろ此のロンバルヂの酒と來ちや酸つぱくて醋のやうに喉を燒くのだからな』と言ひつゝ、ベンチの上でウンと伸びをして輕蔑の目をチラリ一座の者に呉れてから、手を鳴らして、拙い伊太利語を大聲に言つた。

『涸れて一等古い白葡萄酒と、それに先づ第一の肴として腦の腸詰を呉れ！』

『全く君の言ふ通りだ』とグロギョーシュは言つた。『俺はあのバーガンデの酒の事や、俺の妻のリゾンの髪の毛見たやうに金色をしてゐるあの高價なボーヌ酒の事なぞを考へると、すつかり氣が滅入つちまふのだ。な、おい、《酒は人の如し》とは甘く言つたものさな。さ、兄弟、佛蘭西の繁榮のために飲まうぢやないか。』

そして二人で歌を唄つた。

佛蘭西王國の殃ひを希ふ者に
大神の手ひどき呪ひあれ

『あれは何を言つてたんだい？』とスカラブルロはゴルゴーリ。の耳に囁いた。

『失敬な事を吐かしてやがるんだ！自分の國の酒を褒めて、俺達の酒を褒めないんだ。』

『あの二羽の佛蘭西鷄を見ろい。俺の腕は奴らの相手になりたがつてムヅ〳〵してるんだ』とブリキ屋は呟いた。

此處の亭主のチバルドは布袋腹の癖に蚊の脛見たやうな足の男、革帶の間に恐ろしい澤山な鍵をブラ下げてゐるが、今や酒を半ブレンタだけ酒桶から出して、それを土燒きの壜に入れ、至極怪訝さうに、二人の客を見守りながら其の前に壜を差し出した。ボニヴァルは一息に呷つて、此奴ゐ善い酒だと思つたもの丶態と唾を吐いて、さも厭やだと云つた顔をした。と、其の時チバルドの娘で姿の良い髪の毛の美しいロッテといふのが傍を通つたので、ガスコンの伍長は砲兵を肘で輕く衝いて、氣取つて管髭を捻りながら、グイと飲んで聲高に次ぎの歌を唄つた。

グロギョーシュも嗄れ聲を張り上げてそれに和する――

シャアルは數多戰ひて
伊太利國を征伐し
イェルサレムにぞ押し寄せて
オレブの山に登るらん

間もなくロッテは恥かし氣に目を伏せて再び傍を過ぎようとするのを、伍長は猿臂を伸ばして腰を抱へ、自分の膝に引き寄せようとした。それを娘は男を押し除け、其の手を振りもぎつて逃げにかゝつた。と、伍長は躍り上つて酒で濡れた唇で娘の頰に接吻した。あッと一聲娘は叫んで、手に持つてゐた水甕を下に落としてウンと一つ喰はしたので、伍長は一寸タヂ〳〵した。すると一齊に笑聲が起つた。

『よう出かしたぞ、阿魔ッちよ！ゼルヴァン上人も照覽あれ、俺あ未だ斯んな小氣味の好い一ビシャリは見た事がねえ。そして丁度好い汐時に一本參らせるなんて、これも未だ見た事かねえ』と金工が叫んだ。

グロギョーシュは自分の連れを制しようとして、

『構つちや可けない。馬鹿な事をして呉れちや困る』と言つた。

併し伍長は酒に心が亂れてゐる。口の片隅にだけ笑を浮かべて、

『おい別嬪、貴樣やりやがつたな。此奴あ腹に据ゑ兼ねたわい！今度は頰ぢやないぞ、其の唇だぞ！』と叫ひながら卓子を引つくり返して娘の後を追ひ掛けて引つ捕へ、あなや今言つた嚇し文句を實行しようとする刹那、スカラブルロの鐵腕飛んで暴漢の喉を扼した。

『へッ、此の犬の小倅奴！コン畜生、恐ろしい顰め面しやがる佛蘭西野郎だ！こら、ミランの娘つ子に手出しをすると何んな目に遭ふか思ひ知らさうかい』と罵りながら、小突き廻すので、伍長は將に窒息しさう。

『コ、コン畜生！コン畜生！此の惡黨、手を放さないかッ。佛蘭西萬歳！サン、ドニ上人、サンジョルジ上人！』と伍長は怒號して、劍の鞘を拂ふより早くスカラブルロの背へグサリ刺し通さうとした。と、此の時遲し、マスカレルロ、ゴルゴーリ、マーソ、其の他の面々が伍長を組み伏せて手を縛り上げた。此の騷ぎに邊は大混雜、卓子が引つくり返る、ベンチが壞れる、酒樽が

轉がる、壜の缺片が足で踏まれる、其處ら一面は酒の池となつた。

血と扮かれた劍と振り廻すナイフとを見たチバルドは表へ飛び出して、廣場へ一杯に徹る聲で、

『人殺し！人殺し！佛蘭西人がミランで掠奪してゐるぞ！』と叫んだ。

直ちに市場の半鐘が鳴り出した。其の合棒たるプロレットの半鐘もそれに和する。物賣人は店を鎖すし、果物賣りと女古着商は品物を荷に作つて彼處此處へ逃げ去つた。

『南無デエルヴァン上人樣、プロタン上人樣！守護のお上人樣方！何うぞ助けて下さりませ！』

とブル〳〵した聲で言つてゐるのは八百屋の肥つた女である。

『一體何だい？何が起つたのだい？火事なのか？』

『やッつけろ！佛蘭西の野郎をやッつけろ！』

例の餓鬼大將のファルファンニキオは嬉し相に踊つて歩るいて、口笛を吹きながら、

『佛蘭西の野郎をやッつけろ！佛蘭西の野郎をやッつけろ！』と叫んでゐる。

銃と槍を提げて威勢を張つて活劇の場所へ來た近衞兵と普通の軍人とはグロギヨーシュとポニヴァルの二人を野次馬の手から救ひ取つた。今少し後れると二人の生命はなかつたのである。

近衞兵は左右に居たもの共を引つ捕へたが、靴屋のコルボロもその一人であつた。

此の騷動を聞いて此處へ駈け付けて來たコルボロの女房は、憐れむやうに手を揉んで泣き立てた。

『何うぞ憐れと思召して家の人を宥して下さいまし！何うぞ此の可哀さうな夫にお慈悲を垂れて下さいまし！家へ歸りますれば篤と懲らしめまして、二度と喧嘩はさせませぬ程に、何うぞ旦那樣方、それは最う私の申し上げる事に僞りはないのでございます。家の人は元々何處に一つ缺け目のない好人物でございまして、繩を御かけになるやうな者ではございませぬ。』

併し夫コルボロは頭を垂れ、目を地に付けて、此の執成しを聞かぬ振した。そして身體のがつしりした近衞兵の後ろに我が身を隱してしまつた。女房に比して此の兵士の方が遙に恐ろしくないと彼は見たのである。

四

未成の伽藍を圍める足代の丁度上に方つて、主塔より遠くない細い尖閣の一に繩梯子を懸けて、其の小塔の頂に安置すべきカテリナ聖尼の小像を抱へながら、其の梯子を上り行く一人の

若い石工がある。前後左右に林立せる尖閣は鍾乳石の如く尖つてゐるし、其の他小塔や輕快な迫持、他に類例のない花や葉を紐形に連ねた石細工、預言者、殉教者、天使、惡鬼の醜兒、怪鳥、海の妖女、鳥身女面の像、鱗翼開口の龍、雨樋の端毎にあつてあらゆる怪物の形に出來てゐる水吐き等、樣々の裝飾が施してあつた。これらは凡て非常に純白な大理石から成つてゐるので、石の面に煙の如き青曇りの影を帶べる樣は、冬木立に霜が被ぶさつて、それがキラ〳〵光るのに似てゐた。四邊寂として、耳に聞こえるものとては燕と鸕鷀が絕えず建物の上の方並びに周圍を翔りながら發する嬉々たる囀り位のもの、それから廣場の雜沓は蟻塚から發する低い囁きのやう、又折々寺院の內部に起るオルガンの音、祈りの溜息はこれら石材の內部の奧底から來るやうに思はれた。そして此の廣大なる建築物の全部が呼吸し生長して空の方へ伸びて行く樣は宛ら生誕のマリヤを永久に頌するかのやう、又あらゆる人、あらゆる時代が聖處女に對して喜んで誦する聖歌のやうであつた。

突然ガヤ〳〵する音が廣場から聞えた。と思ふとそれがムク〳〵と增大して喧囂の聲がはつきりと石工の耳へ傳はつて來た。石工は仕事の手を止めて下の方を見下ろした。すると忽ち脚下の伽藍が動くやうな氣がして、今登りかけてゐる塔は葦の葉の如く撓へた。

『しまつた！落ちさうだ！神樣、私の魂を受けて下さいませ』と祈つて、死物狂ひに繩梯子に獅嚙み付いて、目を塞ぎながら低い聲で『あはれ慈恩深きマリヤ樣』と言つた。

すると幾分か心が靜まつたし、それに上から一陣の冷風が吹いて來たので、石工は元の心に回復して、力を絞つて上の方へ登つて行つた。そして地上の騷音に耳を傾けずに大なる熱誠を籠めて『あはれ慈恩に富むやさしきメリイ樣』と誦しながら、晴朗且つ靜寂たる空の方へ攀ぢ上つた。

丁度此の時、大理石造の廣やかな屋根を橫切つて來た人達があつた。これは伊太利人並びに外國人より成れる此の伽藍の委員會、即ち建築會の人々で、孰れも建築師であるが、主塔チブリオを圓屋根よりも高く出すに就いて會議を開くやうにと、イル・モロ公の命を受けて集まつたのである。此の中にレオナルド・ダ・ヴィンチもゐるので、彼は自分の設計書を提出したが、委員らはこれを高價に失し、巨大に失し、且つ寺院建築の傳襲と完全に一致せぬ理由の下に採用しなかつた。本件のために會議は異論百出して一致を見る事が出來なかつた。或る者は罵つて、此の建築物を搬めた者は斯道の知識に缺けてゐたゝめ內部の柱は甚だ脆弱で、チブリノ塔を初め其の他の小塔、尖閣を支持するに足らぬと言ふし、一方の人達は世の終りの日まで儼然と持

ち耐へて決して崩れないとの意見であつた。

レオナルドは此の論爭に加はらずに、默々として自分一人だけ側の方に控へてゐた。すると一人の職工が來て手紙を渡した。

『旦那、バヴィアの使が此の書面を持つて來まして旦那に屆けて呉れとの事でございました。』

レオナルドは手紙を開いて文面を讀むと、

レオナルド殿要用有之即刻御來臨被下度候。

十月十四日　　公ヂアン・ガレアッツォ

とあつた。

乃ちレオナルドは委員達にお先きに失禮と挨拶して廣場へ出た、そして馬に乘つてミランからは二三時間の距離なるバヴィア城へ馳せ付けた。

五

大囿園の栗、楡、楓は秋の太陽に照らされて金色紫色に燃えてゐた。枝々から音もなく落ちる木の葉は死んだ胡蝶のやう、雜草噴泉に蔓つて潺湲の音絶え、捨てゝ顧みぬ花壇には紫菀が枯れてゐる。

レオナルドは城の近くで侏儒に逢つた。これはヂアン・ガレアッツォ公の忠實なる童坊で、瀕死の公に仕へてゐる者は唯此の者一人だけであつた。馬上の人がレオナルドである事を知つて、童坊は走つて飛んで來た。

『殿下の御容態は！』とレオナルドは訊ねた。

侏儒はそれに答へずに絶望的な樣子をして單に手を振つた。レオナルドは表玄關に馬首を向けた。童坊はそれを抑へて、

『否其の道ではございませぬ。そちらでは數多の人目に立ちまする。イサベルラ樣に知れまするとお差し止められるに依つて、殿下は內々で貴殿に御來臨を願はれたのでございます。何卒こちらの道を御出で下さりませ。』

二人は一隅にある塔を這入つて段を上り部屋々々を通つて行つた。これらの部屋は昔は見事なものであつたらうが、今は物凄く荒れ果てゝ、金箔を押してあるコルドヴァの革は裂けて壁か

らブラ下がつて、玉座とその絹の天蓋には蜘蛛の巣が懸かつてゐる。秋風に散る黄葉朽葉は窓の破れ目からヒラ〳〵と舞ひ込んでくる。

『泥棒！　悪黨！』と侏儒は此の荒れたる樣を連れの人に指しながら呟いた。『レオナルド殿、まこと人の目は此處の有樣を見るに忍びませぬ。此の老耄れの不具者の外に何人かありまして殿下に奉仕し參らせてをりまするのなら、拙者は地球の最端へでも罷り行きたいのでございまする。いや、こちらの道でございます、何卒こちらの道から――』

そして窓を締め切つてあるため物暗く且つ藥の匂ひの重く漂ふてゐる室の戸を開いてレオナルドを中へ入れた。

六

蓋し此の時ヂアン・ガレアッツォ公は血を取つてゐたからで、それは外科の規則として蠟燭を點じ窓の鎧戸を締め切つて手術するのであつた。外科醫といふよりは寧ろ理髪師の方が本職たる覺束な氣な老人は血管を切り開くし、助手は眞鍮の盤を捧げて持つてゐる。醫者といふのはムッチリした頑固な顏に眼鏡を掛け、紫紺の頭巾に栗鼠の毛皮を着た男であるが、此の場合は自分で手を下さずに單に老人の切開するのを見てゐるだけであつた。これは外科器械に手を觸れては大醫の威嚴を損ずると思つてゐるからで。

『夜になる前に今一度出血が要りまする』と此の偉大なる醫者は公が手に繃帶を施され、舊の通りに枕に置かれてから言つた。

すると理髪師は鄭重な言葉で異議を言ひ立てた。

『先生、殿下の御出血はこれよりは後刻にお延ばしにしましては如何でございませうか？殿下は御衰弱の體にお見受け致しますので、餘り夥しい御出血では……』と言ひ掛けたが、醫者は目に冷々たる輕蔑の色を浮かべて自分の顏を見たので、中途で默つてしまつた。

『其方は人體の血液二十四磅の中で二十磅までは取つても害にならない事を唯今知つて置かつしやい。私は乳呑兒の血を取つて幾人も治したのぢやぞ。』

レオナルドは此の言葉を聞いてはゐたが、醫者を相手の議論は錬金士達と議論をすると同樣到底無効に終るべき事と思つて默してゐた。其のうちに庸醫は退出するし、侏儒は病殿下に蒲團を掛けて枕をなほした。寢臺の上に吊るしてある籠の中のは翡翠色の小さな鸚鵡で、卓子の上には骨牌や骰子が散らばつてゐる外、金魚の這入つて居るギヤマンの容器が載せてあるし、

公の裾の方には白の小犬が一匹眠つてゐる――これらは凡て此の忠僕が主君を娛ますためにやうやくなし得た僅かの試みであつた。

『手紙は屆いたか？』と病める公は目を塞いだ儘訊いた。

『殿下、レオナルド殿はお出になつてゐらつしやります。殿下の御睡眠を妨げてはとの御遠慮から態とお控へ遊ばしたのでございます。』

と聞いて公は力なき微笑を顏に浮かめて、身を起さうとしながら、

『でも到頭！予は又來られないかと內々危んでゐました。』

そしてレオナルドの手を取つた時、若い美しい顏（公は未だ二十四歲であつた）の上に弱々しい嬉色が擴がつた。侏儒は部屋を出て戶の際で見張りをしてゐる。

ヂアン殿下は口を切つた。

『例の流言は君の耳に這入りましたか？』

『流言と仰有ると？殿下、何の流言でございませう？』

『未だ知りませんか？それでは先生は未だ聞かれないのだ。聞かれなければそれで好いのです、お話する程の事でもありませんから……いや、話した方が好いかな、話して先生と二人で笑つてやらうかな。噂では――』と言ひ淀んで、レオナルドの目をまじ〳〵見守つた。そして靜かに微笑して、『噂では、あなたが予を殺さうとしてゐらつしやるさうで』と言葉を結んだ。

殿下は讒言を言つてゐらつしやるのだとレオナルドは思つた。併し公は語を續けて、

『これは全くの事なのです。あなたが予を殺さうとしてゐらつしやると言ふのです。最う三週間も前の事ですが、イル・モロとベアトリチェが見事な桃を一箱贈つて寄越しました。すると予の妃のイサベルラが言ふには、予がそれを食べてから見る〳〵身體が痩せ始めたさうです。それから先生の園に桃の木があつて、それには毒があるのだと言ひました。』

『それは實際でございます。私の處にそんな木がございます。』

『あ、先生！それでは實際の事で……』

『否、其の御心配には及びませぬ。果して私の園から出ました桃でありますと致しても何事もないのでございます。其の流言の起つた理由は多分私に說明できるかと思ひます。毒が木に及ぼす結果は何んなものか知りたいと思ひまして、園の桃の木に砒素を注入しました。そして弟子のヅォロアストロと申します者にその實に氣を付けてゐて呉れと戒めて置いたのでございます。で、多分ヅォロアストロは早まつて此の事を人に話したものと見えまする。何故と申し

ますれば、これは實際の話でございますが、實驗は失敗に終りまして、果實には矢張り毒がございませんでした。』

『然うだと思つた！然うだと思つた！』と公は吻と安心して言つた。『予が死んだとて何も他人に罪がある譯ではないのに、此處の者共は互に疑心を挾んで、誰彼を憎んだり恐れたりしてゐるのです！予と先生とで斯うして話してゐるやうに打明けて話し合ひさへすれば好いのですけれど……。皆は叔父の陛下がそれを爲したのだと邪推を廻すのですが、併し陛下は弱い小膽者ではあるが根は深切な人なので、予にはよく分つてゐます。予は位を喜んで叔父に讓らうと思つてゐるのですもの、予を殺して見た所で叔父に何の利益がありませう？予は何も要りはしない。此のパヴィア城を出て親友數名と自由な隱遁生活をする方が予に取つてどれ位望ましいか。或は墨染の衣を纏ふか、でなければ、レオナルド先生、予はあなたの弟子になりたいのです。併し然う考へて居ましても誰も予を信じては呉れますまい。決して權勢に未練なんかないとは信じては呉れますまい。あの人達は何故斯樣な惡事をしたのでせう？あゝ！あの憐れな盲人共は、予を毒殺するのぢやない、自分で自分を毒殺してゐるのだ！毒もない木の毒もない果實をもつて、予はね、先生、予は未だ若いのに惡運に祟られて死んで行くのだと思ふと悲歎に堪へませんでした。併し、先生、今では最う平氣です、心は平安なものです、丁度焦げ付く位熱い日に埃だらけの着物を脱ぎ捨てゝ、澄み切つた水の中へザブリ跳び込むやうな氣持ちでゐます。これはまあ何と言つたら好いか……先生には御分りでせうが……あなたの……』

レオナルドは靜に微笑して細い衰へた手を握りしめた。併し口を開きはしなかつた。

『あなたの悟つてゐらつしやる事は予にも分つて居ます、先生』と病人は氣を引き立てゝ言つた。『先生は覺えがありますか、何時でしたか斯んな事を予にお話になりました——人は自然の轉變を支配するあの永遠の諸法則を研究すれば自ら謙虛になるものだ、魂が大に平靜になるものだと斯うお話になつた事があります。あのお言葉はあの頃でさへ予を感動させましたが……おゝ先生、況してや今は斯んな病氣、斯んな寂寥——いや人事不省に陷つてゐる予に、何んなにかあれが犇々思ひ當るのです、先生御自身の事も、先生のお顏も、先生のお聲も……。で、時々予は斯んな事を思ひます、先生と予は道も違ふが併し今言つた目的物に同じく達したものだ……先生は生命の道から……予は死の道から……』

此の時室の戸が開いて侏儒が駈け込んで、あたふたしながら言つた。

『ドルーダがやつて來ました！』

レオナルドは室を退かうとしたが公はそれを押し止めた。やがて公の乳母役たる老女ドルーダは蠍の膏藥の瓶を持つて這入つて來た。此の膏藥は高價な鎭痛劑で、夏の眞つ盛り、太陽の巨蟹宮にある時、蠍を捕へて五十日間日向に曝し置き、それでも未だピク〳〵生きてゐる奴を、百年間貯へてある阿列布油とノボロ菊とミトリダテス（解毒劑）と伊吹虎之尾とを混じてある中へ加へて調製したものである。そして毎夜此の膏藥を病人の米嚙み、腋下、腹、並びに心臟の周圍に塗抹するのであつた。『箇樣になされますれば魔法、妖術のため御病氣をお受け遊ばす事はござりませぬ、毒藥とても利き目はありませぬ』と固く乳の人は言ふのである。

室に這入つて來たドルーダは、見ると殿下の寢臺にレオナルドが侍してゐるので俄に歩み止まつた。顏は忽ち灰のやうに白くなり貴い藥を手から落さん計りになつた。

『聖母樣助けて下さりませ！　お守り下さりませ！』と小聲を揚げて十字を切つて、魔除けと祈りの文句を口中でチャンポンに唱へた。此の恐怖すべき報道をイサベルラに齎さうと、老いたる足の續く限り、スタコラと駈けて行つた。

蓋し人殺しをしたルドヴィコ・イル・モロと、それと一つ穴の狸たるレオナルドの二人が企んで、殿下を亡きものにしようとしたのだ。毒を使用しないまでも、多分魔法を使つた上にあの邪惡な目で眺め殺すのだ――ドルーダは全然斯樣信じ切つて居たのだ。此の時公妃イサベルラは自分一人の禮拜堂にあつて、神像の前に跪いて熱心に祈つてゐたが、其處へドルーダは大に急き込んで這入つて來て、レオナルドが殿下の室に來てゐる次第を告げた。と、公妃は驚きの餘り跳び上つて、怒のため滿面に朱を注ぎ、

『そんな筈はない！　一體誰が通しました？』

『それはお后樣、あの魔法使の惡人が何うして這入りましたか誰にだつて解るもので御坐いますか！　これだから私は言はぬ事ではござりませぬ……』と言ひ掛けた所へ、扈從が這入つて來て、公妃の前で跪いた。

『お后樣とそれに殿下には佛蘭西國王陛下にお會ひ下さりませうか？』

七

イル・モロ公はパヴィア城の下庭敷をシャアル第八世の柳營に當てゝ、王のため此處に豪奢な裝飾を施した。王は今食後の休みに『羅馬府奇譚』といふ本を讀ませて聞いてゐる。これは拉典の原文を下手な佛蘭西語に譯したものであつた。

シャアルの幼少な時は病身の淋しい性分で、父王からなきものにしてしまへと嚇かされた事もあつた。彼は多年アンボアズ城内に住んでゐたが、其の間に武士道小說を讀んで無聊を銷し憂鬱を拂ひ除けて、ために腦を全然一變するに至らしめた（と云つても元來が最も强健な腦ではなかつたのであるが）。そして二十歲で位に即いた時は、ランスロット、トリストラムを初めとして圓形卓子の諸豪が心に充ち滿ちてゐた。朕はこれらの傳說的人物と對抗せねばならない、單に書籍と夢とに屬してゐた者を更めて實生活に實現するのが朕の運命である――と斯う信ずるに至つた。そして伊太利や東部諸邦を征服して異端のマホメット敎を剿絕するといふ縱ま

まなる希望に唆かされ、自ら大軍を率ゐて、アルプスを橫斷し、ロンバルヂーに下つた時、數多の宮廷詩人は王を軍神マルスの苗裔、ヂュリアス・シーザーの繼嗣なぞと持ち上げて、盡きせぬ諂諛の雰圍氣を浴せたのである。

此の夜王は『羅馬府奇譚』を聞きながら『永遠の都』即ち羅馬府が自分に加へて與れる名譽を思ふて莞爾としたが、併し頭は稍亂れてゐた。食が過ぎたせいか胃痛がするし、それに頭痛も手傳つてはゐるが、就中ルクレチア・クリヴェルリの美しさが一晝夜の間チラ〳〵して、其の姿が頭に浮かんでくるのであつた。

シャアル第八世は矮軀に加ふるに隨分な醜男であつた。胸部は窄く、肩は曲がり、足は火箸のやうに細い。鼻は大に過ぎて口は明け放し、其の出目は非常に近視であるため、始終キヨロキヨロした顏付をして居るやう見える。ぼや〳〵した髮は薄い計りか口髭は生えてゐない。手と顏とは痙攣のやうに蠢動するし、言語に明瞭を缺きて粗々つかしい喋り樣である。趾が六本あると噂されてゐるが、果して其のためか何うかは知らないけれども、彼が制定した宮廷の靴は黑の天鵞絨で作つた廣い撓々した物で、先の方は馬蹄の形になつて丸くなつてゐる。全體が斯うした不樣なのに加へて、例の悒鬱と放心とがあるので、此の人の印象は持つて生れた魯鈍を可なり能く保證するのである。

『チボー！チボー！』と例の粗々つかしい調子で讀書を止めさせながら、一生懸命になつて自分の言ひたい言葉を搜し當てようと吃りつゝ氣魂しく扈從を呼び立てた。『チボー！予は……何だか喉が乾くが。え？多分暑さが……酒を持つて來い……チボー……』

其の時カルヂナルで且つ王の宰相たるブリソネが這入つて來て、ヂアン・ガレアッツォ公から陛下に拜謁を願ひ出たと報じた。

『え……え？何？ガレアッツォ公か？宜し、宜し、今直ぐ行く。併し先づ酒を飲まなくち

や……』

そして手を伸ばして扈從が持つて來た杯を取らうとした。ブリソネは暫しと王を止めてチボーに訊ねた。

『其の酒は佛蘭西のか？』

『閣下、左樣ではござりませぬ。公家の酒倉にあつた物でござります。國から持つて參りましたのはなくなりまして――』

と聞くなり宰相は杯を空けた。

『陛下、此の無禮は御宥恕を仰ぎまする。此の地の酒は玉體に善くはなからうかと存じまする。チボー、即刻陣營へ使を派して軍糧にある樽を一本持參致すやうに傳へて呉りやれ。』

『何故だ……これ？……一體何うした譯だ？』と王は度を失つて言つた。

カルヂナルは囁いた。

『毒が氣遣はしうござります。正當の君主をすら死に致した人達でありまするで、何事を致すか解りは致しませぬ。勿論今日の日までは怪むべき廉はござりませぬが、併し何事も用心に若くはなしてござる。用心さへ懈りませねば先づ間違ひは起りませぬ。』

『え、兒、兒戯に等しい譫け事だ！』とシャアルは片方の肩を怒らして呟きはしたが、併し宰相の意見に同ずる事にした。

侍從の面々は王の前に列んで、扈從は王陛下の頭上に垂れてある天蓋を揚げた。天蓋は青絹で出來てゐて、佛蘭西王家の紋の百合を銀色に刺繍してある立派な物であつた。そして侍從長は王の肩から緋のマントを懸けた。此のマントの縁は鼬の皮であつた。そして金色の蜜蜂と並びに佛蘭西語で『蜂の王に劔なし』の警語とが刺繍出してあつた。一行は荒れて陰鬱な部屋々々を打ち過ぎて瀕死の人の室へと歩んだ。

禮拜堂を通りしなに見ると公妃イサベルラは牀几に坐してゐる。即ち王はいやに丁寧に帽子を脱いで立ち止まつた。そして『愛としの妹』と呼んで、佛蘭西振りの作法に從つて唇に接吻しようとすると、公妃は早くも避けて、王の足下に平伏した。

『陛下は最も寛仁に富ませ給ふ御方でありますれば何卒私らを不憫と思召して下さりませ』と、豫め言はうと思つてゐた事をスラ〳〵述べ立てた。『武を修め給ふ上に心廣やかに渡らせ給ふ陛下、何卒無辜の者を助けて下さりませ、其の報いとして神の御惠みは陛下に降りまする。イル・モロは私らの物を悉く奪ひました、私らの君位を奪ひました、私の夫でミラン君公の

正當なる繼嗣者でありまするヂアン・ガレアッツォに毒を與へました。そればかりか密偵と刺客で此の城を取り卷かしてをりまする……』

シャアルは何の事やら殆ど分らなかつた。又念を入れて聽かうともしなかつた。

『え？……え？……何、何ですかな？』と王は吃つて口をもご〳〵させながら問ふた。『否、否、妹……そんな場合ぢやない……起ちなさい、起ちなさい、何うぞまあ起ちなさい。』

併し不幸な妃は益々跪いて、果ては啜り泣きしながら王の足を抱へ、無暗と王の手に接吻して、

『おゝ陛下、陛下まで私をお見捨てなさいますれば、此の一命は最早や捨てる計りでございます……』

王はほと〳〵困じ果てた。將に泣き出さうとする小兒のやうに顏を歪めて吃りながら、

『おや、おや、まあ！こいつあ可けない！ブリンネ！ブリンネ！……予の手に了へん。其方から何とか言つて呉れ……』

此の謙抑を敢てして一生懸命に歎願する妃は、宛ら古代悲劇の女主人公のやうに莊嚴な感じを王に與へたが、併し妃に對して何等憐憫の情は動かなかつた。唯逃れたいの空しき一念のみである。

カルヂナルのブリンネは鄭重な言葉遣ひながら、如何にも他所々々しい。『これさ御婦人、お氣を鎭めなされい。陛下は及ぶ限り御身と御身の夫君ジャン・ガレアス（ヂアン・ガレアッツォの佛蘭西名）のためをお圖りなされます。』

公妃はカルヂナルを見てから尋いで王を見た。其の時初めて自分が如何なる種類の人に泣き付いてゐたか分つたので啞然として默つてしまつた。

自分の前に立つてゐるのは不具の、變ちきりんの、滑稽男、口をポカンと開けて、顏一杯に馬鹿のやうな微笑が漲つてゐる。そして薄い色の雙眼を無意味に見据ゑてパッと開いてゐる。

『まあ私、アラゴンのフェルヂナンドの孫ともあらう者が斯んな不具者に平伏したのだ！ま、斯んな何呆に！』

そして竦と立ち上つた。青白い頰には憤懣の紅が颯と走る。

王は此の婦人に何か言葉を掛けてやりたい、義務として此の難局、此の沈默の始末を付けたいと思つて、一生懸命になつて肩を聳やかし、目をパチクリさせたが、お定まりの『え？え？何？』の外に言葉は出なかつた。で落膽したやうに手を振つて、再び默り込んでしまつた。イ

サベルラは目にはつきりした輕蔑の色を湛へて、シャアルをヂロ〳〵見守つた。王は思はず怯怯として俯首いた。

『さ、ブリソネ！ブリソネ！行かう！え？何？』

扈從は戸又戸を開いて進んだ。そして遂にヂアン・ガレアッォが死人のやうに横臥せる室に達した。窓の鎧戸は明け開いてあつた。秋の夕の物靜かな光線は金色せる樹頭を横切つて窓から流れ入つた。

王は病人に近寄つて、『從弟』或は『予の從弟』と呼び掛け詞を用ゐながら、氣遣はし氣に病氣の模樣を訊ねた。ヂアン・ガレアッォは溫乎たる微笑を浮かべて次ぎのやうに言つたので、これを聞いてゐた王は漸次自ら搔き亂れた心が鎭靖した。

『神が陛下の軍勢に捷利を賜はらん事を祈ります。陛下はイェルサレムにお這入りなされまする時、又基督の御墓に詣でられる時に、何うぞ予の憐れな魂の平安をお祈り下されるやうに願ひます。其の頃は、陛下、予は最早や……』

『否、否、弟、そんな事はない、そんな事はあるものでない……そんな事を言つてはならん。あなたは屹度本復なさる。そして共に進軍して汚はしい土耳古勢を伐たなくてはならん。え？予の言を信じなさい。予は能く言つて置く、あなたは大丈夫だ……え、何？』

ヂアン・ガレアッォは首を振つた。

『不可能な事でございます』と衝き徹すやうな眼光を以て王の目を眺めて低い聲で言つた。

『陛下、予が亡くなりましたら、何うぞ予の子のフランチェスコと不幸なイサベルラをお見捨て下さりますな。二人は陛下の外に便る人はないのでございます。』

シャアルは思ひも寄らぬ感情に脆くも負けて、『あー！あー！』と呟いた。唇は戰き、其兩隅は垂れて、內部からのわくりなき光の輝々たるためか、顏には無量の深切が現れてゐる。そして俛首いて兩の手で公を抱きながら、『弟よ！親しい憐れの弟よ！』と言つた。二人は憐れむべき一對の病兒のやうに傷まし氣に小やかに笑つて接吻を交はした。

王は室を出てから宰相を顧みて言つた。

『ブリソネ……ブリソネ！何うかしなくちやならんな……え？擁護するとか……でなければ保護を加へるとか……兎に角これぢや可かん！此の儘にして置いちや可かん！予は武士ぢや、不幸な者は救はなきやならん。分つたか？』

『陛下、それをなされまして何の功がありませうか？死ぬのがあの人の運命ではござりませ

ぬか？ヂアン公に利しますれば當方が不幸に陷ります。のみならず陛下と同盟を組んでをる者はイル・モロでござりませう。』

憤怒に目を光らせてシャアルは叫んだ。『これ、イル・モロは殺人犯ぢやぞ！眞正な殺人犯ぢやぞ！』

『それが陛下に關はる事でござりませうか？』とカルヂナルは肩を聳やかしながら然かも微笑を含んで言つた。『他の人に比べてイル・モロは優り劣りはござりますまい。それはそれと致しまして、これは政治上重要な事でござります。陛下、私らは高が人間に過ぎませぬ。』

此の時酌掌が佛蘭西の酒を一杯持つて來たので、王は渴く者のやうに飲み干した。此の一杯のために心は淸々として、陰氣臭い考へは退散してしまつた。其の酌掌と共にルドヴィコ・イル・モロからの使者が來て、晩餐に王の臨席を請ふ旨を言つた。シャアルは撥ね付けた。使者は幾度か懇請したが無駄であつた。使者はチボーに何事をか囁いた。囁かれたチボーは今度は王に何か囁いた。

『陛下……ルクレチア樣が……』

『え？何？何者だ、ルクレチアと云ふのは？』

『昨晩陛下の舞踏のお相手を致しました婦人でござります。』

『あ、然うか、成程。あれなら覺えてゐる。あれがルクレチアと云ふのか？可愛い美人だつたな。一口に頰張りたい女子だつた！で、お前はルクレチアも晩餐の席に列ると言ふのか？』

『確に左樣でござります。席に列ります。陛下の御幸臨を懇請してをりますさうで……』

『あの女子が懇請してゐる？え？さうか、チボー？ぢや直ぐに……宜し、宜し、明日は出陣だから今晩は最後だ。これ使の者、予がお禮を申してゐたと陛下に傳言して呉れ……予は……直ぐに……』

王はチボーを傍に引いて、

『よく聞いてくれ……あのルクレチアは……何者か知つてゐないか？』

『陛下、イル・モロ公の嬖妾でござりまする。』

『其奴ぁ困つた。』

『陛下の御一言で以て今晩の事は悉く成功致しまする――若し陛下がそれを御希望でございますれば。』

『いや、いや、何うして然うなるものか？予は……イル・モロに請待される方だ。』

『併し左樣になされますればイル・モロは却て喜ばしく思ふ事でござりませう。恐れながら陛下は未だ此の國の人達を御了解はなさりませぬ。』

『ちや、宜し、宜し！お前の言ふ通りにする。お前に任せる事にしよう。』

『陛下、お心安う思召せ。したが唯御一言だけ……』

『五月蠅い！チボー。予はそんな事が嫌ひだ。だからお前に任せると言つたではないか？予は何もそれに就いて言ふ事はないのだ。お前の思ふ通りにしろ！』

チボーは一揖して退がつた。

階段の下に來た時、王は顏を顰めて頭を掻いた。そして先つき考へてゐた事を思ひ出さうとした。

『ブリソネ！ブリソネ！予は何か言つてゐたな？あ、然う〳〵、無辜の者を守つてやる……保護を加へてやる……此の予は武士たる事を誓つた者だ……』

『先づ〳〵左樣なお心はお捨てなされませ。少くとも唯今の場合には適しませぬ。後日イェルサレムから凱旋してお歸り遊ばす時……』

『ほうイェルサレム！』と言つた王の目はパッと大きくなつて、青白い夢のやうな微笑が微かに唇の上に浮かび出た。

『神の御手は捷利の道に陛下を導かれまする、神の御指は十字の軍勢に道を示されまする。』

シャアルは靈感に打たれたやうに目を天に擧げて、

『神の御指！神の御指！』

と繰り返して言つた。

八

若き公カレアッツォはそれから八日の後に薨じた。臨終の前に一目レオナルドに會ひたいと乞ふたが、妃のイサベルラは拒んで許さなかつた。蓋し魔法をかけられた者は、かけた者に堪らない程會ひたがるものであつて、會へば忽ち生命に關はるものであると、乳の人ドルーダが妃に告げたからであつた。此の老女は飽くまで蠍の膏藥を公に塗つてゐた。醫者は出血を命ずるし理髮師は血管を切開してゐた。然かも公は薨去したのである、安らかに薨去したのである。

『御意の如くに成させ給へ。』これが公の臨終の言葉であつた。

公の遺骸をルドヴィコ・イル・モロはパヴィアからミランに移して、伽藍の蔭の下に葬つた。

貴族やミランの老人達は城の前に參集した。ルドヴィコは甥の不時の逝去に遭ふて深く悲歎する旨を切言したのち、亡公の息フランチェスコを立てゝ公と稱せしめる事を發案した。會集は斯くの如き權力を小兒に與へるのは亂暴であると主張した。そして人民の名に於いて故ヂアン公の笏を讓り受くべき事をイル・モロに乞ふた。公は表面これを拒んだが、遂に讓歩して不承々々其の請ひを容れた。

黄金織の錦を引き出して、それをイル・モロ公は着ながら、聖アンブロヂオ寺院の廊堂に馬を進めた。數多の廷臣は公の前後左右を圍んで、喇叭、大砲、寺院の鐘の音の間に、イル・モロ萬歳！イル・モロ公萬歳！の聲を高く揚げた。然かも――人民は沈默してゐる。

それから數日後、ミランの宗教遺物中最も尊い一本の釘（これは基督磔殺の十字架にあつた正眞正銘の釘である）をば莊嚴な儀式を以て寺院に移した。そして其の祭典を執行して人民の機嫌を取り、且つ己が權勢を固めようとイル・モロ公は企望を立てた。

九

其の夜、アルレンゴ廣場なる酒屋チバルドの店頭に一群の人々が集まつた。其の中にはブリキ屋のスカラブルロ、金工マスカレルロ、毛皮商マソ、靴屋のコルボロ、玻璃工ゴルゴーリ。なぞの顔が見えた。一群の中央にはドミニカン派の僧チモテオが樽の上に立つて說敎をしてゐる。

『これあんた達！昔、異敎徒はヴィーナスの社の下を掘つて、基督を磔殺し奉つたあの生命を賦與する十字架の木、並びに基督にお苦しみを與へた他の物品を、悉く土中に埋めて置いたが、それを發見なされたのはサンタ・エレナ樣でござつたのぢや。すると時の帝コンスタンチンと稱するのが、其の遺物の中で最も尊い又最も恐ろしい釘を一本取つて、鍛冶屋に命じてそれを己が馬の馬銜に入れさせたと思ひなされ。何故かなら預言者撒加利亞が《その日には馬の鈴までエホバに聖とされん》と仰有つたのに叶はせるためなのぢや。此の尊い御遺物があつたればこそ帝は敵に勝ち、羅馬帝國に抗する者に勝たれたのでござるぞ。』こゝでチモテオは一寸間を置いて手を空の方に擧げて、さも悲し氣な聲で、『ところがあんた達聞かつしやれ、非常に忌まはしい凶事が現在行はれてをりまするぞ。あのイル・モロ――然うぢや、あの惡人、あの殺人犯、あの簒奪者のイル・モロは、宗敎を冒瀆する祭を執行して、帝に欺いて人心を收攬する計りか、此の上もない神聖な釘をば自分のガタ〳〵する玉座に使用してその支へにしようとい

ふのぢや。』

面々は激昂の色を現して低い叫びを揚げた。

『そしてあんた達は御存じかい。あの高い神壇の上の穹窿に聖釘を安置し奉るに就いては、其處まで其の御遺物を引き扛げねばなりませぬが、其の引き扛げる器械の拵へ方をイル・モロは何人に任したか、あんた達は御存じかい？』

『誰だ？』

『フロレンス人のレオナルド・ダ・ヴィンチぢや。』

『其のレオナルドといふ男は何者だい？』と數人が訊ねた。

『いや、其のレオナルドてえ奴なら俺は知つてるぞ』と他の數人は言つた。『其奴なんだ、御若い殿下を毒殺したのは。』

『レオナルドは魔法使ひでござるぞ！レオナルドは異教徒でござるぞ！レオナルドは不信心者でござるぞ！』

コルボロは恐る〳〵辯護を試みた。

『でも兄い、俺の聞いてるレオナルドはそれあ善人なんだぜ。誰にも惡い事なんかしないんだ。人間ばかりか極く詰らない生き物にさへ慈悲深いさうだ。』

『馬鹿吐くない、コルボロ！』

『默れ。魔法使ひに善人があつて堪るものかい。』

『あんた達！あんた達！』と僧チモテオは叫んだ。『其の大詐欺師、闇き中を歩む其の男が頌められる日は頓て來るぢやらう。（あれは深切な人ぢや、あれは正しい人ぢや、あれは善良な人ぢや）と言ふ日は他日來るぢやらうて。何故なら彼奴の顏は恐れ多いが耶蘇樣のお顏に似、その安心させるやうな心持の良い聲は歌妓の聲のやうであるから。それに大勢の者は彼奴の腹黑い深切に迷はされて横道を踏むのぢや。そして空を吹く東西南北の風を使つて、諸方の民族や諸の國民を呼び集める具合は、丁度鳩鴿が僞の聲を使つて、他の鳥の雛共を自分の巣の中へ呼び集めると同じだらうて。本統にあんた達、用心が大切でござるぞ！ま、見さつしやれ、暗黑裡の天使、即ち非基督教徒と名くる濁世の君主は人の形をして來ますぞ。御用心さつしやれ、方々、此のフロレンス人、此のレオナルドが即ち今申した非基督教徒の前觸れでござるぞ、僕でござるぞ。』

『全く其の通りだ！』とゴルゴーリは言つたが、其の實レオナルドの事は未だ一度も聞いて

ぬないのである。『奴は魂を惡魔に賣つて盟約書に血判したとよ。』

『聖母樣、何卒御惠みを！』と言つたのは果物賣りの女バルバッキアであつた。『牢で雜役を勤める絞首吏の娘でスタンマといふ子が斯んな事を聞かせました――其のレオナルドといふ奴は（お丶神樣、暗くなりましてから此レオナルドといふ名を口にする私をお宿して下さりませ）絞首臺から死骸を無理に取つて……切り割いて……內臟を取り出すことが……』

『其奴あお前には分らんさ。學問の事で、そりやア解剖學つていふものだ』とコルボロが言つた。

それを金工のマスカレルロが受けて、『奴は何でも鳥の翼に乘つて空を飛ぶ工夫をやつてるさうだ。』

『成程。然ういへばヴェリアスといふ翼のある老蛇も神に背いたわい』とチモテオは注を入れた。『シモン・マグスも又空へ上つて逃げようとしたけれど、使徒の聖保羅樣に下へ投げられたのぢや。』

其の尾に跟いてスカラブルロが言つた。『奴あ水の上を歩くんだせ。基督が水の上を歩いたんだから俺だつても歩けるさと言つてるさうだ。何うだい、斯んなに大それた耶蘇樣の惡口はお前ら未だ聞かなからうな？』

『奴あ何でも鐘の中へ這入つて行つて水の底へ潛るさうだ』とマソが附加した。

『いや、兄い、そんな事を信用しちや可けねえ』とゴルゴーリョが言つた。『鐘なぞあ奴に取つて何も必要はねえんだよ。奴はな、魚になつて泳いたり！鳥になつて飛ぶんだからな！』

『お丶まあ、あんた達、そして釘が、神聖な釘が其のレオナルドの手にあるのぢや！』とチモテオは叫ぶ。

『それあ可かん！』とスカラブルロは拳を掴んで叫んだ。『其の聖物を瀆すよりか、俺達は直ぐと死んだ方が良い！其の不信心者の手から釘を取り返さなくちゃならん！』

『さ、釘の復讐だぞ！俺達の殿下を毒殺した復讐だぞ！奴を焚き殺すんだ！打つ絞めるんだ！』

『おい兄い達、お前らは一體何うしようと言ふんだい？』と靴屋は歎願する手附きして叫んだ。『今直き夜の辻番がやつて來ようし、それに警察長が……』

『警察長なんか惡魔に呉れつちやいい！手前そんなに恐けれあ疾つと丶失せあがれ。嬶の湯もじの中へ這入つて隱れてろい！』

そして此の一群は棍棒、丸太、棒切れ、石ころを寄せ集めて罵り騒ぎながら、往來を波のやうにと練つて行つた。其の先頭に僧のチモテオが立つて、十字架を持ち讃美歌を歌つた。

神よ起ちて敵を攘ひたまへ
火の前に蜜蠟の溶くるが如く
神の御前にて惡人を氓ぼせかし

松明は煙つてゆら〳〵と閃いた。其の緋の如き光りに對して月は物淋し氣に青白くなつた。
靜かなる星は空で慄いてゐる。

＋

レオナルドは寂然した書齋で聖釘を引き扛ぐべき器械に着手してゐるし、ヴォロアストロは硝子と金とを用ゐて、外部から良く見えるやうな聖物を入れる厨子を拵へてゐた。ヂョーヴァンニ・ボルトラフィオは師を見守りながら暗い隅の方に坐つてゐる。

然かもレオナルドは器械の方が次第に其處除けになつて、滑車と槓桿とに依る力の傳達に關する理論の方へ頭が彷徨するやうになつた。彼は數學的法則（即ち理性の內的理論）が自分に對して器械的法則（即ち自然の外的理論）を說明するに足る複雜な算用を廻らした。二大秘密は斯くして溶けて一層大きな一秘密になつたのである。

『人間の發明は自然の發明のやうに完全には行かない』とレオナルドは心に思つた。『自然は自己の法則を定める場合は必ずあらゆる結果と其の原因とが共に嚴密に結合するやうにするものだ。』

彼は今透徹的の凝視を向けてゐる無限の深淵に面しながら、その心靈は人間の他の情操とは全く類似して居ない重壓的驚嘆の念に充滿されて居たのである、で、聖釘を高處に引き扛げるに就いて要する單純な器械に關した計算をベタ一面に書いてある紙の緣に、彼は次ぎの語を書き付けた。

嗚呼爾力の源よ、爾の裁判こそは崇むべきなれ！爾は未だ力に對して其の必然なる効果の順序と性質とを缺かしめたることあらじ。三たび驚嘆すべきは爾必然性なる

哉、嗚呼！

書き終つた時、此の語は自分の心に祈りのやうに響いた。

併し其の時猛り立つ無法者共の腹立たしく表戸を叩く音、それと共に讃美歌の聲、罵詈の聲、叱咤の聲が聞えて、レオナルドの沈思は遮られた。ヂ・ーヴァンニとヴォロアストロは何事が起つたか見て來ようと駈け出しにかゝつた時、賄方の女マツリナが髪を振り擾し、着物を半分引つかけた儘室内へ轉り込んだ。

『泥棒！強盗、人殺しーい！南無マリヤ樣、ど、どうぞお惠みを！……』

其處へマルコが這入つて來たのでレオナルドは、『何です？』と訊いた。マルコは手に銃を持つて窗々の鎧戸を鎖しながら、

『能くは分りませんが、何でも大勢の人が坊主に煽動されて打ち壞しに來た樣子です。』

『で、何うして呉れと言ふのです？』

『私には薩張り分らないのです。惡魔の倅共の言ふ事はあの坊主だけに分るのでせう！何でも聖釘を渡せと言ふのです。』

『釘は此處にありはしない。聖器の容物に入れて、アルチンボルチ殿が保管してゐるのです。』

『私も然う申しましたが聞かないのです、土用中の犬のやうに狂ひたけつて。そして先生を不信心者だの、魔法使ひだの、ヂアン・ガレアッツォの毒殺人だのと惡口雜口をしてゐるのです。』

此の話の間に往來の喧囂は益々甚だしくなつた。

『開けないか、開けないと此の憎つくい巢に火を附けるぞ！レオナルドの畜生、一分間の中に貴樣の身の皮を引ん剝つて呉れるぞ！惡魔！宗門の敵！』

『神よ起ちて敵を攘ひたまへ……』とチモテアが歌ふと、例の餓鬼大將ファルファニッキオは甲走つた口笛を吹いて伴奏をする。

突然惡童ヤコボが走つて來て、窗の檯に躍り上がつて鎧戸を開け、ヒラリ庭へ飛び下りやうとした。それをレオナルドは逸早く引き戻して、

『何處へ行くのだ？』

『兵隊を呼びに行くんです。丁度警察長が通る時刻ですから。』

『可けない、可けない、若しか捕かまつたら最後ぢやないか、一言も言はぬうちに殺される

が落ちだ。』

『彼奴らの目にかゝるやうな事はしやしません。トルルラ叔母さんの庭から土塀の上へ出て青草の茂つてゐる堀を越えます。そして背戸の方へ抜けるんです。大丈夫ですよ、先生。それに同じ殺されるんなら先生よりか私の方が好いんです。』

そして愛と敢爲の滿ちた目を以てチラと後ろを見てから、少年は窗を飛び下りて電光の如く消え去つた。

『あの餓鬼はじめて少し役に立たわい』とマツリナは首を振りながら云つた。

其の時、窗を破つて石が一つ這入つて來たので、此の肥つた女はキャッと叫んで手を揉みながら、酒倉に通ずる眞暗な段を探りながら逃げ出して酒樽の中へ隱れてしまつた。マルコは二階の窗へ閂をさしに行つた。ヂョーヴァンニは青くなつて悶々しながら、併し目前に逼れる危險には意を介しないで、レオナルドの方へ悲し氣な顏を向けて足下に跪いた。

『お、先生、皆の者は言つてゐます……が……私は眞實とは思ひません。決して私はそれを信ずる譯ではありませんが……併し何卒先生御自身の口から私に聞かして下さいまし……』と言ひ淀んで、興奮した息をはづませた。レオナルドは痛まし氣に微笑した。

『皆で以て私が殺人犯だと言ふのを君は信實ぢやないか知らと思つてゐるのですか？』

『唯つた一言で宜いんです、先生！先生のお口から唯つた一言だけ！……』

『併し何故です？君が既に疑念を懷いてゐる以上、私の言は信じられない筈ですが。』

『あゝ先生、レオナルド先生、私は苦痛に責められてゐるんです……一言、唯つた一言！』

レオナルドは頓には答へなかつた。やがて震へ聲で、

『ヂョーヴァンニ、君も彼れらと同じ人か！君も私を敵視してゐるのか！』

表でドン〳〵叩くのが激しくなつて、家全體が搖れ出した。スカラブルロは手斧で戸を破つて侵入しようとしてゐる。レオナルドは猛り立つ群集の罵詈惡口を聞きながら、心は懊惱と大なる寂寥とをもて結ばれてゐるやうな感じがした。そしてガクリ脚を落した時、今書き附けた、

『嗚呼爾力の源よ、爾の裁判こそは崇むべきなれ！』の文字に目が止まつた。

と、莞爾として甚だ謙虛な心を持しながら、ヂアン・ガレアッツォが臨終の際に殘した一言を口ずさんだ。

『萬事は宜しいのだ。意思の天になる如く地にも成させ給へ。』

六の巻

ジョーヴァンニ・ボルトラフィオの日記——一四九四年—一四九五年

一事を愛するは即ちこれを知る所以、益々熱愛するに及んで益益精識に瘁る——レオナルド・ダ・ヴィンチ。

蛇の如く智く鴿の如く馴良かれ——馬太傳第十章第十六節。

ジョーヴァンニの日記

一四九四年三月二十五日、フロレンスの人レオナルド・ダ・ヴィンチ先生の塾へ弟子入りをした。

＊

先生の教授の順序は次の如し、遠近法、人體の大さと均衡、巨匠よりの模寫、自然の描寫。

＊

今日相弟子のマルコ・ドッヂョンノから本を一冊貰つた。これはそつくり先生の口授を筆記したもので、書き出しは斯うだ——

最純の喜悅を人體に與ふるものは日光であり、これを精神に與ふるものは數學の明光である。これ即ち遠近法の學（此の學に於て眞に目を慰藉する明るみの線即ち la rinia radiosa に關する考察が、眞に心を慰藉する數學の明晰と提携するのである）を高めて人間に關するあらゆる研究と學問との上に置く所以である。願はくは『我は眞の光なり』と宣ひたる主基督の御力を借りて遠近法の學即ち主の光の學を知りたいと思ふ。此の書は三部に分れる。一、距離によりて物體の大さの減少。二、色の明るさの減少。三。外線の明白の減少。

＊

先生が私に氣を付けて下さる事は宛で父のやうだ。私の貧乏な事がお分りになつた時定めの月謝をお取りにならなかつた。

＊

先生は斯う言はれる——

能く遠近法を摑んで且つ人體法の比例を會得したら、外を歩く時飽かずに次ぎの事を注目しなさい。即ち人々の姿勢、動作、立ち方、歩み方、話し方、笑ひ方、口論喧嘩の模樣、又以上の事をしてゐる時の顏の容子、それから喧嘩をしてゐる人を引き分けようといふ見物の顏の容子、並びに些つとも心を動かさないで見物してゐる人の顏を注目しなさい。そして色を付けてある紙の手帳を毎時も携帶して居て、それに、鉛筆で殘らずその事を書き止めて置くのです。一杯詰つて書く所がなくなつたら別の手帳に書く事にして前のは外して保存して置きなさい。

何んな事があつても亡くしたり消したりしては可けない。何故かなら身體の運動には窮りがない、それを一々記憶に存するといふ事は到底出來ないからです。だから然うした粗雜なスケッチブックでも最良の師だと思つて見るのです。

で私は自分でこんなスケッチブックを作つた。

*

今日伽藍の附近のバッタリ小路で叔父のオスワルト・イングリムに逢つた。お前見たやうな奴はこれ切り構はれないと言つて、邪宗の不信心者の家へ魂を追つ放したのだと云つて罵つた。

*

心の結ばれるたび先生のお顏を見るだけで以て清々した愉快な氣持ちになる。あの目の不思議つたらない、明るく、碧く、白く、冷めたいのだ——氷のやうに冷めたいのだ。あの優しい聲を聞くと獨りで快感が起きてくる。何んなに人情のない者でも何んなに頑固な者でも諄々として先生に說得されては兎ても逆ふ事が出來なくなるのだ。仕事の机にお向ひになる時は頭に御考が一杯になつてゐるので、あの少女の絹のやうに長いそして柔かな金色の髮を撫でたり分けたりしてをられる。人と話をなさる時は片方の目を少し細めにされるのが癖で、それが如何にも深切な嬉しいやうな表情に見える。そしてあの濃く被さつてゐる眉毛の下から一目で以て人の魂の奥まで看破されるのだ。

*

生々しい色や奇を街つたり便利の缺けたりする時好はお嫌ひだ。馨りも先生の嗜好ではない。シャツの地はライン地方から產するもので、體裁の非常に好い美しいものだ。黑天鵞絨の頭巾に羽もなければ飾もない。者物の色は一切黑、そして上に暗紅色のマントをお着になるが、これは昔のフロレンス風に、膝まで屆いて眞直な褶が垂れてゐる。動作は悠つたりして沈着てゐらつしやるのにそれで以て人目に立つ。兎に角先生は人並みのお方ぢやない。

＊

小弓、大弓、乘馬、游泳は皆見事なもの、小太刀の擊劍と來たら一廉の師範だ。今日も見てゐると、或る寺院の丸天井の一番高い所を的に取つて小錢を一個お投げになつたところ、それが巧く的中した。腕の熟練と膂力、此の二つで以て先生は何んな競爭者をも凌がれる。

左ぎつちよなのに、其の左ぎつちよで以て、鐵の枷を曲げたり、眞鍮の鐘の臺を捩つたりなさる。そして其の手といへば女のやうに纖いやりとしてゐる。

例によつて先生のお顏を眺めてゐると、小僧のヤコポが手を拍つて笑ひながら駈けて來た。

『塞ですよ先生、化物なんですよ！臺所へいらつしやい。私先生のためあんな美しい奴らを連れて來たんです、先生は嬉し紛れに指を舐られるに定まつてるんだ。』

『何處から連れて來たのだ？』

『アンブロヂオ寺の玄關にゐたんです。ベルガモから來た乞食なんですよ！畫になつて呉れるんなら先生から夕飯が出ると言ひましたよ。』

先生は此の時聖母の像を描いてをられたが、其の儘で放つて臺所へ行かれたので私も後に跟いて一しよに行つた。見ると大變年寄りな兄弟連れの乞食で、體中が水氣で膨れ上つて、喉には大きな瘤がある。それと今一人、兄弟の何つちのか知らない女房もゐたが、此奴も萎びた小つちやな婆で、ラヌィナ（小蜘蛛）とは流石に名詮自稱だと思つた。

『先生は御滿足になること言はんこつちやない』とヤコポは得意の鼻を蠢かして、『先生のお好みが俺に分つてゐないで何うしませう！』

先生は化物そつくりな塞の傍に坐つて酒を命じて持つて來させ、それを御自身で注いでおやりになり、深切な問ひを掛けながら、馬鹿話をして笑はせようとなされた。三人とも何故此處へ連れられて來たか譯が分らないので、初めの間は打ち解けずに氣を廻してゐたが、先生が或る猶太人の死骸の話をされた時に小蜘蛛がプッと吹き出しさうになつた。其の話の筋は一體猶太人の埋葬はボローニャの領分内では法度になつてゐるため、猶太人共は其の法律に抵觸しないやうにと考へ出して、其の死骸をば寸々と切つた上、鹽水に浸し良い香を付けてヴェニスへと運送した。するとヴェニスにゐたフロレンス生れの基督教徒がそれを食つて了つた——といふのであつた。それから三人はヴブ〳〵に醉つて笑つたり喋つたり、顏が非常に恐ろしく見えて來た。私は餘り厭やなので見ないやうにしてゐたが、先生は熱心な好奇の目を深く瞪つて、其

の醜惡が絶頂に達した刹那、スケッチブックを出して寫し取られた。さも嬉し氣に注意力を傾倒してお寫しになつた樣子は、聖母の莞爾たる容をお描きになつた時に傾倒されたと少しも異はなかつた。

其の夜先生は此の時々御描き取りになつた戯畫を私に見せて下された。實に奇怪を極めた恐ろしい形相、丁度人事不省の境にある病人に出現する奴の形相で、人間のみか動物のもある。早く云へば人間と獸を揑ね合はしたやうなもの、人をして戦慄せしめる底の化物であつた。刺の竦々した豪猪の口の圖には、其のブラリとしてダブ〳〵したそして擺樓のやうに薄い下唇があるが、それは人間が齒をムキ出して笑ふ時のやうに見えて、巴且杏そつくりと言つて好い二本の長い白齒が中から現れてゐる。それから一人の婆の鼻は擴がつて毛むくじやらで、大きさは略ぼ土龍位、唇は馬鹿に薄いので、枯木に生ずるヅングリとして粘氣ある菌其の儘である。

＊

これはチェサレ・ダ・セストが言つたのであるが、先生は何か化物のやうな醜怪な者を往來で御覽になると、一日中其の後を跟いて歩かれるさうである。

大不具者は大美人と同樣稀なるものだ。意に介しなくて好いのは平凡な物だけだ。

斯う先生は仰有る。

＊

マルコ・ドッヂョンノは牛のやうに働いて一から十まで先生の規則を墨守する。併し努力すればする程益々不成功に終るのである。彼奴は確固として不拔な堅心を具へてゐるのだ。忍耐と勤勉とを以てせば一切を所有し得るものと信じてゐるのだ。他日必ず大畫家になるといふ希望を捨てはしない。

先生の創見に對して我々の中で一番興味を感ずる者は彼マルコである。それは實に素的な位だ。此間もプロレットの廣場へ手帳を持つて行つて、主として群集の中で自分の心に止まつた顏をば一々先生の方法に從つて其の要求する通り微細に書き付けた。ところが家へ歸つてそれ

を生きた畫の顏に描き改めようとしたところ、何うしても巧く行かなかつたのである。これと同樣に色を量り出す時に用ゐる先生の匙の使用法をも誤つた。彼奴の畫の陰影は濃く不自然なこと正に彼奴の描く顏が皆んな土偶の棒のやうに見えるのと同じい、魅力なんかはすつかり缺如してゐるとしか思はれない。併しマルコ自身に言はせれば此處に至つた原因は規則の遵奉に少し計り錯りがあつたせゐださうである。

チェサレはマルコを嘲つて斯う言つた。

『あの一番偉いマルコは學問のために殉死をする男なんだ。彼奴の例は偶々以てあんな規矩や規則に何等價値のない事を示してゐるぢやないか。赤坊が何うして生れるか知つて見たところでそれが生めはしないんだ。レオナルドさんは自ら欺くと共に他人をも欺いてゐる、一事を敎へて置いて去つて別の事をして居る人だ。あの人が畫を描く場合に奉ずるのは單に感興の規則だけなのに、自分では大畫家たるに甘じないで、同時に理學者たらんと欲するのだ。二兎を逐ふ者は一兎を獲ず――僕はそれが心配さ。』

チェサレの此の罵言は幾分肯綮に當つてゐるやうだ。が、それにしても先生に對して親しみのある言葉とは思はれない。先生はチェサレの言に傾聽されて聰明を賞讃される。決してお怒りになる事はない。

＊

先生が『最後の聖餐』をお描きになる模樣を注意して見てゐる。日の出前に早く僧院の食堂へ行つて日影が逼り來るまでお描きになる事がある、畫筆は始終持ち續け。食ふ事も飲む事もてんで思ひ出しはされない。時には何週間か續けて通はれても色を一塗りもなさらない事がある。時としては此の壁畫の前の足場の上に立つた儘で、二時間も畫面を吟味して、自分の描いたのを批評なさる、又時に依ると何か目に見えぬ力に惹かれて、畫時の熱い盛りに燒けるやうな往來を通つて僧院へ駈けて行かれるのを見受けた事もある。それから足場に上つて畫筆を二度か三度くらゐ揮つて其の儘出て來られた事もある。

＊

使徒約翰の顏に着手してをられる。今日あたりそれが仕上がる筈なのに、然うなさらないで家の中でヤコポと一しよに熊蜂、虻、蠅の喧嘩を見てゐらつしやる。夢中になつてこれらの蟲

の體の構造を研究なさつてゐるのを見ると、人類の運命が一に此の構造に懸かつてゐるとしか思へなかつた。そして蠅の後脚が舵機の代用をする事を發見になつた時は、限りなき福祉の秘密を開いたよりも未だ大きな愉快を感じられたのであつた。此の發見は取りて以て應用するに足るとお考へになつて、事によつたら飛行機にこれを試みられるやうである。哀むべき哉使徒約翰！

＊

それが今日は風向きの變る事が出來て蠅共は皆んな打ちやられた。其の用件はイル・モロ公の頭の中にあるだけで未だ實存にはならない或るアカデミーに關する事で、其のアカデミーの紋の意匠を考按してゐらつしやるのだ。仕事としては綺麗なそして非常に奥床かしいもの、そして其の趣向はと云へば桝形の中に紐を幾何學的に絡み合はせて頭も尻もない結び目を作つて、それで冠の形を表したものである。私は最う我慢が仕切れなくなつた。先生の約翰は未だ仕上がりませんか――と言つて促した。先生は肩を聳やかしたが、併し紐の冠から目を放たずに、口を塞いだ儘、

『待つてゐなさい！時間はまだ〜たつぷりあります！約翰の首は逃げやしないから！』

チェサレの毒言が初めて私に首肯れた。

＊

イル・モロ公は宮殿内に聽管を敷設する事を先生に託された。これは壁の中へ隱して置くもので『ヂオニサスの耳』に模した物である。初めの間先生は熱心に着手されたが今は其の熱が覺めたのか百方辭を構へて仕事に手を付けないでおられる。公は怒つて催促される。今朝も度度お召しがあつたが、先生そんな事は上の空で、植物の實驗をしてゐらつしやるのだ。兼て南瓜の根をすつかり剪り取つて唯一つ小さな芽を殘して、それに孜々として水を注けてゐたところ、それが枯れなかつたので先生の喜びは大したもの、『母親は上手に子供を育てるものだ』なぞと仰有つてゐる。そして長細いマメ南瓜が六十出來た。

＊

レオナルドさんはノラクラの最大なる者さとチェサレが言ふ。自然科學に關する著述百二十

卷、併し孰れも屑々たるもの計りでバラ〳〵な紙に彼處此處と無茶に書き入れたのである。他に約五千頁の草稿もあるが、其の不秩序加減つたらないので、先生自身さへ其の中に何が書いてあるか解らないのださうである。

＊

先生は私の小さな部屋へお出でになつて斯う言つて聞かせられた——

『ヂョーヴァンニ、君に分かつてゐますか、小さな部屋は心を深くするし、大きな部屋は廣くするものです。それから凡て物は日光の中で見るよりも、雨の中の方がはつきりしてゐるものだが、君はそれを觀察しましたか？』

＊

使徒約翰の首に着手なさること二日間。併し悲しい哉蠅や南瓜や猫やヂオニサスの耳を通る内に或る物が亡くなつてしまつたのだ。此の度も又首の仕上げに失敗して、繪具箱に飽きが來たのか退却して幾何學にお考を向けられた。『繪具の臭氣で嘔吐が出るやうだ。繪筆を見ても矢つぱり其の通りだ』と先生は言ふ。日又日は斯うして經つのである。其の場〳〵の氣紛れや神の御意に服從してゐる我々は丁度港で風を待つてゐると同じだ。併し飛行機の事は頓と忘れてゐらつしやるから未だ幸ひだ。さもなければ一同は餓死ある而已。

他の人が完全と見る事は先生には間違ひだらけである。先生の志す所は最高の處にある、到達し難き處にある、人の手の永遠に屆かない埒外にある。これ即ち先生の製作が常にハンパなる所以。

＊

アンドレア・サライノは病氣になつた。先生は看病や夜伽までして枕邊に坐つてをられるが、藥の事は誰一人敢て先生に話し出さないのである。マルコは内々で丸藥の箱をやつたが先生は見付けるなり窓から投り出された。病人自からも切に出血を欲して、自分の知り合ひで其の道に堪能な人のゐる事を話した。すると先生は偉くお怒りになつて、醫者なるものゝ非常に有害な事をば例を擧げて語られた。

『君は健康を回復するよりも健康を保つやうに注意しなさい。醫者なんかに氣を取られては

可けません。』尋いで微笑して善い心からであるが、併し意地惡るい笑ひを浮べながら、『人は金を溜めて何にするかと言へば、皆なあの生命取りの奴らに注ぎ込むのです。』

＊

先生は繪畫論に着手された。何時これが仕上がるかそれは到底解からない。此の頃先生は明暗兩つながらに渉つて空中の遠近法、線の遠近法に多忙を極めてをられる（私も同樣だ、私は先生の手傳ひをしてゐるのだ）、そして繪畫に關する談話や時々頭にチラ〳〵浮ぶ感想を私に聞かして下される。で、私は學問中最も高貴なる此の繪畫に關して、記憶の儘を此處に書き付けて置くから、此の日記帳を手にする人は、フロレンスの先生レオナルド・ダ・ヴィンチと、それに賤しい弟子のヂョーヴァンニ・ボルトラフィオの名を記憶に留めて、祈りをなさる際には此の二人の靈魂を祝福して貰ひたい。

＊

先生曰、

あらゆる美は死する、人間の美さへ死する、獨り藝術に在ては此の例外である。畫を輕蔑する人は世界の哲理的且つ美的思索を輕蔑する人である。繪畫は自然の孫である。神の親戚に當る女である。

＊

先生曰、

繪畫は普遍的たるを要する。汝畫家よ、汝の變化は自然現象の如く無限たれ！神が始め給ふた事を繼續して、人の手がする仕事ではなく、神の永遠の御手がする仕事を聚積するやうに努めて欲しい。何一つ模倣しては可けない、汝の孰れの仕事も皆自然の新現象であつて欲しい。

＊

先生曰、

自然律の根本に通ずる人、知識する人は、易々として普遍的たり得る。蓋しあらゆる身體制は人間たると動物たるとに拘らず、眞に同一法則に基いて造られるからである。

*

先生曰、

黄金を貪らんとして繪畫に對する愛を窒息せしむる勿れ、願はくは名譽に對する勝利は、勝利に對する名譽に優る事を記憶ありたい。富人の記憶は其の人と共に朽びるけれども、賢者の記憶は永遠に持續する、これ蓋し科學と知慧とは其の父の正嫡たるに反して、金錢は單に彼の庶出たるに止るからである。名譽を愛して貧に處るを恐るゝ勿れ。幾多の哲人が德を以て魂を豐にするがために、生家の富を捐てゝ晏如として貧しい生活を送つた所以を三思せよ。

*

先生曰、

知は魂を若くし且つ老の重荷を輕くする。故に知見を湊めて汝の老年のために甘美なる物を集めるに資せよ。

*

先生曰、

或る年輩の畫家は知の乏しきを蔽ふため金と碧との背後に隱れて此の言をなすのである。曰く我等が最良の作を與へないのは蓋し報酬が少いからである。得る所大ならば何人をも凌駕するのであると。嗚呼愚人！彼等は何に妨げられて美なる物を製作しないのか、何に妨げられて『此の畫の價は幾何、次は之れに比して廉、第三は最も安い』と言つて價格に依つて製作をする事を示すのか。

*

先生曰、

金錢を欲するの餘り降つて匠工の水平線に就く巨匠は稀ではない。私と同鄕同職たるフロオレンスのベルヂノが妻から食事を告げられた時に、今一人聖徒を描くから其の間に汁を卓子へ出して置て呉れと言つた。筆を運ぶや斯くの如く迅速であつたのである。

＊

先生曰、

自己に不信認ならざる畫家は決して美術の最高點に達する人ではない。汝の作品が汝自身の評價に比して高ければ善し、相等しければ惡し、以下に落つれば悲しむべきである！自分で傑作が出來たと自惚れて、驚きの餘り若しや余をしてこれを製作せしむるがために神の助力があつたのではあるまいかと自問する彼工匠は洵に憐れむべきである。

＊

先生曰、

自己の畫に對して他人が下す批評は長く忍耐して傾聽したいものである。即ち彼等の語を量つて見て彼等の非難が繁れるか否かを見るべきである。正しからばこれを改め、正しからずば汝は啞を裝ふ方が宜しい。そして若し其の人が誨へて誨へ甲斐ある批評家であると見れば、其の誤謬のある所を示すのが當然である。敵の判斷は往々にして友の判斷よりも眞理に近いものである。憎惡は往々にして愛よりも深い事がある。我れを憎める人の知力は我れを愛する人の知力に比して更に能く見、更に能く徹してゐる。眞に友は汝自身と變りはない。唯敵に至つて初めて汝と同じくないのである。そして彼の力は實に其の點に存する。憎惡は光明を投ず。これを心に銘して敵の批判を侮る勿れ。

＊

先生曰、

凡俗は明るい色に魅せられるものであるが、眞正の畫家は凡俗ではなく選人を滿足さすやうに努むべきである。畫家の誇りと目的は色の顯炫にあるのではない、奇蹟の遂行にあるのである、即ち光と影の變幻を假りて平面體をば圓やかに見せる處に存する。陰影を忽諸に附して、それを赫々たる賦彩の犧牲に供するのは、冗談を弄する人が其の高聲怒罵のために意味を犧牲に供すると同一である。

＊

先生曰、

就中意を須ゐて外線を粗雑ならしめず又際立たせないやうにすべきである。若い纖麗な身體の陰影は死の如くならず石の如くならず、輕易にして漂渺、且つ大氣の如く清透たるを要する。蓋し人體其の物が既に透明體であるからで、指を太陽に翳して見てそれを知る事が出來る。餘り明るい光は善い陰影を出さないから此の點に注意を要する。曇り日の薄暗い頃、家々の暗い土塀と土塀との間にある往來に暗い影が射してゐる時に、其處を通行する男女の顏の柔かさ、美しさを觀察するが好い。此の光こそは最も完全なるものであつて、その次第に明るみの中へ消えて行く陰影は丁度煙や柔かい音樂が消えるのと同じい。明と暗との間には此の兩者に共通する或る物が存する、明るい影又は暗い明るみが存する。汝畫家はそれを求むべきである。魅惑、魅嬌の秘訣は蓋し其の中にあるからである。

先生は以上のやうに話してから、これらの敎訓を我々の記憶に銘記させるため手を高く擧げ名狀し難い强めた語勢で繰り返された。

『粗雑な外線、太い外線を斥けなさい。影を明るみに混じて煙の消えるやうに柔かい音樂の消えるやうに少しづゝ消して行きなさい。

チェサレは熱心に傾聽してゐたが此の時目を擧げた。そして微笑して爭ひたげな面持をしたが遂に默してゐた。

＊

其の後他の問題を語つた序手に先生は斯う言はれた——

『僞りは實に恥づべき事だ、僞りの心を以て神を頌めるのは神を蔑むと同じい。眞實くらゐ優れるものはない、たとひ卑しい事を口にするのでもそれが眞實である限りは高尙になる。眞と僞との間に存する相違は明と暗との間に存する相違に同じい。』

チェサレは突然或る事を思ひ付いたと見えて先生の方へ吟味の目を向けた。

『何故でせう、先生？でも先生は明と暗との間には中間の物——左樣、兩者に通ずる或る物がある、即ち明るい影と暗い明るみがそれであるとお話になつたではありませんか？ですから眞と僞との間には……いや斯んな事は馬鹿々々しい事だ。先生はそんな喩を仰有るものですから私なぞは非常に惑ひます。畫家は果して明暗を混じて觀者を感服させる魅力を得るやうに努むべきものなら、それと同樣に眞と僞の間に橫る薄明を搜すのも當然でないでせうか？』

初めの間先生は眉を顰めて弟子が斯んな攻撃をするのを怒つてゐらつしやるやうであつたが頓てニコリ笑つて、

『私を誘惑しては可けない！惡魔よ吾が後ろに退けだ！』と言はれた。

私はこんな答が與へられようとは思はなかつた。チェサレの言は斯んなつまらない冗談よりも價値があると私は思ふ。兎に角チェサレの此の言葉のために苦しい變挺な考へが私の心の中で騷ぎ立つた。

＊

今日雨の中を先生は臭氣のする狹つ苦しい小路に立つて一つの石の上に落ちる雨の雫を見ながら吸ひ付けられたやうになつて考へ込んでをられた。長い間立ち止まつてをられたので、其の往來にゐた小僧共は互に肘で衝き合つて竊かに先生を嘲笑してゐた。で、私は、其の石に何か御覽になる事があるのですかと訊いて見た。

『ヂューヴァンニ、ま、彼處を御覽。あの醜怪な顏の見事さつたらないんだ！キメラがウンと口を開けてゐるやうだね、そしてあの側に天使がゐるのです。髮を颯と振り亂してキメラの傍を飛び去つて空中へ飛翔しようといふところです。大畫家の作に劣らない名畫が偶然な出鱈目から生れたのですね。』

と言つて雨の點滴を指で辿つて其の外線を示して下された。如何にも其の通りなので私は實に驚いた。

『大概の人は私の此の癖をば馬鹿々々しいと思つてゐるが、併し經驗は私に敎へて呉れました、斯ういふ事は想像力を敎育するに非常に良いものです。私は必要な物をば斯うした事から取つて、それを完成する事にしてゐます。何處か遠くで鐘が鳴つてゐますね。あの鐘の音を聽きなさい。あのごた〳〵してゐる音の中に君の有しない名と言葉があるのです。』

＊

泣けば眉は顰るし笑へば擴るものだ。

先生はいそ〳〵として死刑を宣告された者に連れ立ちながら、顏に現れる苦痛と恐怖の度合ひを注目なされた。そして彼等の筋が此の世で名殘りの痙攣をしてゐるのを研究なすつた時は絞刑吏さへ驚き入つてゐた。

チェサレは言ふ。

『いや、ヂョーヴァンニ、君は未だレオナルドさんの眞相を了解しないんだ。道に倒れてゐる蟲けらをさへ起して足に踏まないやうになさるだらうが、それで居てよしや先生のお母さんが溺死の場合にあつたりしても、その眉の顰まり具合ひ、額に皺の寄る模樣、口の隅の垂れ工合を注視なされて居る人なのだ。』

＊

先生曰、

啞聾の人の表情と身體のこなし具合ひに注意すべし。

＊

先生曰、

人を注視する際それを氣取られては可けない。向ふに氣取られなければ其の動作、笑ひ、涙に一層の自然がある。

＊

先生曰、

ゴッ〳〵して骨張つた手を有する畫家はゴッ〳〵して骨張つた手を描きたがるものだ。何故かなら誰でも皆自分に似寄つた顏や身體を好むからである。醜い畫家の選ぶモデルは矢張り醜い。萬事は皆然う云つた調子のものだ。畫家は男又女を描くに方つて、其の美と醜とに拘らず、それが自分の血を分けた兄弟と見られるやうでは可けない。此の國の畫家の多くは右の缺點に附き纏はれてゐる。凡そ畫に取つてこれくらゐ害のある誤謬はない。此の誤謬に誘はれる所以を考へるに、魂は自分に從屬て居る身體を作るものであるが故である。魂が自分に似せた身體を作るのは既に古くからの事であつた。それで今畫筆と繪具とで再び新らしい身體を作らうといふ時、又候其の魂が久しく住み馴れてゐた形骸を復製したがるのである。

＊

先生曰、

經驗はあらゆる藝術と科學との母たるもので、決して人を欺瞞するものではない。人を欺瞞するのは想像である、人をして經驗の與へ能はざるものを望ましめるのは想像である。非難すべきは經驗ではない。我々の空漠として無意味な嗜欲こそは非難すべきである。經驗は吾々をして『可能』なるものを企圖せしめこそすれ、得る能はざる物を望んで遂に失望の餌となるが如き無智な努力を決してさせはしない。

二人だけゐた時チェサレは、右の言を繰り返して憎々し氣に叫んだ。

『表裏反覆だ、且つ嘘だ！』

『嘘とは何の點が嘘です！』と私は訊いた。

『ヘン、不可能を企圖するなつて！到達すべからざる物を追ふなつてさ！ヘン、先生の言ふ事を信ずる奴がゐるかも知れないが、僕や君は信じないネ！先生の魂の奥底まで僕は見貫いてゐるさ。』

『では先生の魂を君は何う見ます？』

『先生が終生企圖するところは單に不可能のみなんだ。追ふところは到達すべからざる物、唯それのみなんだ！甲の器械では人を鳥に化しようとするし、この器械では水の中へ入れて魚のやうにしようとするのだ。これ等は不可能でなくて何だ。それ計りちやない、壁の點々や雲の外線を見ては妄想の怪物を思ひ寄せて見たり、夢に天使を見て其の神々しい顏に現れる神秘な魅力を然うした物の中に見出したりなさる。一體斯んな事は何處から出て來るのだらう？經驗から來たのか？それとも先生の有つてゐる鼻の圖表から來たのか？或は繪具を量り出す匙から來たのか？そしてある人は何故あんなに自分を欺くのだらう？何故あんな嘘を吐くのだらう？あの人が器械を研究する目的は奇蹟の遂行にあるのだ、飛行して天際に翔るためだ、自然力を用ゐて然かも自然に抗敵する物を作るためだ。レオナルドさんが達しようとする處は神だ、でなければ惡魔だ。類例のないそして可能以外の事でさへあれば何方でもそんな事は構はないのだ。信仰が減ずるに從つて消ゆべからざる好奇心が益々大きくなるのさ。』

チェサレにこれを聞かされたので私の心は不安で一杯になつた。そして幾日となく此の言葉を考へてゐた。忘れようとしても忘れられなかつた。

ところが今日先生は私に斯う言はれた。(これで以て私の右の疑問に答へて下さつたやうなものだ)——

『小智は膨れたがるもの、大智は謙抑するものです。萎びた穂は驕慢の首を擡げるし、實のある穂は首を垂れます。』

得たり賢しとチェサレは例の皮肉な微笑を浮べて質問の矢を放つた。

『では先生、あのルシファーですが、御存じの通り彼奴は天使の長であつたし、それに名だゝる知慧者であつたのです。ところが其の知慧の謙抑の方へ動かずに驕慢の方へ動いて、ために地獄へ墮ちてしまひました。あれは何うした譯でせう？』

先生は頤には答へなかつた。暫らくして次ぎの譬喩を語られた。

『昔一滴の水がありました。それが天に昇りたくて堪りませんでした。で、火の翅が附いたものですから美しい水蒸氣となつて昇つて行きました。然るに高處に行つてから一層美しい空氣に逢ひました。美しい代りに非常に冷めたかつたゝめ火は水を打遣つて行つてしまひました。そこで水玉は身顫ひして重たくなりました。そして推參な望みは恐怖に變つて、雨となつて落ちて來ました。そして天から投り出されて地面の上に落ちると直ぐ乾燥のために呑まれてしまひました。そして長い間地下の牢に入れられてゐました。そして牢の中で罪を悔いてゐました。』

此の外に一言も附加されなかつたが私は呑み込めたと思つた。

先生と共にゐればゐる程先生が分らなくなる。今日も又小兒のやうな惡戯をされた。實に奇怪な惡戯であつた。就寢の前に私は部屋で愛讀書『聖フランシスの小さき花』を讀んでゐると、突然、『火事だ！助けて！助けて！火事だ！』と言ふ聲が家中に鳴り響いた。聲の主は深切な忠實な老婢マツリナであつた。私は突進した。先生の書齋は恐ろしい濃い白煙で一杯になつてゐる。其の濛々たる煙の中に先生が立つてをられた。丁度昔の魔術師のやうで此の世ならぬ青い焔が其の姿を照らしてゐた。其の顏は上機嫌、マツリナやマルコの青く恐怖した顏を愉快氣に見てをられる。マルコはバケツ二つに水を入れて走つて來たので、繪畫や机の上に散らばつてゐる原稿に其の水をぶッ注ける積りであつた。先生はマルコを制して、これは皆んな冗談事であとは恐れ入つた挨拶だ。カッ〳〵とした火鉢の中へ乳香の粉と樹脂を投じたので煙や焔が上つたのである。此の巫山戲た仕打を一倍喜んでゐるのは先生か、それともあのチビ惡徒、あの山猿のヤコポか、何つちが何つちだか分つたものぢやない。只先生のやうにあんなに笑つて居られるのは善人に相違ない。先生に對するチェサレの言は確に眞を得たものぢやない！マツリナの皺く

ちやに恐怖の作用をした結果を先生は手帳に記入して置かれた。

＊

女に關した話をされる事は滅多にない。何時か一度、男子は自分の畜類を虐待するやうに女子を虐待すると言はれた事があつた。此の頃流行する至純の愛を笑つてをられる。或る青年が來てペトラルカ振りの厭やにひねくれた小詩を誦んで聞かした事がある。と、先生は三行の句を以てこれに答へられた。ペトラルカ中の愛くるしいラウラはペトラルカ自身がこれで以て日日の食に味を附けてゐるのみだ——と。

先生は器械や幾何學に耽つてゐたので戀なんかしてゐる暇がなかつたのだとチェサレは言つた。併し先生は決してガラハドのやうに女を知らぬ譯ぢやない、少くとも確に一度位は女を抱いたに相違ない。もつとも單に好奇心から——とはこれもチェサレの話。

＊

先生に關する話をチェサレと交はす事はやめやう。私もチェサレも宛るで探偵か何ぞのやうに先生を見張つてゐるやうなものだ。チェサレと來ては先生の性格にアラを見付け出すを以て愉快としてゐる意地の惡るい奴なのだ。一體彼奴は私を何うしようと云ふのだらう？何故あんなに私の心を毒したがるのか知ら？

此の頃私らは能く酒屋へ行くやうになつた。これはカンタラナの掘割に臨んでヴェルチェルリナ門の直ぐ外にある汚い小店で、此處で酸つぱい惡酒を半瓶だけ飲んで何時間か話す事にしてゐる。周りで呶鳴り立てゝゐるのは船頭の聲。彼等は汚い骨牌を指でいぢくり廻して一番引つ奪つてやらうと企らんでゐる。今日も此の酒屋へ行つたが、チェサレは私に、先生はフロレンスで不道德な事を働いて告發された事がある、君はそれを知つてゐるかと訊いた。私は私の耳を怪んだ。此奴又例の世迷言を始めやがつた、でなければ醉つ拂つてゐるのだと思つた。併し委細を聞いたところに依れば斯うである。先生は二十四歳、先生の師匠で有名なフロレンス人たるアンドレア・ヴェルロッキオは四十歳の時のこと、此の兩人に對して無名で罪狀を告發した者があつた。それはタンブリといふ圓い木箱の中に罪狀を記して入れたので、其の木箱は寺々の柱に吊るしてあるもの、就中サンタ・マリア・デル・フィオレの伽藍のが最も有名であつた。此の告發は四月になつて『夜と僧院との監督官』の糺明するところとなつた。そして後に覆審するを條

件として兩被告は釋放された。第二回の審問は六月に行はれたが二人は終に無罪放免となつた。此の告發に就いてはこれ以外に何等聞くところがない、併し先生は其の後直ぐヴェルロッキオの門を出てフロレンスを去つて此のミランへ來た——

チェサレは例の意味有り氣な微笑を洩らして、

『言ふまでもない怪しからん讒訴だらう。併し君はねヂョーヴァンニ、君は先生の心に何んな矛盾が巣つてゐるか未だ知るまいが、實際僕の言ふ通りだらうぢやないか？先生の心は迷宮のやうに入り組んでゐるのだ、中へ這入つちや惡魔だつて迷ひ込んぢまふさ。先生は確に潔白らしいが併し……』

私は驚きの餘り飛び上つた。多分顏色は青かつたらうと思ふ。

『隨分ぢやないか、チェサレ。』

『どうしたと云ふんだい、君は？ま、氣を落ち付け給へ。僕はこれ限り最う何も言はないヨ。實際僕はあゝあの建物から百哩も遠くにゐたのだから……』

『それは何の遠廻しだい？早く言つて了ひ給へ！』

『何だい其の馬鹿さ加減は？何故そんなに激り立つてる？斯んな事で君と僕のやうな友人の仲を割いて耐るものか？さ、飲まう。君の健康のために飲まう。眞理は酒中に在りだからね。』

そして二人は飲んで談話を續けた。

否、可けない、可けない！最う澤山だ！忘れてしまはう、此の男と共に先生の事を話すのは廢しにするのだ。チェサレは先生の敵たると共に又私の敵だ。惡い奴だ。

最う厭やで〳〵嘔吐が出るやうだ。偉い人に泥を投げ付けて喜んで居る奴がゐる。堪らなく厭な事だ。

＊

先生曰、

畫家よ、汝の力は寂寥の裡に存する！狐獨の裡に在る間、汝は全然汝のもの、若し夫れ友人一人だにあらば汝は汝自身の半分たるに止まる。更に汝の友人にして慮りなくんば汝は恐らく半分の以下であらう。そして多數の友があれば一層深く此の泥濘に陷り込むのである。或は汝は、否、身を退いて自然を思索しようと言ふかも知れないが、それは決して成就するものではない、蓋し汝の片方の耳は友人の喋々に傾いてゐるからである。一身で以て二人の主人に仕へ

る事は出來ない、友人に對しては友誼を缺き、それ以上に繪畫に對しては親密を缺くのが落ちである。汝若し、然らば彼等の聲の達しない處へ退かうと言はゞ汝は狂人を以て目せられるのである。そして結局は眞に孤獨たるに終る。

友人を有したくば畫家と學者を汝の書齋に延いて以て友となせ。これ以外の友誼は汝に取つて損害である。畫家よ、汝の力は寂寥の裡に存する事を銘記せよ！

先生は女達との交際をされない。先生の魂は絶待に自由たるを要するからである。

＊

アンドレア・サライノは時々不平を並べる。私らの生活は急がしい單調な仕事と懶い無爲の間を往復するに過ぎない。他の先生達の弟子はそれは愉快な生活をしてゐるのだ——とは彼の言草である。彼は一體女のやうに美衣を好む計りか、騷々しい酒宴や歡樂、戀の目に宿る火を好むのだ。

今日先生は此の愛弟子の泣き言を洩れ聞かれたと見えて、長い髪の毛を親しげに撫でゝやつて笑ひながら斯う言はれた——

『機嫌を善くしてゐ給へ、君。此の次ぎ宮中で御宴のある時には君を連れて行つて上げる。それは然うとして喩へ話を一つ言ひませうか？』

アンドレアは小兒のやうに手を拍つて先生の足下に身を投じた。そして熱心に聽く容子をした。

『昔、大きな石がありました。つい近頃水の瀨に洗ひ上げられて道路よりか最つと高い寂しい場所に据ゑられてゐました。四方には木や苔や花や草がありました。石は道路の方を見ると自分と同じ仲間が澤山ゐるので斯う言ひました。斯んな壽命の短かい草木の中に交つてゐて何の得になる、一層のことあちらへ行つて身内の中へ入り込まう、そして私と同じ石と暮すのだと言ひました。そこで道路の方へ轉がつて行つて兄弟分の間にをる事にしました。ところが重い荷車の下に轢かれたり。驢馬の蹄や又釘を打つてある通行人の靴や、そんな物の下になつたりしました。で、些つと計り身體を持ち上げて、これならば最つと自由に息が出來るだらうと思ひました。それが何うでせう、泥や動物の糞が掛かるやうになつたのです。此の時初めて自分が前にゐた美しい花園の隱れ家は丁度パラダイスのやうな處であつたと氣が付きました。

す。』

『何うですアンドレア、自分の瞑想を捨てゝ騷々しい都會へ飛び込む人達も此の通りなので

＊

先生は畜類のみならず草木にさへ害を與へる事を許されない。先生は未だ若い時分から肉類を斷つてゐるのだとヅオロアストロが私に言つた。そして、

『萬人とも私のやうに甘じて菜食する時代は來るのだ。畜類の屠殺を見て人間を殺すと同じ思ひをする時代は頓で來るのだ。』

＊

今日私共は肉屋の前を通つた。其の時先生は牛や豚の死骸を指して忌々しさうに言つた。

『まこと人間は獸の王に違ひない、人間の動物性は動物のそれに優つてゐるからだ。』

そして悲し氣に附加した。

『吾々は他のものを殺して生きてゐるのだ。吾々は墓場だ。』

＊

神樣何うか宥して下され、私は今日も又あの憎むべき酒屋へ行きました、チェサレと一しよに行きました！話は先生が動物に慈悲を垂れられる事に及んだ。

『ヂョーヴァンニ、それは先生が肉を食はない事を云ふんだね？』

『まあ然うだ。私は知つてゐる……』

『君は何を知つてるものか！先生は善の念に動かされて然うするのぢやない、奇を愛するからなのだ。』

『それは何ういふ意味だい？』

彼は幾分無理に笑つて、

『おつとお靜かに願ひます。二人で口論するのは廢しだ。待つてゐ給へ、先生の描いた畫を見せて上げるから。實際非常に面白い繪なんだがね。』

乃ち歸つてから泥棒のやうに密つそりと先生の畫室へ這入つて行つた。チェサレは其處らを搜し廻はしてスケッチブックの藏つてあつたのを見付け出した。そして私に見せようとしたので私

の良心はチク〳〵私を衝き刺した。併し私は興味に驅られて眺めざるを得なかつた。

其の畫には巨大な射石砲、爆裂彈、銃身の多い小銃、其の他種々の戰具が描いてあつて、先生がマドンナの神々しい顏をお描きになつた時と同樣精緻を極めたものであつた。就中私の記憶に殘つてゐるのは直徑半ブラッチオある砲彈で、『フラヂリター』と云ひ、其の構造に就いてはチェサレが說明して呉れた。實質は眞鍮で鑄たもの、內部の空洞には石膏が層を成して塡まつてゐた。そして此のスケッチの側の緣の方に先生の斯う書かれたのが讀まれた。

最も美なる砲彈、甚だ功力あり。砲を離れたる後アヴ・マリアの二語を誦する間に發火すべし。

チェサレは叫んだ。

『アヴェ・マリアだつて！斯んなにして基督敎の祈りの文句を使ふなんて君は如何思ふ？おの人の發明品は今君が見てゐる通りの物だ。そして君はあの人が言つた戰爭の定義を聞いたか？』

『いゝえ。』

『最も動物染みたる狂氣だつてさ！ね、おい、立派な定義ぢやないか、流石に斯んな器械を發明するだけあつて實に見事な定義なんだ——と私はまあ考へるがね。君の所謂聖人の正體はこれなんだぜ。これが肉食しない聖人なんだ、これが路上の蟲を抓み上げて靴で踏まないやうにする聖人なんだ！それとこれと同時にかねて居るのだ。今日は惡魔、明日の日は聖徒だ。ヤヌス（歲の神）には二面あるといふが、レオナルドさんが正にそれだ。基督の方へ向いてゐる顏と非基督の方へ向いてゐる顏を持つてるんだ。そして何方が正眞のレオナルドで何方が僞のレオナルドだらう？誰だつてそれが言へるものか！あの人は何をするにも輕薄な心でするのだ、神祕めいた人を迷はすやうな優しさでするのだ。詰まり遊びをしてゐるのさ。』

私は默つて聞いてゐた。死の如き冷めたさが心を貫くやうだ。

『何さ、チョーヴァンニ？先生が何うだつて君に關はる事かい？何故そんなに滅入つちやつてるんだい？君は氣にし過ぎるから可かんて。何、直き慣れつこになるさ、僕だつて然うなんだからね。ぢやこれから『黃金の龜』を歌ふとしようかな——

『芳烈の酒を汲みて
兄弟は歌ふ
バッカスの譽！

私は一語をも發しないで彼の側を逃げ出した。

神はほむべき哉。』

＊

今日マルコは先生に斯う言つた。

『先生、私達が滅多に寺院へ參詣しないし、それに聖日だと云つても普通の日に變らず仕事をするものですから非難してゐる者があります。』

『馬鹿共は勝手に喋るが好い。そんな奴らの言ふ事を氣に掛けては可けません。自然の研究は神が充分お喜びになります、それが祈りと同しやうなものです。自然の法則を學ぶと何うしても最始の發明者、世界の設計者たる神を崇めるやうになる、神に對する愛を覺えるやうになる。神を大に愛する事は大に知識する事から來ます、知識する事の少い人は愛する事も少い。例へば君が造物主を愛するのは、造物主の最高の善、最高の力のためではなく、其の恩惠を期待するがためでありとすれば、君は御馳走に有り付きたさに主人の手を舐るかの犬に比して何處に偉い點があります？併し又顧みて考へて御覽なさい、あの嘉すべき獸、即ち犬に主人の理性と主人の魂が分れば何んなに主人を崇める事でせう！銘記し給へ、愛は知の娘です。神を深く知れば知るだけ、愛の熱烈さも一層加はるのです。聖書に、蛇の如く智く鴿の如く馴良かれと記してあるのも詰りは此點です。』

チヨサレは言ひ返した。

『併し鴿の溫雅に蛇の狡猾を結ぶ人がゐませうか？我々は兩者を選擇すべきものと思ひますが。』

『然うではない。渾然たる融合でなくちやなりません。君に言つて置くが宇宙に對する完全なる知と神に對する完全なる愛とは同一不二です。』

＊

おゝペネデット先生、私はあなたの靜かな清淨な房へ歸りたくて〳〵堪らないのです！おゝ愛する父、あなたの胸に顏を埋めて、此の愁ひを悉く語つて、憐んで貰つて、魂の重荷を取り除けて貰ひたくて堪りません！おゝ溫乎たる牧者、あなたは主基督の言はれた、心の貧き者は福

なりの語を守つて居られるのだ！

＊

時々先生は非常に平和な、非常に清淨な、そして鴿のやうに惡意のない顏になられるので、私は一切を宥し、一切を信じて、心から先生に信賴しようと思ふ事がある。と、それが忽ち一變してあの唇の美妙な線が非常に不可解な表情になつて、何か知ら私を恐怖せしめる物の浮かむので、私は丁度透き徹る水の中から淵の底を見てゐるやうな氣持ちになる。先生の魂の中には見貫く事の出來ない神秘がある。

私は先生の格言の一つを思ひ出す——

非常に深い河は地下を流れる。

＊

ヂアン・ガレアッツォ公は薨去された。噂に依れば毒のある果物のために逝かれたので、先生がそれに關係して居るのだと云ふ。此の恐ろしい流言に私が耳を假したり、又それを度外して斥けたりするのは就れも私の意志ではない、これは神が見そなはしてをられる事だらう。それにしてもあの木の幻が毎時も私の眼前に出てゐるのだ。葉から露が滲み出て、月に光る綠の霧の中で、あの命取りの果實は熟して恐怖と死とを孕むのだ。おゝあれを見なければ好かつたのに！

『(園の各種の樹の果は汝意のまゝに食ふことを得、然ど善惡を知の樹は汝その果を食ふべからず、汝之を食ふ日には必ず死べければなり)。』

＊

おゝ主、私は心の底からあなたに叫びます！主よ、主よ、私の聲を聞き給へ、あなたの耳に私の歎願の聲を聞き給へ！私は十字架の盜賊のやうにあなたの御名を呼びまする。(主よ爾國に來らん時我をも懷たまへ)

＊

先生は基督のお顏に着手された。

＊

先生は聖釘を扛き上げる器械の拵へ方を公から仰せ付かつた。救世主を惱まし參らせたお道具を先生は宛ら一片の古鐵でゝもあるかのやうに精確な數字責めにして何溫、何瓜と秤で量つてをられる。先生に取つて聖釘は多くの數字中の一數字たるに過ぎない、起重器中の一部類たるに過ぎないのだ。繩と車輪と槓桿と滑車の中の一部なのだ。

＊

使徒曰、小さき兒らよ、今は最後の時ぞ。汝等はやがて宗門の敵の來るべきを聞きたる如く今に於いてすら多數の宗敵は在るなり。これによつて今は世の末なるを知る。

＊

今晩大勢の者が私らの家を圍んだ。そして聖釘を返せと言つて、『魔法使！不信心者！毒殺の下手人！宗敵！』と叫んだ。先生は興あり氣にこれら暴徒の咆哮に耳を傾けてゐた。そして銃を彼等に向つて發さうとしたマルコを制した者は先生であつた。

此の危險に際しても先生は底の知れない沈靜を變へる事はなかつた。私は先生の膝下に跪いて、一言、唯一言を歎願して何うか私の疑念を散じさして下さい、神に誓つて先生のお言葉を信じますからと言つた。併し先生は答へる事を欲しなかつた、又能はなかつた。

ヤコポは密つそり出て群衆を外して、警察長の組の者に逢つて、それを家の方へ案内して來た。そして群衆の押す力と亂打とのために戸が今や破れんとしたその間際に兵士共は彼等の背後を襲つた。暴徒は散じてしまつた。ヤコポは石が額に當つて負傷した。死にさうになつてゐる。

＊

今日伽藍で聖釘の祭典が執行されたので私も臨場した。數名の天文博士の意見に依つて定められたその時刻に御遺物は引き上げられた。先生の器械は索眼がないのに動いて行つた。繩も見えなければ滑車も見えなかつた。靉靆たる薫香の中を圓形の厨子は朝日のやうに昇つた、獨りでスラ〳〵昇つて。厨子の側面は凡て透明で、金の縁を取つてあつて、中に聖釘が安置され

てあつた。これ正に器械學の勝利である！唱歌隊の者共は歌つた――

『釘は內臟を握り、
手を天に擧て叫べり。
基督救贖の功は難有い哉、
犧牲は捧げられたり。』

そして厨子は五つの常燈明の點れてゐる高い神壇の上の方の暗い龕のところでピタリ止まつて其の中に納まつた。

大僧正は誦した。

『嗚呼多福なる十字架よ、爾獨りよく天王天主を載せ奉るに足りぬ。ハレルヤ。』

會衆は悉く跪いてハレルヤを唱へた。

ミラン君位の簒奪者兼殺人犯たるルドヴィコは他の人と共に平伏して泣きながら聖釘の方へ手を擧げた。

それから人々は酒、獸の肉、豌豆五百石、鹽六十石を貪り食つた。自分等の殺害された君主の事は忘れて噪いで飲んで、『イル・モロ萬歲！聖釘萬歲！』を唱へた。

宮廷詩人ベルリンチオニは六脚韻の詩を賦した。古びたる鐵の釘の御蔭で再び黃金の時代を現せしむるなるべしと云ふのが我々に傳へた其の詩の意味であつた。

公は伽藍を出て先生の許へ來た。先生を抱いて、先生の唇に接吻して、予のアルキメデースちやと言つた。そして絢爛たる器械に對する謝禮として、純バルバリ種の牝馬一頭と手元金二千ヅカットを下賜する旨を言つた。そして丁寧らしく先生の肩を叩いて、『これでこそ其方は基督の顏を仕上げる暇が出來たらうて』と言つた。

＊

『心二方面にある人は何をなすにも堅實なる事なし。』

最う〳〵斯んな苦悶に耐へたものちやない。今にも死にさうだ。狂氣になる！斯うしたアヤフヤな考へでは理性が死沒する計りだ。

逃げるんだ、取りかへしの附かなくならん中に逃げるんだぞ！

＊

夜中に起きて出て、衣類書類を一しよに包んでから、太いステッキを突いて、暗がりの中を畫堂の方へと辿つて行つた。そして未納になつてゐる此の六ケ月分の月謝三十フロリンを机の上に置いた――これをしようと思つて母の形見であつた(綠玉)の指環を賣つたのである――そして暇乞ひの挨拶もせずに先生の家を去つた、永久に去つた。

＊

ベネデット先生の仰有るところに依れば私が家出してからこつち、先生は私のために祈りを絶たれなかつたのだと云ふ。そして睡眠中に靈夢があつて神は此の私を眞道に引き戻して下されたと見た――と先生は言はれた。ベネデット先生はフロレンスの病弟を訪ねるため其處へ行く支度をしてをられた。弟御と云ふのはドミニカン派でサン・マルコ僧院にをられるさうである。サン・マルコと云へばかのヂロラモ・サヴォナロォラ師が彼處の住職だ。

＊

お丶主、あなたを頌め且つあなたに感謝します！ あなたは私を死の影から出して下されました、坑の口から出して下されました。今日限り現世の知慧を私は捨てまする。暗きを歩み非基督教徒の獸、即ち七つの頭ある龍が此の知慧の中に封じてあるのでございます。知慧の毒の木に熟る果實を捨てまする。空なる理性の誇り、神に敵意を懷く知慧の誇りは即ち此の果實でございます。そして其の知慧の父は惡魔でございまする。

心を迷はす現世の物に憧れる事は一切廢めまする。あなたの光榮、あなたの意志、あなたの知慧に從はぬ一切を捨てまする。お丶主よ！

何うぞあなたの御光で私の魂を照して下されまし、私の危險なあやふやな思想を除いて下さいまし、あなたの道を通る私の足元を安全にして下さいまし、そしてあなたの翼の蔭の下に私を庇護して下さいまし。

お丶私の魂！ 汝主を頌め湛へよ！ 私は命のある限り主を頌め湛へん、且つ私の神を頌めて歌はん。

＊

それから二日經つてベネデット師とフロレンスへ行つた。私は此の第二の父たる人の祝福を受けて、聖なる人、選ばれたる人、即ちヂロラモ・サヴォナロオラ師の指導の下に新發意としてサンマルコの僧院に入らんと欲する。

ヂョーヴァンニ・ボルトラフィオの日記はこれで終る。

七の巻　虚榮物の篝火――一四九六年

感情最も饒なる人は、殉教者中最大なる者である――レオナルド・ダ・ヴィンチ。
貳心ある人は其行ふ所の事すべて定準なし――聖ヤコブ書第一章第八節。

一

ヂョーヴァンニ・ボルトラフィオが新發意となつてサン・マルコの僧院に這入つて以來、一年以上は過ぎ去つた。

千四百九十六年の謝肉祭も終に近い冬の日の午下り、ヂロラモ・サヴォナロオラ師はつい先達て自分が見た靈夢の記事を書き止めてゐる。其の夢の中では羅馬府の天空に二個の十字架が波のやうに動いてゐた。一つは黑色で暴風雨に包まれ、他は煌々たる碧色に輝いて、前者には『主の怒の十字架』の銘があり、後者には『主の憐みの十字架』なる銘があつた。

二月の日光は此の狹い方丈の間に漲つてゐる。白塗りの壁は剝き出しの儘、そして黑に大十

字架と表紙の革の古びた羊皮紙の厚い書籍とが此の室内にあつた。青空からは折々燕の喜ばしげな囀りが來る。

ヂロラモ師は常になく疲勞を覺えて時々身體がガタ〳〵震ふのであつた。そこで筆を擱いて頭を兩手の上に垂れ、目を塞いで、兼て秘密の用命を吩付けて羅馬府へ遣してあつた僧のバオロから、今朝法王アレキサンダー第六世に就いて聞いた事を考へ始めた。考へ始めると同時に此の僧院の住職の心の前面をば丁度『默示錄』に記されてあるやうな怪奇な樣々の姿が過ぎ去つて且つ渦のやうに旋轉した。即ち彼はボルヂアス（法王の俗名）の紋地なる牡牛（それは異端の神アピスを聯想せしめる底のものであつた）の血泥になつてゐるのや、それから神の謙遜なる小羊ではなくて法王の前に運ばれた金ピカの犢、並びに法王と其の愛孃とカルジナル連が臨まれるヴァチカン宮の連夜の荒飲、齡六十路に達する法王の思ひ者であつて且つ當時の畫家から聖徒のモデルにされる美人ヂウリア・ファルネセ、なほ最後に法王とファルネセとの間に生れた二男子、其の一人はチェサレと云つて未だ年若きにヴァレンヅァのカルヂナルであり、他はヂーヴァンニと名のるカンヂアの公爵で、血を分けた妹のルクレチアに兩人共道ならぬ戀慕をして、互に憎み合ふ結果、互に亡きものにせんとの刄傷沙汰に及ぶ位になつてゐるといふ兄弟、なぞを見たのであつた。そして其のルクレチアと父の法王との間に妙な關係があるといふ取沙汰をば、バオロが辛々囁くやうにして自分に語り聞かせたのであるが、其の事が今や頻に心に襲ひ來るので、ヂロラモ師は身體が震えるのであつた。

『否そんな事はない。畢竟虛構の言ぢや。無道としては餘りに重大過ぎる！何うしても眞實とは受取れぬ。』

併し法王ボルヂアスの戰慄すべき巢窟では其のやうな事が有り兼ねないと心の底に感じたので、冷汗が額に滲み出た。そこで師は十字架の前に跪いたが、丁度其の時此の方丈の扉を叩く低い音がした。

『誰ぢや？』

『私でござります。』

其の聲の主は自分の股肱たるドメニコ・ブォンヴィチノ師である事が分つた。

『法王の密使リッチアルド・ベッキが參りまして、引接をお願ひしたいとの事でござります。』

『宜しい。待たして置いて下され。それからシルヴェストロを此處へ寄こして下され。』

此のシルヴェストロ・マルフィといふのは癲癇疾みで智惠の足らない男であるが、ヂロラモ師

は神が此の人を選んで恩寵の器とし給ふたのだと考へて、此の白痴を愛しもし又恐れもしてゐるのである。即ち師は聖トマス・アクィナスや其の他のスコラ哲學者達が定めた精密な法則に照準して、マルフィに現れる靈夢を解釋したり、又敏慧を以て、論理學の論證を以て、將た省略推理法、格率、三段論法を以て、阿呆な男の他愛もない饒舌の中に預言の眞意を見出すのである。マルフィはヂロラモ師を敬はざるは勿論のこと、公然侮辱を加へ、時としては打擲する事すらあつた。然かも師はこれらの凌辱をば最も溫順にして受けるのであつた。されば當フロレンスの府民はサヴォナロォラの掌中にあるが、併し其のサヴォナロォラは知惠が半人前しかないマルフィの掌中の者であつた次第である。

シルヴェストロ・マルフィは方丈の間へ這入つて來るなりドカと牀の上に坐つて、ブリ〳〵焦立ちながら、赤味を帶びてゐる剝き出しの脛を搔いて、一本調子の聲で歌を唄ひ始めた。其の顏は雀斑だらけ、鼻は尖つて下唇はダラリと垂れてゐる。そして勢のない碧の眼から脂が出て鬱陶しい曇りを帶びてゐる。

『私の處へ法王から密使が來たのぢや。で、面會して好いか何うか聞かして呉りやれ。何と挨拶をすれば好いぢやらうな、シルヴェストロ？　お前に何か御聲が來なかつたかな、靈夢でもなかつたかな？』

マルフィは顏を歪めて唸つて豚のやうな聲を揚げた——此男は獸の物眞似に甚だ妙を得てゐるので。

『な、マルフィや、賴みぢや！私に聞かして呉りやれ！あの私の魂は悲しい重荷の下になつて、弱り切つて滅入りさうになつてゐるで、お前神樣に祈願を籠めてな、そして神樣の預言の御心がお前に煌々と照るやうに祈つて呉りやれ。』

マルフィは口をパッと開いて卷舌をした。顏は異樣に扭れて、赫となつて呶鳴つた。

『何故俺にそんな面倒を掛けるのぢやい、此の呶々爺！汝や羊の頭ぢやな、腦味噌のない鶉ぢやな！鼠になりと其の鼻を喰はれちまへ！汝や寢る所を造つたら、其の上で寢とるが好いぞ。俺は預言者でもなければ相談役でもない哩。』

と言葉を切つて、眉を蹙めてサヴォナロォラの顏を見た。そして幾分靜かな調子になつて言つた。

『あんたを氣の毒に思ふ哩！ところで私の幻像の事ぢやが、それが神樣から來るやら惡魔から來るやら何うしてあんたに分りますかい？』

そして彼は目を塞いだ。靜止の色が顏に現れて來る。サヴォナロォラ師は謹んで期待するかのやうに息を凝らした。

俄にマルフィは目を開けて何事かを聽き取つて居るやうに振り向き、軈て窗の外を眺めて、心の善ささうな、靜肅な、殆ど知性に近い微笑を顏の上に輝かした。

『おゝあの鳥！御坊にあの鳥の聲が聞えますかい！野には必ず草が生えかゝつてをります る、黃色の小さな花が生えかゝつてをります！マゝ其れだけの事。今こそは神樣の事に思念する時ちや程に、さ、御坊も私も此の罪障の世界を遁れませう、諸共に沙漠へ遁れませう！』

斯う言ひながら身體を搖つて美しい聲で唄ひ始めた。

と、不意に躍り上つて師の前に走り寄り、手を執つて、興奮の餘り咽び詰まるやうに叫んだ。

『見えたぞや、見えたぞや。鼠に鼻を食はれるが好い！こゝな馬鹿野郎、見えたぞや……』

『聞かして呉りやれ、早う聞かして呉りやれ！』

『餓ぢやぞ！餓ぢやぞ！』

『む？それから尙？』

『餓ぢやぞ。火刑の杙から餓が上つとるぞ。其の餓の中に人が一人……』

『誰ぢやな？』

シルヴェストロは首肯いて手眞似をしたまゝ、頓には答へなかつた。そして心の底まで見貫くやうな目をしてヂロラモ師を見据ゑながら、馬鹿のやうな、それで以て溫さしい笑ひ方をして低語した。

『其方ぢや！』

と聞いたヂロラモ師は身顫して靑くなり、思はずタヂ〳〵と後方へ下がつた。マルフィは身を旋して蹌踉きながら鼻唄もので方丈を出て行つた。

笑める森へと急がばや、
彼處は『春』の隱家ぞ、
盡きせぬ水は淙々と、
頰白の歌も聞ゆなる。

ヂロラモ師は我に復ると等しく密使リチアルド・ベッキを連れ來るべき由を命じた。

二

法王廳大裁判所の錄事たるヴェッキはサヴォナロォラの房へ這入つて來た。サラ〳〵と音する絹布の長い衣は僧服に似た仕立方で、時流に倣つた紫色、そして垂てゐる袖には刺繍が取つてあつて、裏に狐の皮が當てゝあり、身體中から麝香の匂を散らしてゐた。偏に優美に見えるやうに努めてゐる其の一擧一動から、怡然として聰明振つた微笑、落着きのある目、慣があつて且つ奇麗に剃つてある頰――凡ての容子は威ありて然かも都雅を極めた人たる事を示してゐた。彼は恭く腰を屈めてサン・マルコの住職の手に接吻して師の祝福を求めた。そして拉典語で長々しい談話を始めたが、其の談話の間にシセロの文句や名立たる秀句を花のやうに點綴したのであつた。彼は演說法に所謂『好意に訴ふる事』の筆法を以て言を進めて、先づフロレンスの此の說敎師の名聲を娓々慶賀してから、やがて自分が託されてゐる用向きの方へ漸次接近して來た。即ちヂロラモ師が羅馬へ上る事を拒絕したゝめ聖父アレキサンダーが赫怒したのは尤もの次第であるけれども、然かも法王は熱心に敎會の利益、基督に忠なる人達の固き結合、幷に全世界の平和を欲してゐるので、ヂロラモ師さへ悔悟すれば父たるの廣き心を示して再び好遇を與ふるに吝かでない旨を語つた。

サヴォナロォラ師は目を擧げて極めて靜肅に言つた。

『あなたは何う思ひなさる？ 聖父で又我等僧侶の長でゐらつしやる法王猊下は果して基督を御信仰になつてゐると思はれまするかな？』

リッチアルドは此の亂暴な質問には答へずに流してしまつた。そして再び自分の用命の事を喋り續けて、サヴォナロォラが右の言を容れゝば、カルヂナルの赤の冠は師の頭上に載るため羅馬で師を待ち受けてゐる事を悟らしめるやうに語つて、さらに再び禮をして、師の手に唇を附け、言ひ含めるやうに斯う附加した。

『唯つた一語、ヂロラモ殿、唯つた一語で以て赤の冠は御坊の物になるのでござる。』

サヴォナロォラは屹とした目をリッチアルドに見据ゑて徐ろに訊ねた。

『で、若し私が厭やぢやと言ふて從はねば何うなさる？ 默り込むのが厭やぢやと言へば？ 若し愚僧が神の家の忠實な番犬として今後を引續き吠えるとすると？』

リッチアルドは心持ち顏を歪めて眉を上げ、師の顏を見てから更に目を回して自分の巴旦杏の形せる美しい爪を見、尋いで高價な指環の位置を直した。それが濟むと今度は兜衣から緩々一

枚の書附を取り出して擴げた上、それを住職の手に渡した。これは破門の告知書で、法王の印璽が捺してないだけ、其の他に何一つ缺け目のないものであつた。告知書はサヴォナロォラをば地獄の子、『最も侮蔑に堪へたる昆蟲』、最もやくざな牧者の杖と稱してあつた。

『それであなたは返事を待つてゐらつしやる？』と師は其の文書を一讀してから靜かに問ふた。

錄事は輕く首肯いて然る旨を示した。

と、サヴォナロォラは起ち上り樣告知書をば密使の脚下に投げ付けた。

『さ、これが私の返答ぢや！羅馬へ歸つたら其方を派遣した男に、ヂロラモは挑戰に應ずると言ふが宜しい。咄、基督に弓を彎く賣主奴が、彼が私を破門するか私が彼を敎會外に放逐するか見てゐやう哩！』

其の時房の扉が靜かに開いてドメニコ師の顏が現れた。蓋し師は室內の高聲を聞いて、何事が出來したのか知りたいと切に欲したからであつた。他の僧達も入口の周りに群つてゐた。

リッチアルドは幾度か扉の方を偸むやうに見てゐたが、やがて鄭重に言つた。

『ヂロラモ殿、私は唯個人として用命を帶びて來た者でござります、何卒それをお察し下されて——』

サヴォナロォラは扉の方へ行つてそれを廣く開けて叫んだ。

『皆の者聞いて呉りやれ。私に申し込んで來た不名譽な懸引をば其方達のみならずフロレンスの全人民に言つて聞かさう。それはカルヂナルの紫衣と羅馬牧師からの破門と——此の二つの選擇ぢや！』

彼の低い額の下に窪んでゐる目は炭火のやうな光を發して歪だ下脣は憤怒に顫ひ、惡魔に近い憎惡と誇りとを以て震えた。

『然うぢや、時節が到來したのぢや！貴樣ら羅馬の高僧とカルヂナル達聞け、貴樣達を敵として私は雷のやうに呼號するぞ。昔魯い敎父達が異敎徒に對して然うしたやうに、私も貴樣らを相手として雷のやうに呼號して呉れる。この不淨な家屋の鍵をば私は力を以て取つて見せる。貴樣らに殺された神の敎會は屹度私の（ラザロよ出で來れ！）と云ふ叫びを聞いて首を擡げて墓から出て來るのぢや！貴樣らの笏、貴樣らのカルヂナルの冠は、此の私に何の要がある？私に死の赤帽を與へるが好い！血塗れな殉敎の冠を與へるが好い！』

三

此處に集まつてサヴォナロォラの言葉を聞いてゐる僧の中には新發意ヂョーヴァンニ・ボルトラフィオもゐた。人々が散り去つてから彼も僧院の大階段を降りて、玄關下の自分が毎時も來る場所に腰を下した。此の時刻になると此處は寂寥と靜謐とに滿ちてゐるのである。

僧院の白壁に圍まれてゐる中庭には橄欖や絲杉や紅薔薇がこんもりと繁つてゐる。噂に依れば天使が來て此の薔薇に水を灌ぐとの事、そしてヂロラモ・サヴォナロォラ師は其の中に立つて說敎するのが好きであつた。

新發意は聖保羅が哥林多人に送つた書を開いて讀んだ。

爾曹は主と惡魔との杯を合せ飲むを得じ、爾曹は主の食卓と惡魔の食卓とに等しく着く人たることを得ざるなり。

そして立つて廻廊を歩みながら、サン・マルコの寺で費した一年間に自分が考へたこと感じたことを思ひ廻らした。過ぎし幾月かの心の苦痛の後、此の隱家に集へるサヴォナロォラの弟子の間に伍して初めて大きな和ぎを得たのであつた。

時々ヂロラモ師は弟子を引き連れてフロレンス府の管外に出遊する事がある。一同は天上へ行く道かと思はるゝ峻徑を逐つてフィエソレ町にある山の頂に登るのであるが、此處から見渡す(花の都)は笑める山々に圍まれて宛ら銀色の幻を見るやうであつた。ヂロラモ師は溪蓀、チュリップ、菫で七寶したやうな牧場に坐るし、僧達は師の周圍に輪狀に凭り臥して、談じ合つたり、踊つたり、小兒のやうに巫山戲合つたりするか、又は(祝福されたるアンヂェリコ)の描いた天使達が手にしてゐるやうなヴァイオリンや琵琶の類を彈じたりして歌つた。其の歌ふ樣は恰ど御空の合唱に合はせてゐるやうで、歌を謠ひながら圓形に舞踏するのであつた。ヂロラモ師は說敎をするでもなければ住職振るやうな樣子を示すでもなく、溫かに談話を交へて遊戲や笑ひの仲間に加はつた。そしてヂョーヴァンニは思つた——純碧たる大空の下、此の幽邃なフィエソレの丘の上で、師の顏に輝く微笑を眺めたり、樂器の絃の打震ふ調べと聖歌に混はる聲々を耳にしてゐる自分は宛ら神の樂園に住める天使に似てゐると。

時としてサヴォナロォラは夜の引き明け頃阪の端まで歩んで行き朝霧に浸つてゐるフロレンス

を見下す事もあつたが、其の時の師は恰ど母親が我が眠れる緑兒の顏を見守るにも似てゐた。そして日の初まりを報ずる鐘の第一聲が下の方から上つて來るのは、半ば覺めかけた小兒が寐惚け聲で解らぬ事を言つてゐるやうであつた。

それから夏の夜、目に見えぬ天使が振り翳す松明かと疑はるゝ螢が香氣漂ふ空を飛んで、僧院の中庭の薔薇から神秘な馨が漂ひ上る頃、ヂロラモ師はフランシス上人の聖き烙痕のこと、並びに薔薇のやうな馨のした傷のこと（其の傷を聖カザリン尼は聖き愛情によつて自分の嬶な身體に押し當てたのである）を語つた。そして信徒達は歌つた。

我れを擊ちて傷けよ、
我れを主の釘付けに醉はせてよ、
御聖子の愛のために。

そしてヂョーヴァンニは自分が懊惱して期待する奇蹟の事を思つて戰慄した——自分の身體は十字架に釘けられ給ふた御體の聖なる創と同樣、あの聖餐の杯から燃え上る火の光線のために燒ける事を望んで戰慄したのであつた。『イエス、我がイエスよ、愛を！』と彼は溜息して烈しき恍惚の中に心が消え入るやうになつた。

ヂョーヴァンニは嘗てヂロラモ師の用向を帶びてカルレッヂの離宮へ行つた事があつた。離宮は此の府を去る二哩の地にあつて、フロレンスの君主たるメヂチ家のロレンツォが久しく此處に住み、遂に其の永眠の場所となつた處で、寂たる數多の大廣間は鎧戸の隙間から洩れ來る幽靈のやうな光りに照らされるだけであつた。其の廣間の一つに於て彼はボッチチェルリの描いた『ヴィーナスの誕生』と名くる畫を見た。

睡蓮のやうに白く、海の新鮮な鹽の氣に打ち濕つて、眞珠貝の上に立てる女神ヴィーナスは、波の上に浮んで、蛇のやうなそして房々として頭を蔽ふてゐる金髮をば手に卷いてゐる。美しい裸形の姿は人の心を罪の誘ひに唆り立てるのであるが、然かも純粹に小兒の如き唇と無邪氣な目には奇くも悲哀が宿つてゐた。

ヂョーヴァンニは戰慄した。それは女神の顏は自分に取つて今が初めでないやうに思はれたからである。此の畫を長く見てゐると、女神の顏も、露を帶びて邪念なき目も、それから矢張りボッチチェルリの描いた聖母の畫で見たやうな優しい憂愁を含める無邪氣な唇——これらのもの

を自分は既に見て知つてゐると思つた。述べ難い驚駭に心は滿ちて、彼は目を避けて離宮を逃げ出した。

そして狹い小路を通つてフロレンスへ歸る途すがら、或る四辻の角に古い十字架像が目に這入つたので、其の前に跪いて誘惑を拂ふて貰ふことを祈願した。併し其の時土塀の後にある薔薇の中からマンドリンの高い音、並びに一の叫聲、次いで驚き恐れた囁きの聲、『可けません、可けませんヨ……放して下さい！』と言ふのが聞えて來た。すると相手の聲がして、『戀人よ！戀人よ！私の戀人よ！』と言ふかと思ふと、マンドリンは落ちて接吻の音が聞えた。

ヂョーヴァンニは跳び上つて『イエス！イエスよ！』と繰り返して叫んだが、併し此の度は『愛を！』と附加しなかつた。

『此處にもあの女がゐる！到る處にゐる！マドンナの顏にも、聖歌の中にも、十字架を飾る薔薇のいぶきの中にもゐるのだ！』

そして兩手で顏を蔽ふて逃げ出した樣子は、恰ど目に見えぬ迫害から逃げて行くやうであつた。

僧院に歸つてサヴォナロォラ師に會つて一切の事を話すと、師は祈り且つ斷食して惡魔と戰はつしやいと勸めた。此の意外な答を得た新發意は重ねて自分の苦痛を說明して、これは肉慾の誘惑に發するものではなく、古代の異端が有するあらゆる美から吐き出す誘ひである旨を語つたけれども、サヴォナロォラにはそれが理解出來なかつた。師は先づ驚きの色を現してから、尋いで異端の諸神の有するものは邪慾と驕慢の二つだけであるのに、それ以外の何物かゞあると考へるのは自分で自分を欺くのであると嚴しく責め、且つあらゆる美は單り基督敎の諸德の中に籠つてゐると說き聞かせた。併しヂョーヴァンニは期待する滿足を得なかつたので此の日以來不安と反抗の惡魔に取り憑かれた。

或る時晝に對するヂロラモ師の說を聞くに、師の主張に依れば凡そ名畫たる以上は或る道德上の功利を人に與へるものでなくては可けない。そして魂を健全ならしめるものは單り隱逸の德であるから、此の德を實地に行ふやう人の心を奮起せしめるものでなくては可けないとの事であつた。そして最後に附言して、フロォレンス人は罪に誘ふ像の類を執行吏の手に委して破毀してこそ神の至大なる思召しに叶ふ業を仕遂ぐるものであると言つた。

尋いで師は知識を說いて斯う言つた。

『信仰の神髓を論理と哲學とで證明できると思ふ者は阿呆ぢや。まゝ、考へて見さつしやれ、

強い光は弱い光の助けを要るぢやらうか？聖い知惠は人間の知惠の助けを要るぢやらうか？使徒や殉教者の中で誰か哲學、論理學を修めた者があつたらうか？讀めもせず書けもせず、聖徒の像の前で熱心に祈るのみが能の婆は、世界一切の賢者、哲學者よりも神を知る事に近いのぢや。論理學にしろ科學にしろ、それが審判日に何の助けになる？ホーマー、ヴァヂル、プレトー、アリストオトルの輩は最後は皆惡魔の棲處へ行つたのぢや、何故かなら此の人達は海に歌を謠ふ妖女のやうに人の耳をば魔法の歌で魅して、永遠の破滅の中へ人々の魂を引き落したからぢや。パンを求めて石を與へるのが即ち科學ぢや。これが誠の證據には現世の教に隨き從ふ人達に目を留めて見さつしやれ、既に心からが石のやうになつてゐる事が分るぢやらうから。』

然るにレオナルド・ダ・ヴィンチは『知る事の少い人は愛する事も少い。大なる愛は大なる知識の娘である！』と言つたではないか。

舊師の此の語の深みは今初めて自分に悟る事が出來た。知や藝術に對するサヴォナロォラの呪詛を聞くに付けて、レオナルドの聰明な理論、其の落着いた顏、其の冷々たる見方、人を魅する賢い微笑なぞが續々思ひ浮ぶ。毒の木、ヂオニサスの耳、聖釘を引き扛げる器械――それらを忘れた譯ではないが、併し自分が先生の魂の深さを測らなかつたこと、先生の心の神秘に透徹しなかつたこと、あらゆる絲の集まるべき第一の結び目を解かなかつたこと――が今分つたのであつた。

これが即ちヂョーヴァンニが、僧院の第一年目の終に、過ぎ來し方を振り返つて見た回顧であつた。深く考へに沈んで暗くなり行く廻廊を往きつ戻りつしてゐるうちに日は暮れてアヴェ・マリヤを誦せよと鳴り響く夕梵が暗がりの中から聞えた。僧達は禮拜堂へ行つたが獨りヂョーヴァンニだけは外に居て、再び腰を据ゑた。

そして苦し氣な微笑を含んで寂寞たる天の方に目を擧げると夕筒が輝いてゐた。これはこれ天使中最も美しいルシファーの松明と稱せられて、晨の子として光を齎す者であつた。

ヂョーヴァンニは自分の房に歸つて眠つたが明け方に及んで夢を見た。それはカッサンドラと一しよにゐた夢で、此の巫女は黑山羊の背に跨つて『安息日へ！安息日へ！』と叫びながら、曉の空を逃げ去りつゝ明るい琥珀色の目を自分に向けたのであつた。其の時のカッサンドラは地上の愛の女神（但し目に天の憂愁を帶びた）――白夜叉と、ヂョーヴァンニに見えた。女の體は滿月に照らされて、美妙な香氣のためヂョーヴァンニは消え入らんばかりになつた。齒は或る欲望と恐怖とのため戰いてカチ〳〵と鳴つた。『戀よ！戀よ！』と巫女は叫びながら呵々と

笑ふと共に、黑山羊の革は此の聲を後に殘して下の方へ行つてしまつた。二人は翔り去つた、あちらへ！あちらへ！と。

四

太陽の光、鐘の音、少年達の聲でヂョーヴァンニは目が覺めて、急いで着物を着て中庭へ降りて行くと、早や大勢の人が集つてゐた。其の間に混つて橄欖の枝と赤色の小さな十字架を持つてゐる白衣の少年こそは、サヴォナロォラの創定に係る少年宗教審問神聖軍の一隊で、當府の風紀を監督し改善して常に其の純良を計るのが彼等の任務であつた。ヂョーヴァンニは群集に伍して其の談話に耳を傾けゐた。

やがて神聖軍の組々が一搖れするよと見る間に、無數の小さな手は頭上高く橄欖の枝と赤色十字架を打ち振つて、入場したサヴォナロォラ師を歡呼し、白銀の如き聲を揃へて師のために聖歌を誦した。

イスラエルの人の種族と光榮とを照して顯揚せしめよ。

少年達は師のめぐりに輪を作つて、菫や翁草の花を雨と降りかけ、其の前に跪いて足に接吻した。面窶れせるサヴォナロォラは太陽の一筋の光に照らされながら無言のまゝ溫乎たる微笑を湛へて少年を祝福した。

『基督萬歲、フロォレンス王萬歲！基督ハレルヤ、フロォレンス王ハレルヤ。聖處女マリヤを祝へ、我等の王后を祝へ！』と若い聲々は叫んだ。

士官達は進軍の命令を發したので、神聖軍は太鼓を打ち旗を振つて進發した。蓋しシニョリアの廣場には虛榮物を焚毀する薪塚が設けてあるので、『虛榮物や嚴禁された品々』を集めるため彼等は今一度市內を一巡するのであつた。

五

中庭が空になつた時チブリアノ・ブォナッコルシのゐるのがヂョーヴァンニの目に這入つた。此の人はカリマラの組合長、異國古奇物の愛玩者で、其の所有に係る水車ケ岡でかの愛の女神の大理石像が發見された、その老人であつた。二人は懇ろに挨拶して暫らく話し合つた。此の話

の中でヂョーヴァンニはレオナルドがミランから此處に來てゐる事を聞いたが、それはイル・モロ公の委託に依つて、美術品中少年軍の難を免れる物を購求するためで、ヂオルヂオ・メルラも行を共にしたのであつたといふ。嬲てチプリアノはサヴォナロォラへの紹介をヂョーヴァンニに乞ふて方丈の間へ這入るし、ヂョーヴァンニは室の外に待ち受けて談話の模樣を聞いてゐた。焚毀を命じてある書畫、彫像、其の他一切の寶物を自分が買へるなら自分は金貨二萬二千フロリンを出すと言つてゐるのはチプリアノであつた。サヴォナロォラは拒絶した。すると八千フロリンを增額した。師は敢てこれに答へんともせず峻嚴な顏は一段峻嚴になつたので、プォナッコルシは齒のない口を顫はせ、ブル〳〵する膝の周圍をば狐の皮の外套で蔽ふて重苦し氣に溜息を洩らした。そして近視の目を瞑つて靜かな聲で、

『それでは御坊、私は身代限りを致す事にしませう。財產全部四萬フロリンを御坊に差上げる事に致しまする。』

サヴォナロォラは澁々頭を擧げた。『身代限りをして何の益があるかな？』

『私は當府で生れましたから此の土地を愛しまする。世の有樣が何と變りませうとも知慧と美術の精華が破毀さるゝといふのに我慢がなりませうか、それでは宛で蠻奴其の儘でござります。』

『地上の國を愛しなさるやうに天の國を愛すれば好いに』と師は歎賞に充ちた顏を老人の方に向けて言つた。『併し安心なされ、燒いて宜しい物だけを燒くのぢやからな。其方の信じなさる賢い古人も言つた通り、人を邪惡、惡德に引き陷す物の中には聊かも美は混つてゐないて。』

『これは御坊情無い事を！』と商人は熱心な返答をした。『赤子に善惡の區別が精確に出來ると御思召しますか。』

『赤子の口には眞と淸淨があります わい。（汝等小兒の如くなるに非れば天の王國に入る能はず。）それから又（我れ明識者の知惠を滅ぼし、賢者の理性を無に歸せしめん）と書いてありませう。私は日となく夜となく私の赤子の心を明るくして下さるやうにと神樣に祈つてゐるのぢや。即ち神の聖靈が赤子の心眼を開いて下さつて學問美術の虛榮物が悉く見えるやうになつて貰ひたいためなのぢや。』

『何うか御一考して下されい……成るべくは一部分だけなりとも……』

『口を費すだけが無駄ぢや。愚僧の決心は動きませぬぞ。』

チブリアノの老いたる唇は再び動いたがサヴォナロォラに聞えたのは『狂氣の沙汰ぢや！』といふ一語であつた。

『何、狂氣の沙汰ぢや？』と言つた師の目は閃々となつた。『して神聖を瀆す祭の際に法王に獻じたあのボルヂアスの金の犢――あれは狂氣でないのか？それから神を頌めようとて不信心者、人殺し、君位を簒奪した奴の命令を受けて、魔道の器械を用ゐて聖釘を引き扛げたあの事は狂氣ではないのか？其の名をマンモン（福の神）といふお前らの神を敬まはうがため、金の犢の周圍で狂氣のやうに踊つてゐるのは即ちお前らぢや。心の貧しい私達は私達の神――十字架に釘けられ給ふた耶蘇基督のため狂氣とならう。お前らは廣場で十字架の周圍に踊る僧達を嘲つて居るのじや。ま、待たつしやい！お前らに見せたいと待ち受けてゐる見せ物が他に未だあるのぢや。昔ダビデは約束の櫃の前で踊つて神を頌めたゝへたが、私も僧の外にフロレンスの全人民、老若男女を殘らず引き連れて救ひの十字架の周で踊るとすれば、お前らのやうな賢者はこれに就いて何と言ひなさる？』

六

ヂョーヴァンニ・ボルトラフィオは方丈の間を後にしてシニョリアの廣場の方へ足を向けて行く途中ラルガ町で神聖軍に會つた。少年達は此の町で一臺の轎を誰何したが、それは黒人の奴隷が擔いでゐるもので、中には裝を凝らした婦人が倚りかゝつてゐた。婦人の膝には狆が眠つてゐるし左、右の止まり木に鸚鵡と猿がゐて、轎の後に下部や護衛の者が隨いてゐた。此の婦人はヴェニスから來て未だ幾らにもならない藝者で、レナ・グリフィといふのが其の姓名であつた。ヴェニス共和國では此の種類の女を尊敬すべき娼婦又は態と洒落て小姐と云ひ、フロレンスでは旅の人の便利を考へて藝者の名をビラに書き陳ねてあるが、其の名譽ある筆頭に坐つて且つ大字で記してあるのが即ち此の女の名であつた。

レナはクレオパトラ又はシェバの女王のやうに褥椅子の上でダラリと横になつて、或る年少の僧正から來た戀文を讀んでゐた。其の手紙は追伸として斯んな歌で結んである――

御身の聲に我れは起つ、
我が地球より御空の彼方、
プレトーの恍惚の世界へと。

此の女は堪能なる歌人で、右の歌の返しを打ち案じてゐた。『儘になるものなら私は喜んでアカデミア・デリ・ヴォミニ・ヴィルッォシー（德操學院）で私の一生を過ごして見たい』とはレナの口癖であつた。

今や此の轎を神聖軍が取り卷いたのである。軍の或る一隊の長たるドルフォは赤色の十字架を高く翳して進み出た。

『フロレンスの王たる耶蘇の御名、並びに我等の王后聖マリヤの御名によりて我々は其方の罪深き裝飾、虛榮品、禁止を受けた物の剝奪を命ずる。其方若し否めば神の呪ひを受けるぞ！』

犬は俄に目を覺まして吠え始め、猿はキャッ〳〵と騷ぐし、鸚鵡は羽敲きしながら兼ねて主人から敎はつた詩の一句を叫んだ。

何事をも愛でぬ戀は苦を招く

レナは此の人々を避けて逃げなさいと從者に吩付けようとした時ドルフォに目が止まつたので手招きして呼び寄せた。

するとドルフォは伏し目になつて進んで來た。

少年達は口々に叫んだ。『其の裝飾を捨てろ！虛榮品や禁止された物を捨てろ！』

『おゝ其處な美少年のお方！』と藝者は人々の叫ぶ聲に委細構はず優し氣にドルフォに言つた。『お目を止めて下さい、小アドニス樣、斯んなに詰らない玩具同樣の品は悉く差上げたいのですが、併し有體に申しますと私の所有物ではないのでございます！』

ドルフォは目を擧げた。レナは一寸認められない程の微笑を見せて少年の心の奥底を知り得たかのやうに首肯いたが、尋いて柔かなヴェニス訛りの音で撫で込むやうに言ひ足した。『ヴェニスから來たレナは何處かと、サンタ・トリニター寺の附近のポッタイ小路でお尋ね下さいまし。お待ち申してをりますから。』

ドルフォは密と四邊を見廻すと、自分の仲間は藝者の事を忘れてしまつて、憤怒軍と稱するサヴォナロォラの敵の一隊と爭つてゐる。神聖軍に命じてレナを襲擊さすのが自分の役目であるのに、彼は俄かに自分が打ち負かされたと感じたゝめ、顏を赧めて頭を垂れた。

レナは白い齒を出して笑つた。すると豪奢なクレオパトラとシェバの女王の背後からヴェニス小姐なる有害な、傲慢な、無禮な賣春婦が顏を出した。

奴隷は轎を擔いでレナは無事に道を續けた。狆は膝の上に坐るし、鸚鵡は止まり木に止まつたが、猿のみは未だ顏を歪めてゐて主人の筆を奪ひ取らうとした。其の筆でレナは僧正への返歌を書いてゐたのであつた——

我が戀は天使の溜息よりも淸し……

一方ドルフォは仲間の先頭に立つたが先刻の意氣はなくなつてゐた。彼はメヂチ宮殿の階段を昇つて行つた。

七

あらゆる物が過ぎし昔の雄大と莊嚴とを帶びてゐるメヂチ宮殿の其の廣やかな室は凡て暗い上に寂寞してゐるので、小さな審問者連は恐怖の感に打たれたが、併し鎧戸が明け放され喇叭が響き太鼓が鳴つた時、彼等は笑ひ興じて聖歌を歌ひながら室々に散らばつて、罪すべき學藝に對して神の裁判を執行したり、聖靈の指導を受けて欣然として虛榮品を物色したりした。

ヂョーヴァンニは斯うして立ち働いてゐる彼等を眺めた。少年の內には額を顰め左右の手を行儀好く組んで、裁判官の重々しい態度を以て異敎古代の哲學者並びに英雄の彫像の間を歩いてゐるのもあつた。其の一人は大理石臺に刻んである拉典の字を讀んだ。

『ピタゴラス、アナクシメネス、ヘラクリツス、プラトー、それからマーカス・オーレリアスにエピクテータス……』

『何、エピクテータス？』フェデリチと名くる少年は深い鑑定の知識ある人の口振りして言つた。『其奴は特別の異端で、あらゆる歡樂を認容すると共に神の存在を認めなかつた奴だ。燒き捨てる値打はあるが、唯大理石であるのが殘念だ。』

『關ふもんか』と言つたのは藪睨みのビッポである。『お會式の場へ持つて行くさ。』

ヂョーヴァンニは口を挿んだが併し遲かつた。ビッポの槌は此の哲人の鼻を眞向に打ち下ろしたので少年軍は思はず歎賞の聲を放つた。

そして『エピクテータスだつてエピキュラスだつて同なじだ！粥でなければパンのお汁といふものだ！』と叫んで、更に『奴等は凡て惡魔の棲處へ行くのぢや』とヂロラモ師の言を引いて附加した。

併しボッチチェルリの畫の前では議論が始まつた。ドルフォはこれは愛の矢に射貫かれた裸身の酒神だと言ふし、フェデリチ（所謂呪逐物に對する此の少年の目はドルフォの目に匹敵するのであつた）は此の畫を審かに檢めた上、基督敎の最初の殉敎者たるステファノの肖像であると言つた。

他の少年達は何と判斷して好いか途方に暮れて畫の周圍に突つ立つた。併し衣服といひ其の表情といひ此の人物には何等聖徒らしい點がないのである。

『此の人の言ふ事を信じちや可かん！』とドルフォは言つた。『これは酒神だ、忌まはしい酒神だ！』

『君は神聖を瀆す男だ！』とフェデリチは十字架即ち彼等には武器なる十字架を高く捧げて叫んだ。二少年は非常に熱くなつて爭つてゐるため、部下の者共は引き分けやうにも引き分ける事が出來なかつた。結局後で熟考する事になつて畫は其の儘となつた。

呆氣に取られてゐる幾群の人々の間に立ちながら少年軍は古代の謝肉祭に用ゐる器具――恐ろし氣なる牧神の假面や酒神の祭司が携へる葡萄の枝、矢と弓と、キュービッドの翅、ヘルメスの杖、海神ポセードンの三叉戟などを取り調べた。そして大聲を揚げて笑ひながら遂にそれらの器物を取り上げた上、更に雷神ヂュピターの持ち物たる雷挺とオリンピヤの鷲の處へ來た。雷挺は金箔の置いてある木製の品で蜘蛛の巣が懸かつてゐるし、鷲は蛾に食はれ尾が脱けて、腴の破れ目からは針金と釘が食み出てゐた。それから一度はアフロヂテの被り物になつた事のある塵に塗れた金色の鬘から鼠が一匹飛び出したので、其處に居合せた娘達はキャッと叫んで長椅子の上に飛び上り、思はず着物の裾を押へた。恐怖して天井に打突かる蝙蝠の影は恰ど或る不淨な魔物が有する翅のやうに見えて、少年軍が此の異敎の木製品、此の神々の葬られてある墓の塵埃に手を觸れた時、彼等は恐怖と嫌忌の籠つた一道の冷氣に強く襲はれたのであつた。

其の時ドルフォは走つて來て、外に今一室殘つてゐるが、鼻の赤い藥鑵頭の堪へられない程厭やな小男が其處を守つて、中へは一人も通しはせんぞと敦圍いて、神樣を瀆す事を言つたり、呪ひの言葉を唸つたりしてゐる旨を告げた。と聞いた神聖軍は其奴を見屆けて呉れうと隊を作つて繰り込んだ。ヂョーヴァンニは其の後から跟いて行つて見ると、扉を守つてゐる老人といふ

のは誰あらう自分とは相識の間なる愛書家ヂョルヂオ・メルラである事が分つた。

ドルフォはそれ攻め掛れと部下の合圖を下した。ヂョルヂオは自分の身體で扉を守らうと身構へして其の前に立ちはだかつた。併し敵勢はそれに向つて競ひ掛かつて押し倒し、十字架で打擲しながら兜衣を搔き廻して鍵を見付けて扉を開いた。見るとそれは小さな部屋で貴重書籍の文庫になつてゐる。

『此方ぢや、此方ぢや！』とメルラは一計を案じてあらぬ方を指した。『あんた達の尋ねる書物は此方の隅に這入つとる。そんなな上の棚を探したとて時間を損する計りぢや。其方には何もありませんぞ。』

併し少年軍はそれには構はずに手當り次第に書籍、就中立派な裝幀の書籍を堆く積み上げ、窗を明けて大形の厚い書籍をスッと往來へ放り出した。往來には幾臺か荷車があつて虚榮の品品をこれに積んでゐるのであつた。チブルルス、ホオレース、オヴィッド・アブレイウス、アリストファネスや稀覯寫本、無雙の板本は、メルラの見てゐる前で宙を飛んで行つた。メルラは密と一冊の小本を救ひ取つて懷に扭び込んだが、これはマルチェルリヌスの書いた歴史で、背教者ユリアヌス皇帝の傳を敍したものであつた。それからソフォクレスの一悲劇を見事な彩色文字で書いてある寫本が牀の上に落ちてゐたので、それと見たメルラは取り上げて憐れ氣に歎願した——

『お子供衆、可愛お子供衆！ソフォクレスは堪忍してやつて下され。詩人の中で一番清淨なのが此のソフォクレスでござるぞ。打遣つて置きなされ！打遣つて置きなされ！』

そしてブル〳〵痙攣しながら此の貴重な紙葉を胸の上に押し當てたが、犇と愛惜する其の手に持たせた儘少年軍は引き裂いたので、老愛書家はベソを搔いて呻いた。そして寶物をガタリ落して、老いて力のない憤怒の聲を放つた。

『此のチンコロ奴、尊さ測り知れない此のソフォクレスの一行は貴樣達が師事する氣狂ひ坊主デロラモの悉皆の豫言に匹敵する事を知らんかい？』

少年軍はメルラを文庫から引き摺りながら、『やい老耄、貴樣の難有がつて居る異端詩人に直ぐ續いて火の中に投棄れるのが厭やなら默つて居ろ！』

そして彼等は宮殿を去つてサンタ・マリア・デル・フィオレ寺の傍を過ぎ、シニョリアの廣場へと進んだ。

八

薪塚はヴェッキオ廣場の暗い纖形な塔の前に設けてあつて、高さ三十キュビット、周囲百二十キュビット、極く少く見積つても高さ十五段を數へるだけの八角形の尖塔であつた。尖塔の底には喜劇に用ゐる假面、衣裳、鬘、其の他謝肉祭の器具類があり、其の上の三段を取つてゐるのはアナクレオン、オヴィッドから十日物語、ルイギ・ブルチの『大モルガンテ』に至る冒瀆の書籍、そして書籍の上には婦人の化粧道具――即ち香料、化粧水、鏡、白粉入れ、髪を攣らす鏝、頭の留針、毛抜きなぞがあるし、更に其の上は琵琶、マンドリン、骨牌、將棋の駒、球、骰等凡て人々がこれを媒として惡魔に服事する勝負道具が積んであつた。繪畫、春畫、賣女の姿繪が其の上を占領して、尖塔の頂上には古代の異端諸神、英傑、聖人等總じて木又は色塗りの蠟で作つた物が置いてあつた。そして以上の物を踏まへて薪塚の絶頂に坐してゐるのはあらゆる『虚榮品と禁制物』を司るサタンの像で、其の怪奇な操人形の姿は古代の森林の神たるパンに似て、足は山羊其の儘、肌は毛だらけで、鐵砲の火藥と硫黄とが身體の中に塡めてある。

最早や誰彼時とて空は寒いが、併し晴々しく冴えて星は一つ又一つ夜毎の輝きを今宵も始めたのであつた。廣場の群集は波のやうに搖れながら低い聲で祈念してゐるので、空は其の聲で一杯になつた。聖歌『靈の奉頌』を歌つてゐるのはサヴォナロォラの門徒で、此の歌はもと謝肉祭の歌の韻と節奏とを取り入れて詞と意味とを根本から更へたものとて、ヂョーヴァンニは耳を欹て、聞くと、節の賑かなのに引きかへて詞が陰氣なため兩者の釣合が取れず、宛で野蠻人が歌ふ葬式の歌のやうに耳に響いた。

希望は信と愛とに和す、
此の三つを三匁づゝ取り、
涙を二滴注ぎて、
恐怖の火上にて混ぜよ。
これを煮沸すること三分間、
人道の味を附したる上、
更に愁ひを加へて、
此を正銘な狂氣の呪となせ。
見よ、我が魂、我れは御身に呈す、
最とも驗ある此の藥劑を。

こは諸病一切を治すれど、
人は尙ほ狂氣と呼ぶ。

其の時未だ若いのに中風を病んで撞木杖をついてゐる男が、傷いた鳥の翼のやうに顏を顫はしつゝ、ドメニコ・ブオンヴィチノ師に近寄つて包物を渡した。

『何ぢやな、これは？これも畫かな？』

『解剖の物でございます。昨日は失念してお渡しせずにゐましたら今晩私を戒める聲が聞えました。これサンドロ、お前の商店の天井裏に未だ何程か虛榮品と禁制物が殘つてゐるぞよ——斯ういふお告げでございました。そこで起きて出て探しますと果して此の裸の畫が見付かりました。』

僧は快い微笑を湛へて件の包を取つた。

『さ、フィリッペビさん、これから結構な火を點けるのぢや！』

中風の男は尖塔を眺めて深い溜息を吐いた。

『神樣！神樣！憐れな罪人の私等に慈悲を垂れて下さいまし！考へれば若しかヂロラモ樣がゐなさらなければ私等の罪障は未だ滅しないのでございまする！今でさへ自分で自分の魂が救へるか何うか分りはしませぬ。』

そして十字を切つて、低聲で祈つて、珠數を押し揉んだ。

『誰です、あの人は？』とヂョーヴァンニがドメニコ師に訊ねた。

『サンドロ・ボッチチェルリと言ふもので皮を鞣すマリアノ・フィリッペビさんの倅ぢや。』

九

遂に夜の帳がフロレンスの上に落ちた時、群衆の間に囁きが傳はつた。

『來たぞ！來たぞ！』

行列は松明を點さず、聖歌を歌はず、肅々として徐々に進み來た。白衣の少年軍の先頭に立てるは幼年の耶蘇の蠟人形で、片手は頭上の荊冠を指し、片手で人々を祝福してゐる姿であつた。少年軍に續けるは僧侶、フロレンス中の牧師、旗手、八十人議政會の堂々たる紳士、伽藍の道心、神學博士、官吏、騎兵、警察長の組の者、傳令使、喇叭手などで、行列は廣場に着いて靜かに止まつた。そして事の執行に先づ沈默が群集の上に臨んで來た。サヴォナロォラはヴ

キオ宮殿前にある石の演壇に昇つて高く十字架を擧げ、朗々たる聲で命じた。

『父と子と聖靈の御名によりて火を點け！』

四名の僧が松明を持つて薪塚に近いた。直ちに四隅から火の手が上つてパチ〳〵音を發した。初の內は灰色の煙で、だん〳〵にそれが黑くなり渦を卷きながら天に冲した。喇叭が鳴つて僧達は神のために聖歌を歌ふし、少年軍は『イスラエル人の種族と光榮とを照して顯揚せしめよ』と齊唱した。

ヴェッキオ宮殿から鳴り出す大鐘の莊嚴且つ嚴肅な音は空中に動き響いて當府のあらゆる鐘樓はこれに和した。火は益々〳〵猛烈に益々〳〵赤々と立ち上つて、古本の纖弱な羊皮紙は縮れ上つて滅びてしまつた。最低の層から燄となつて上つた一塊の入毛は群集の嘲弄と哄笑の裡に飛び去つた。人々の內には祈るのもあり、泣くのもあり、叫ぶのもあり、踊るのもあり、手と巾と帽子を打ち振るのもあり、また未來の事を豫言するものもあつた。

『さ、兄弟、謠ふのだ。主のために新らしい歌を謠ふのだぞ！』と狂氣のやうな目をして跛足の靴屋が叫んだ。『世界中が崩れてるんだ！斯んな虛榮物が淨火の中で燃えるやうに何もかも燃えちまふんだ、燃えて恐ろしい滅亡に出會はすのだ。皆んな、皆んな、皆んな——敎會も法律も政府も權勢も美術も學問も皆んな然うなるんだ。一の石も石の上に圮れずしては遺らじだ！そして燃えた後に新らしい天が出來るんだ、新らしい地が出來るんだ。然うなれば神樣は私等の眼の涙をすつかり拭つて下さるんだ。死なんて云ふ物も亡くなるんだ。悲しむ事も泣く事も病氣も亡くなるんだ！お丶主耶蘇、來て下され！來て下され！來て下され！』

又痩せて顏に苦しみの影を宿せる若い孕み女（これは明かに貧に惱める職人の妻君と見受けられた）は跪いて、兩手を火の方に擴げて、夢々疑ひなく火中に基督の御影を拜んだと見えて、躍り上つて叫んだ樣は宛るで何かに取り憑かれた人のやうであつた。

『お丶耶蘇樣、耶蘇樣！いらつしやいませ、主耶蘇樣！入らつしやいませ。』

十

薪塚で燃えてゐる品々の中に一枚の畫があつて、赤く照り映えてはゐるが未だ火が付かずにあるので、ヂョーヴァンニは目を放す事が出來なかつた。蓋し此の畫は舊師レオナルドの筆に成つたもので、薄明時の調子の低い光の反映を受けて且つ帶のやうに山々に取り卷かる丶湖の波の上に寢て居るのは目炫しい程色の白いレダであつた。其のレダを一羽の大きな白鳥が羽を擴

げて蔽ひ被せ、長い頸を曲げて戀の勝利の歌を天地に響かせてゐるし、一方レダは自分の雙兒を見守つてゐた。ヂョーヴァンニは餓の進み寄るのを見詰めてはゐるもの丶心臟は神經的な恐怖のため高鳴りしてゐる。

其の時僧達はくすんだ色の十字架を廣場の中央に立て丶三位一體のためにとて互に手を連ねて三つの圈を作り、信仰者の靈の悅びを顯證して踊り始めた。初めは徐々に踊つたが段々早くなつて、最後には大旋風のやうになつた。そして踊りながら次の歌を謠つた。

あらゆる人よ、我れと共に叫べ！
絕えず狂へ、狂へ、狂ひて叫べ！
耶蘇の愚かなる下部に從ふ賢き人は
富貴、宴飲、歡笑や
榮耀、歡樂、金儲けを一蹴して——
智識のために憎惡すべきこれらをば
憂ひ、苦痛、赤貧に
甘じて變更するを喜ぶなり。
さらば敎徒は未だ狂たるを誇れかし——
常に耶蘇の愛のため
聖き狂憤を持するこそ
何に若くなき最大の喜びぞかし、
最大の樂しき慰めぞかし。

（ヒエロニモ・ベニヴィエニ）

觀衆の頭が搖れると共に手足はフラ〳〵と動いて、男女子供の別ちなく俄に狂熱な踊に加はつた。半人半羊の森林の神に似た一人の、體の自由の利かない老僧は、蹌踉き倒れて出血したため側の方へ投り出されたので、辛くも踏み潰されずに濟んだ。踊は依然グル〳〵廻つて、痙攣せる顏は紅の火をチラ〳〵する白熱の光に照らされてゐる。そして渦卷く踊りの圈の中央に不動の姿せる十字架は大きな影を投げてゐた。

我が心に輕薄なる知恵の萠すあらば
願はくは耶蘇よ恵みを垂れて
そを心より捨て給へかし、
常に唯狂熱のみを知らしめ給へかし、
何となればありとあらゆる哲學や
知恵、愼重、其の他の物をば
厭ひつゝ我は狂氣のみをぞ求むなる。

我が主耶蘇さればこそ
凡ての知恵と人間の事業とを
神は唯愚かとのみ見そなはさむ、
主の外の一切は空なる努力なれ。
主はこれ回生の泉、
さても此の泉より流るゝ稀有の水よ

一たび此處に渴を醫せし人は
主の愛のため狂氣に取り憑かるなれ。

下を爬へる火燄は遂にレダに及んだ。紅蓮の舌は白き身體を舐めてたので、それは生氣あるものゝやうに揚々となり、然かも其の瞬間に一層神秘な、一層美妙なものになつた。ヂョーヴァンニは身を震はせつゝ靑くなつて見詰めると、レダは自分に最後の微笑を見せて火中に沒してしまつた。日の出時の雲のやうにレダは永遠に失せたのである。

そして今や尖塔の頂上の大きな惡魔に火が屆いたが、其の腹には煙硝を一杯に詰めてあるので、轟々たる凄い音を立てゝ破裂した。火の柱は天に冲した。怪物は炎々たる椅子の上に蹌踉いてガクリ俯首き、下に落ちて、消えかゝる火燼の粉となつて散亂した。

と、太鼓喇叭が響いてあらゆる鐘は鳴り渡り、群衆は勝利のどよめきを揚げたが、其の有樣はサタン其の者が全地球の虛僞、苦痛、罪惡と共に神聖な薪塚の燄の中に滅び去つたかのやうであつた。ヂョーヴァンニは兩手で顳顬を押へて逃げ出さうとする途端、自分の肩を捕へた手があつた。振り返つて見ると、こは如何にレオナルド先生が例の靜穩な亂れない顏をして傍に立

つてゐる。レオナルドはヂョーヴァンニの手を執つて群衆の中から連れて行つた。

十一

二人は廣場を出た。廣場には人を窒息せしめるやうな煙が雲かとばかり瀰漫して、消えなんとする薪塚の火がなほ照つてゐた。ヂョーヴァアンニとレオナルドは暗い小路を通つてアルノ河の岸に出た。此處は物皆沈靜の氣にみち漲つて、蒸發氣は柔かに呟きながらスラ〳〵と流れ去つた。星はキラ〳〵と寒く輝いて、月は銀色せる榮光の洪水の中に山々を浸けてゐた。

『ヂョーヴァンニ、何故君は私を捨てました？』とレオナルドは言つた。

弟子は目を擧げて言葉を發しようとしたが聲は喉につまつて唇が戰慄した。彼はワッと泣き出した。

『先生……宥して下さい！』

『あなたは私に何も惡い事をした譯ではありません。』

『何うしてあんな事をしたのか自分ながら分らないのです』とボルトラフィオは口の中で言つた。『本統に何うして先生の處を出たのでせう？』

彼は自分の苦痛と狂氣と恐ろしい疑惑の懊惱を語りたかつたが、何時かミランのフランチェスコ・スフォルツァの巨像の前の時のやうに、先生は自分の言ふ事を理解しまいと思つたので、失望的な懇願を求めながら先生の目を眺めた――靜粛として明るい、自分とは星のやうにかけ離れた先生の目を眺めた。

弟子の心の葛籐を察してか先生は最早や問ひを發しなかつた。そして無限の深切の籠つた微笑を堪へて少年の頭上に手を載せた――

『可哀相な君を神は助けて下さいます。私が君を愛子のやうに可愛がつてゐた事は君にも分つてゐませう。何うです私の家へ戻つては？私は喜んで君を迎へます。』

尋いで聞えない位の聲で自分獨りで言ふやうに附加した。

『感情が深くなればなるだけ愁ひが增すものだ。詰まり殉教者の一人なのだ！』

鐘の音、聖歌の聲、狂せる群衆の叫びが遠くから來た。併し先生と弟子とは樂しかつた。

八の巻　黄金時代――一四九六年―一四九七年

黄金時代は華やかに歸り來りて
凡ては歌はん、イル・モロ萬歳！と。

ベルリンチョニ。

一

ミラン公の妃ベアトリチェ・デステはマンツァ公の君主フランチェスコ・ゴンヅァガ侯の妃、即ち自分には妹に當るイサベルラに送るべき手紙を机に凭つて書いてゐる――

最ともいみじき愛らしの妹の君、妾と妾の君ルドヴィコは御身の健康と御身の名だゝる君公フランチェスコ陛下の健康とを祈り申し候。

御身の御所望にまかせ若子マッシミリアノの姿繪を御送りいたし候が繪のやうに小さきもの

と思召しなきやうに願ひ上げ候。瑧と背丈を測りて差し上げたく候へども、かくては生長の妨げと相成り候はんと乳の人の申し候につき殘念ながら斷念いたし候。實際はマッシミリアノの生長は驚くべきものにて、二日も見ぬうちに非常に大きう成り候ゆゑ嬉しさの餘り躍り上ること有之候。

當方の宮廷に取りての大なる悲しみは少年の童坊ナンニノが死去の事に御座候。御身は彼を深く知り深く愛したまひしゆゑ、たとひ妾は他の損失を回復し候とも、ナンニノの缺損ばかりは自然すらこれを充し得ざる事御身にも御察し遊ばし下さる事と存じ候。自然は疑ひもなく君主達の娯しみにとてナンニノを作り候ひしゆゑ、此の上もなき庇弱と此の上もなく面白き畸形とを結び合はせたるに相違あるまじく候。ベルリンチオニは甚だ美はしき哀悼の歌を作り候。其の大意はナンニノ天にあらば樂園に笑聲滿つべく、若し地獄にあらばチェルベルスすら齒を露はして哄笑せんといふに候ひし。遺骸は泣きの涙にて聖母寺（サンタ・マリア・デルレ・グラチエ）にある我がスフォルツァ家の廟に葬り候。妾の愛てたりし鷹、忘れ難き牝犬ブッチナの傍にてナンニノは眠りをり候。かくまで喜ばしき妾の持物に候ゆゑ、死は何條これを妾より奪ふを得べき、二夜續けて妾は泣き通し申し候。ルドヴィコ陛下は妾を慰めんとの心よりクリスマスの贈物を妾に約束いたし候。こは物語に名高き半人半馬のセンタウルとラピテ人との戰へる樣を浮彫に出せる見事なる銀の腰掛にて寢臺の傍に置くものに御座候。内部は甚だ重き純金にてしつらへこれに錦模樣の天鵞絨を添ふべく、天鵞絨には我が公家の紋を刺繍いたす筈にて、箇樣なる腰掛を有する君主は他にあるまじく候。法王猊下といへど、神聖帝國の皇帝陛下といへど、大土耳古王といへど決して所有いたさず候。しかも美しさにかけてはマルチアルの短詩に見えたる名高き腰掛をも凌ぐべく候。我が君ルドヴィコは此の内部にオルガンを据ゑ附くべき工夫をレオナルド・ダ・ヴィンチに命じたまひしも、巨像乃至『最後の聖餐』を仕上げたしてふ薄弱なる口實を設けて辭退いたし候。御身は此の畫家を暫らく借りたしと申越されしゆゑ妾は喜んで御身の求めに應じたきは山々にて、貸し參らすは愚か、さら〳〵進上いたすも苦しからず候へども、如何なる理由の候てか我が君ルドヴィコは此の者を寵愛し給ふこと甚だしく、全世界の黄金を積み候とも側を放す事を承知いたさず候。されど此の事に就いて餘り落膽をなさるまじく候。第一此の者は錬金術、器械、魔法、其の他くさ〳〵の愚かなる事に夢中になりをり候ため、繪畫に心を傾くる事は滅多に之れなく候。第二に人より受けたる依頼はすべて遲々として容易に成就いたさず候ゆゑ天使すら堪へ袋の緒を切らすべく候。第三にレオナルドは不信心者に御座

候。

此の頃狼狩をいたし候、目下五月に候妾は馬に乘るわけに行かざりしかど、妾のため特に設けたる演壇やうにしつらひたる車の附きたる高き壇より獵の模樣を見物いたし候。さりながら此の壇にて妾は樂しみよりも苦しみたる方多く候ひき。森に逃げ這入りたる狼を見て腹立たしさの餘り打ち泣き申し候、妾だに馬上にあらば縱しや肩の骨を挫くとも斯くの如き逃走をなさしめざりし事は御身に斷言するに憚らず候。

妹どの、妾達が馬を跑けさせし頃の事思ひ出たまはずや。ベンテシレアが馬の上より溝に落ちて殆くも命を損ぜんとしたる事、クスナゴの猪狩、テニスの事、釣の事――あの頃の樂しかりし事よ。

されど當ミランにても出來得る限りは遊戯に興じをり候。カルタ、スケートなどは面白き技に御座候。スケートと申すは甚だ興味ある遊戯にて、フランドルの或る紳士が當宮廷に傳授したるものに係り、これと申すも冬の寒さは仲々に嚴しく、湖はもとより川といふ川は殘らず氷に鎖さるゝからの事に候。御苑内にレオナルドは最も美はしきレダが白鳥に抱かれをる形を雪にて作り候。春にならば憐れにも溶けなんものを。

我が妹どの、御身は如何に暮らしたまふにや。長き毛の猫の子は首尾好く成育いたし候や。若し目の碧き金茶色の子猫の牡御持ち合せに候はゞ、何日ぞや御約束遊ばされ候黑人の若き女と共に御送り下されたく、其の返しとして妾よりは小さき牝犬の出產いたし候次第其の子を一匹進上いたすべく候。

なほ其の節は水色せる繻珍の羽織の見本を取り落し遊ばさぬやうに願ひ上げ候。斜めに裁ちたる襟形と黑貂の緣をも合はせて願ひ上げ候。此の緣の事は先日の手紙にて申し上げ候ものゆゑ、至急御屆け下されたく、明朝早く騎馬の使者を遣し下され候はゞ此の上もなく宜しく候。

又其の序手に御身御自慢の瘰癧の膏藥を一瓶と爪を磨く舶來の木を少々下されたく候。

當宮廷の星占師は明年の夏の暑氣甚しき事、又戰爭の開始を預言いたしをり候。御身の方の預言者は何と申し候や。人の信念は常に他人の星占師と符合いたすものに候。

妾ならびに妾の君ルドヴィコは妾が愛妹たる御身ならびに御身の名高きフランチェスコ陛中に宜しく申上候。

二

右の手紙はさも打ち解けた書振りであるにも拘らず、其の實は巧妙な言ひまはしの滿てるもので、ベアトリチェは内々の心配と懊惱を秘して妹に語らなかつたのである。實際のところルドヴィコとベアトリチェの間には殆ど平和がなかつた。ベアトリチェがレオナルドを嫉視した理由は異教のためでもなければ無神論のためでもなく、自分の最も憎い敵手たるチェチリア・ペルガミニの像を描いたからであつた。それに此の頃は侍女の一人ルクレチア・クリヴェルリに對しても内所事の嫌疑をかけぬでもなかつた。

ルドヴィコの權勢は當時絶頂に達してゐた。ロマーニャから來た半分は兵士、半分は强盜たる勇敢な傭兵フランチェスコ・スフォルツァの子息として、彼は伊太利を一統して其の君主たらん事を夢みて居た。

そして得々として、『法王は朕の宮廷牧師、神聖帝國の皇帝は朕の將軍、ヴェニスは朕の國庫、佛蘭西王は朕の傳令使になるのだ』と言つてゐる。

彼はエーニアスの友でトロイ人なるアングルスの系圖を引いてゐるといふので、御璽に、『南方の君主ルドヴィクス・マリヤ・スフォルチア・アングルス』と彫つた。父フランチェスコの記念碑、則ち『此の神を見よ』との銘ある所謂巨像はスフォルツァ家の神聖なる源流を顯證する一法として建設されたのであつた。然かも外面は斯くの如く隆盛を極めてゐながら、公には心配と人知れぬ恐怖に苦しめられてゐた。人民の信愛が自分に懸かつてゐない事は分つてゐるし、それに君位の簒奪者である事をも承知してゐた。嘗てアルレンゴの廣場でヂアン・ガレアッツォ公の未亡人が長子を抱いてゐたが、それと見た人民は『正統の君フランチェスコ公萬歳！』と叫んだ事もあつた。

其の長子といふのは當年八歳で、怜悧と美貌とを以て名が聞えてゐた。ヴェニスから來てゐるマリン・サヌトは此の少年の事を書翰で報じて、人民は君主に奉戴せんとして彼を要望する事猶神を要望するに異らずと書いた。ベアトリチェもルドヴィコもヂアン・ガレアッツォの死は以て我等をミランの君主となすに充分でなかつたと悟つた。蓋しガレアッツォ公の亡靈が墓を出て此の子に宿つてゐるからで。

怪異に就いての噂が當府に傳はつてゐた。夜、宮城の塔の上に怪しい火が燃えて其の赤さは殆ど火事のやうであつた。宮廷の部屋からは苦悶の唸り聲が聞える。ヂアン・ガレアッツォ公が